

青森県埋蔵文化財調査報告書 第381集

三内丸山遺跡 23

- 第23次・26次調査報告書 -

平成 15 年 度

青森県教育委員会



第26次調査区全景（南東から）

口絵 1



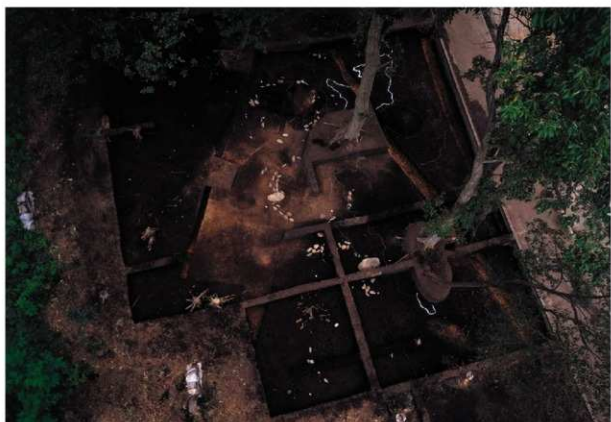
第23次調査区全景（北東から）



第26号配石遺構（北東から）



第3号配石遺構（東から）



第37・38・39・40号配石遺構（南から）



道路跡のエレベーション（北西から）



道路跡上面に広がる黄褐色のロームブロック



同左



第26次調査D区貼り土分布状況（北東から）



貼り土の断面（東から）

序

青森市に所在する三内丸山遺跡は、縄文時代前期から中期にかけての大規模な集落跡です。

平成 4年度から開始した発掘調査によって、円筒土器文化を代表する学術的に極めて重要な遺跡であることが判明し、青森県は三内丸山遺跡を貴重な文化遺産として保存し、広く活用をはかるため、整備をすすめることを決定いたしました。その基礎資料を収集し、学術的解明を進めるため、発掘調査を継続的に実施しており、平成 9年 3月には国史跡、そして、平成 17年 11月には国特別史跡の指定を受けたところであります。

本書は、三内丸山遺跡の集落跡の全体像を解明するために、平成 14・15年度に実施した発掘調査の結果をまとめたものです。

調査の結果、集落南西側の墓域と道路跡がさらに南東側に延びていることが判明するなど、集落の構造がより具体的に明らかになりました。

調査の成果は、三内丸山遺跡の整備や学術研究に活用していく所存ですが、今後の埋蔵文化財の保護と研究に役立てば幸いです。

終わりに、調査の実施及び本書作成にご尽力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 16年 3月

青森県教育委員会

教育長 花 田 隆 則

例 言

- 1 三内丸山遺跡では、各調査名を平成7年度の調査開始から第1次、第2次…と着手順に呼称している。
- 2 三内丸山遺跡は、平成14年3月29日付けで周知の遺跡範囲について変更を行った。旧遺跡名の小三内遺跡(旧遺跡番号01017)、近野遺跡(同01065)の一部、三内丸山遺跡(1)遺跡(同01020)、三内丸山遺跡(2)遺跡(同01021)を統合し、三内丸山遺跡とした。新遺跡番号は01021である。
- 3 報告書の執筆者名は、文末に明記した。
- 4 本遺跡の遺構番号は種類毎に通し番号を付してある。
- 5 挿図の縮尺は、各図に示している。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 6 遺構図面の記載にあたっては、土器・P、石器・石・Sの略記号を用いた。
- 7 石器・石製品の石質鑑定は、青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室室長佐藤が行った。
- 8 本書に掲載した地形図(遺跡の位置)は、国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を複写したものである。
- 9 遺構・遺物の文・図中での表現は原則として次の様式・基準に従った。

遺構番号は一部を除いて発掘調査時のものを用いている。

遺構内外の堆積土の注記は、「新版標準土色帖」(小山、竹原1990)を用いた。

原則として、遺物には観察表・計測表を付し、出土地点、分量及び諸特徴を一覧できるようにした。

遺構名については、配置図・観察表中で以下の略称で表記している。

第 号土坑 - 土、第 号配石 - 配、第 号埋設土器遺構 - 埋、第 号ピット - Pit
第 号溝 - 溝

縄文原体は、山内清男「日本先史土器の縄紋」(先史考古学会 1979)を参考に分類し、記述はそれに従った。ただし、観察表では以下のように省略した。

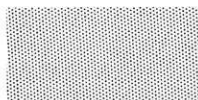
結節回転文 - 結回、単軸絡条体 類 - 単絡、多軸絡条体 - 多軸絡

また、表中では、縄文原体の回転文の場合は種類のみ、押圧文の場合は種類の後に「押」を付け加えている。隆帯・貼付上の施文文様は「隆帯」・「貼付」の後に括弧書きで記した。

石質は観察表において以下のように略称した。

玉 - 玉髄、頁 - 頁岩、玉珪 - 玉髄質珪質頁岩、珪頁 - 珪質頁岩、黒 - 黒曜石、鉄 - 鉄石英、凝 - 凝灰岩、砂 - 砂岩、安 - 安山岩、流 - 流紋岩、閃 - 閃緑岩、緑細凝 - 緑色細粒凝灰岩、細凝 - 細粒凝灰岩、溶凝 - 溶結凝灰岩、軽 - 軽石、輝 - 輝緑岩、花 - 花崗岩、花閃 - 花崗閃緑岩
- 10 引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と西暦年を示した。

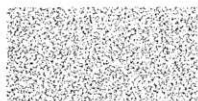
- 11 発掘調査によって出土した遺物および実測図・写真等の記録類は、現在、青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室が保管している。
- 12 第23、26次調査に関しては、本報告書がこれに先立つ全ての資料・文献等に優先する。
- 13 発掘調査で使用した座標系は、「使用測地系 日本測地系（改正前）」である。
- 14 図中に使用したスクリーントーンは以下のものを示す。



たたき



光沢



すり



地山

目 次

口 絵	
序	
例 言	
目 次	

第 1 章 調査の概要	
第 1 節 調査目的	1
第 2 節 調査要項	4
第 3 節 調査の方法	7
第 4 節 整理の方法	8
第 5 節 遺物の分類	9
第 6 節 調査の経過	11
第 7 節 調査区の層序	13
第 8 節 調査の概要	15
第 2 章 検出遺構と遺構内出土遺物	
第 1 節 縄文時代の検出遺構と遺構内出土遺物	19
1) 配石遺構・環状配石墓	19
2) 土坑・土坑墓	51
3) 埋設土器遺構	56
4) 道路跡	57
第 2 節 平安時代以降の検出遺構	70
1) 溝跡	70
検出遺構一覧	71
第 3 章 遺構外の出土遺物	
第 1 節 遺構外出土土器	72
第 2 節 遺構外出土石器	88
第 3 節 遺構外出土石製品・土製品	106
第 4 章 調査の成果と課題	
1) 道路跡と環状配石墓に関する調査方法	108
2) 墓域について	109
3) 道路跡について	110
引用・参考文献	112
特別史跡三内丸山遺跡発掘調査報告書一覧	114
写真図版	115
報告書抄録	163

第 章 調査の概要

第 1節 調査目的

三内丸山遺跡では、平成 6年に保存が決定され、平成 7年 3月には遺跡整備のための青森県総合運動公園遺跡ゾーン基本構想が策定された。この基本構想を受け、県教育委員会では遺跡の学術的解明のための発掘調査を継続して行っており、平成 7年度からは文化庁の補助金の交付を受け、国史跡指定に向けての範囲確認調査（第 1～ 7次調査）を実施し、平成 9年 3月には国史跡、平成 12年 1月には国特別史跡に指定された。

しかしながら、30数ヘクタールにおよぶ遺跡全体については、これまでの試掘調査で各種遺構が存在することは判明しているものの、集落の全体構造とその変遷、あるいは各遺構群相互の関係等、なお多くの課題がある。これらの課題を解決するための必要な調査であるとともに、中・長期的な保存、活用、整備計画の策定や推進のためにも、必要箇所について発掘調査を継続して実施するものとしている。

このため、平成 10年度に策定した発掘調査計画に基づき、調査目的及び調査地点の選定については三内丸山遺跡発掘調査委員会の検討結果を受け、集落の全体像と当時の生活環境の解明を当面の課題として、平成 14年度に第 23次調査を、平成 15年度に第 26次調査を実施した。これまで、第 23次調査区および第 26次調査区周辺の集落南西側では、平成 10・ 11・ 12・ 13年度の発掘調査（第 13次・ 第 14次・ 第 17次・ 第 20次調査）を通じ、縄文時代中期の道路跡と墓域の範囲確認を継続して行っている。

第 23次調査は遺跡北地区で、平成 13年度に実施した第 20次調査区周辺で立ち木の伐採が行われ、隣接する未調査区域の調査が可能になったことを受けて、この周辺での墓域と道路跡の範囲確認を主な目的とした。

第 26次調査は遺跡北地区で、平成 14年度に実施した第 23次調査区周辺で園路等の公園整備計画が進んでおり、第 23次調査区より南東側での墓域と道路跡の範囲確認を主な目的とする。

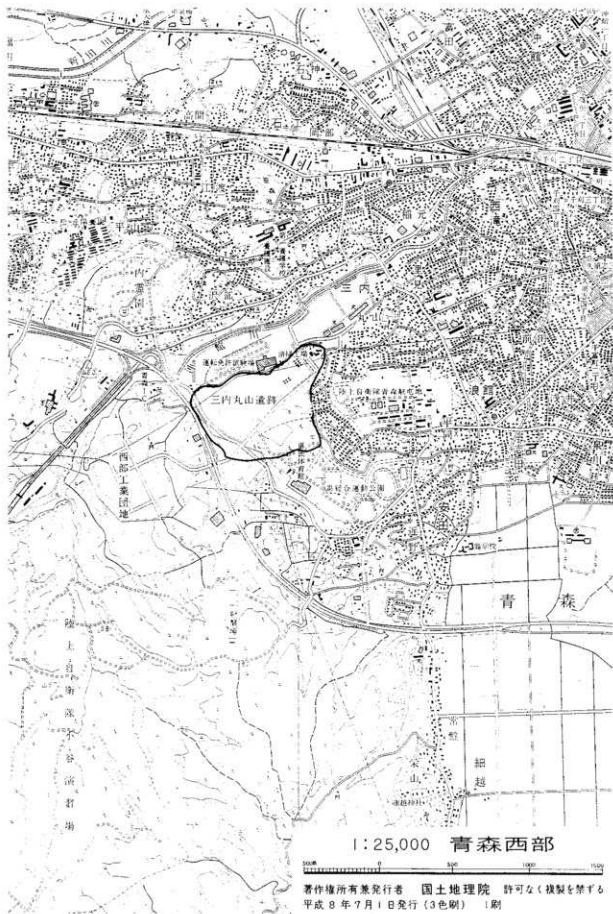
（佐々木 雅裕）

年 度	調査地点と調査目的	調 査 主 体
平成 4年度	野球場建設予定地本調査	県埋蔵文化財調査センター
	第 6鉄塔地区本調査	
	第 7鉄塔地区本調査	
	第 8鉄塔地区本調査	
平成 5年度	野球場建設予定地本調査	"
	第 6鉄塔地区本調査	
平成 6年度	野球場建設予定地本調査	"
	野球場取り付け道路建設予定地試掘調査	

表 1 発掘調査一覧(1)

年 度	調査地点と調査目的	調 査 主 体
平成 6年度	サッカー場建設予定地試掘調査	県埋蔵文化財調査センター
	テニスコート建設予定地試掘調査	
	近野遺跡地区試掘調査	
平成 7年度	第 1次調査（北地区、集落の範囲確認）	三内丸山遺跡対策室
	第 2次調査（北地区、貯蔵穴の範囲確認）	
	第 3次調査（北地区、貯蔵穴の範囲確認）	
	第 4次調査（北地区、土坑墓の範囲確認）	
平成 8年度	第 5次調査（南地区、集落の範囲確認）	＃
	第 6次調査（北地区、低湿地の調査）	
	第 7次調査（北地区、土坑墓の範囲確認）	
平成 9年度	第 8次調査（北地区、土坑墓と道路跡の範囲確認）	＃
	第 9次調査（北地区、木柱周辺の遺構確認）	
	第 10次調査（南地区、集落範囲と変遷の確認）	
平成 10年度	第 11次調査（南地区、集落範囲と変遷の確認）	＃
	第 12次調査（北地区、低湿地有機質遺物と遺構の確認）	
	第 13次調査（北地区、墓域の確認）	
平成 11年度	第 14次調査（北地区、環状配石墓の範囲確認）	＃
	第 15次調査（北地区、遺物包含層の範囲確認）	
	第 16次調査（北地区、竪穴住居跡の年代の確認）	
平成 12年度	第 17次調査（北地区、墓域の範囲確認）	＃
	第 18次調査（北地区、集落範囲と変遷の確認）	
	第 19次調査（北地区、掘立柱建物跡の精査と木柱取り上げ）	
平成 13年度	第 20次調査（北地区、遺跡整備に伴う環状配石墓と道路跡の範囲と年代の確認）	＃
	第 21次調査（北地区、墓域との範囲と年代の確認）	
	第 22次調査（北地区、竪穴住居跡及び粘土採掘坑などの範囲）	
平成 14年度	第 23次調査（北地区、墓域と道路跡の範囲確認）	＃
	第 24次調査（北地区、墓域の範囲確認）	
	第 25次調査（北地区、掘立柱建物跡の精査）	
平成 15年度	第 26次調査（北地区、墓域と道路跡の範囲確認）	＃

表 2 発掘調査一覧(2)



1図 遺跡位置図

第 2 節 調査要項

1 調査目的

特別史跡三内丸山遺跡の発掘調査を行い、集落の全体像を解明し、今後の保存活用に資する。

2 調査期間 第 23 次調査 平成 14 年 5 月 1 日～平成 14 年 10 月 3 日

第 26 次調査 平成 15 年 5 月 2 日～平成 15 年 9 月 1 日

3 遺跡名及び所在地 三内丸山遺跡 青森市大字三内字丸山 30 外

4 調査面積 合 計 4 53 平方メートル

第 23 次調査 1 84 平方メートル

第 26 次調査 2 69 平方メートル

5 調査主体 青森県教育委員会

6 調査担当機関 青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室

7 調査協力機関 青森市教育委員会

8 調査員等

(平成 14 年度)

調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所顧問 (考古学)
	市川 金丸	青森県考古学会会長 (考古学)
調査協力員	角田 詮二郎	青森市教育委員会教育長
調 査 員	高鳥 成侑	八戸工業大学教授 (建築史)
	山口 義伸	文化・スポーツ振興課歴史編さん室総括主幹 (地質学)
	赤沼 英男	岩手県立博物館主任専門学芸調査員 (保存科学)

(平成 15 年度)

調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所顧問 (考古学)
	市川 金丸	青森県考古学会会長 (考古学)
調査協力員	角田 詮二郎	青森市教育委員会教育長
調 査 員	高鳥 成侑	八戸工業大学教授 (建築史)
	山口 義伸	県立浪岡高等学校教諭 (地質学)
	赤沼 英男	岩手県立博物館主任専門学芸調査員 (保存科学)

9 調査担当者

青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室

(平成14年度)

文化財保護総括主査	中村 美杉
文化財保護総括主査	齋藤 岳
文化財保護主事	秦 光次郎
文化財保護主事	佐々木 雅裕
文化財保護主事	大平 哲世
文化財保護主事	神 智江
調査補助員	沼畑 伸一、津幡 圭介、萩坂 華恵

(平成19年度)

文化財保護主幹	川口 潤
文化財保護主幹	中村 美杉
文化財保護総括主査	齋藤 岳
文化財保護主事	秦 光次郎
文化財保護主事	佐々木 雅裕
文化財保護主事	大平 哲世
文化財保護主事	田中 珠美
調査補助員	沼畑 伸一、津幡 圭介、萩坂 華恵



- 第 1次調査区(平成 7年)
- 第 2次調査区(平成 7年)
- 第 3次調査区(平成 7年)
- 第 4次調査区(平成 7年)
- 第 5次調査区(平成 8年)
- 第 6次調査区(平成 8年)
- 第 7次調査区(平成 8年)
- 第 8次調査区(平成 9年)
- 第 9次調査区(平成 9年)
- 第 10次調査区(平成 9年)
- 第 11次調査区(平成 10年)
- 第 12次調査区(平成 10年)
- 第 13次調査区(平成 10年)
- 第 14次調査区(平成 11年)
- 第 15次調査区(平成 11年)
- 第 16次調査区(平成 11年)
- 第 17次調査区(平成 12年)
- 第 18次調査区(平成 12年)
- 第 19次調査区(平成 12年)
- 第 20次調査区(平成 12年)
- 第 21次調査区(平成 13年)
- 第 22次調査区(平成 13年)
- 第 24次調査区(平成 14年)
- 第 25次調査区(平成 14年)

2 調査区位置図

第 3 節 調査の方法

平面座標は、平成 4 年度から同一の座標系を使用している。座標の基準点には、平成 4 年度に調査区内に設定された野球場建設工用の杭を使用した。日本測地系に基づき、杭 No 21 (日本測地系第 X 系 $X = 89\,860\,000Q$ $Y = 11\,160\,0000$) と杭 20 ($X = 89\,860\,000Q$ $Y = 11\,80\,0000$) を結ぶ直線を東西の基線 100 ($X = 89\,860\,0000$)、これに直交し杭 2 を通る直線の南北の基線 A ($Y = 11\,160\,0000$) とし、杭 2 の座標名を A - 100 とした。(註 1)。

この座標に基づき、20 20m の大グリッド、4 4m の小グリッドを設定した。東から西に A・B・C…とアルファベットを、北から南へ 1・2・3…と算用数字を付し、座標交点は東西のアルファベット・南北の算用数字の形で表記している。グリッドは北東隅の座標交点をもって呼称することとした。なお、アルファベットが重複する場合には、最初にローマ数字を付して区別した。ベンチマークは県総合運動公園内の水準点 (H = 16 071m) から引用し、必要に応じて調査区内の適地に随時設定した。

基本層序は、平成 4～6 年度に実施した旧野球場建設予定地の発掘調査における設定を基準に、各調査区で認定した。層名は、層序の上位から下位にローマ数字を付し、遺構内堆積土については算用数字を付して呼称している。土色は『新版標準土色帖』(小山、竹原 1990) に従い、マンセル記号を用い記録した。

遺構の掘り下げにあたっては、分層発掘を行うことを原則とした。遺構分布の確認を最優先としているため、検出遺構の分布状況によっては調査区の拡張も行った。

確認した遺構はその種類毎に、平成 4 年度の発掘調査開始時からの順番で遺構番号を付している。遺構の精査にあたっては、調査目的に従い検出遺構の選定を行った。

遺構の精査は原則として二分法・四分法で行い、堆積土観察用ベルトを設けて土層を観察しながら進めた。

遺物の取り上げは、遺構単位・グリッド単位・層序単位で行った。遺構内出土遺物のうち、時代決定のできる遺物については極力その出土位置の記録を行った。

遺構の実測は、簡易遣り方と光波測量器による測量を併用している。実測時の縮尺は 1 20 を基本としたが、種類や規模の大小により 1 10、1 40、1 50 の他とした。

写真記録は、主に 35mm ノクロームとカラーリバーサル の 2 種を併用し、作業の進展に応じて行った。特に重要と判断したものは、60 45mm のカラーリバーサルを用いた撮影も行った。

(佐々木 雅裕)

- (註 1) 日本測地系に基づいた座標系は、平成 4 年から使用している。過去の報告書の中に「杭 No 21 を A - 100 とし、「磁北を基準」と記載されているが、近野遺跡発掘調査報告書 (青森県教委 2002) での指摘のとおり、それぞれ「杭 No 21 を A - 100 とし、「日本測地系における」座標北を基準」が正しい。

第 4 節 整理の方法

室内整理は、平成 14 年 1 月から同 16 年 3 月までの期間で、青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室松原分室および三内丸山遺跡分室の整理室で行った。以下に遺構と遺物についての整理作業の手順を示す。

遺構

発掘調査時に記録した図面（原図）のグリッド、セクションポイント等の確認、位置と標高の換算を行った。平面図・断面図を鉛筆でトレースし、2 次図面を作成した。また、土層注記は注記表に簡潔化して記載した。

掲載した図はページの上方が北方向になることを原則としている。ただし、大型の遺構および遺構配置図についてはその限りではない。各遺構の掲載時の縮尺は 1/50 を基本としているが、遺物の微細図等、状況に応じて縮尺を変更しているものもあり、それぞれの図にスケールを付した。また、位置を確認するため、平面図ごとにグリッドを入れている。なお、図中に記したアルファベットは以下のものを示す。

P・・・土器、S・・・石器、L B・・・ロームブロック

遺物

遺物は水洗い、注記、復元作業等を行い、選別の後、実測または採拓を行った。

土器は径の 1/3 以上を復元し得たものは可能な限り実測図を作成した。また、それ以外の土器片については時期が明確なものを中心に断面実測および採拓を行った。

石器・土製品・石製品のうち、主な遺物は図化し掲載した。剥片石器は委託実測を併用し、敲磨器類については職員および整理作業員が実測を行った。石器の実測図に使用したスクリーントーンは、例言を参照されたい。

これらの遺物について、掲載したページの下側に遺物観察表を付した。縮尺は、土器は 1/2 または 1/3、土偶・土製品・石製品は 1/2、礫石器は 1/3、磨製石斧・剥片石器は 2/3 である。

また、掲載遺物の写真撮影については、専門家に委託した。掲載時の縮尺は約 1/3、2/3、その他である。

本報告書に掲載した遺物および遺構原図・写真等の記録類は、三内丸山遺跡分室内の遺物収蔵庫で保管している。

（佐々木 雅裕）

第 5 節 遺物の分類

土器

土器は時期ごとに以下のように分類した。

第 群 縄文時代草創期～早期

第 群 縄文時代前期

1類 円筒下層 a 式より古く位置づけられる土器群

2類 円筒下層 a 式に位置づけられるもの

3類 円筒下層 b 式に位置づけられるもの

4類 円筒下層 c 式に位置づけられるもの

5類 円筒下層 d 式に位置づけられるもの

さらに 2つに細分する 1 d 式

2 d 式

6類 1～5類で時期を特定できないもの

第 群 縄文時代中期

1類 円筒上層 a 式に位置づけられるもの

2類 円筒上層 b 式に位置づけられるもの

3類 円筒上層 c 式に位置づけられるもの

4類 円筒上層 d 式に位置づけられるもの

5類 円筒上層 e 式に位置づけられるもの

6類 1～5類で時期を特定できないもの

7類 櫛林式以前に位置づけられる大木式土器系のもの

8類 櫛林式に位置づけられるもの

9類 最花式・中の平 式に位置づけられるもの

10類 大木 10式併行に位置づけられるもの

1類 8～10類で時期を特定できないもの

第 群 縄文時代後期

1類 十腰内遺跡第 群以前に位置づけられるもの

2類 十腰内遺跡第 群に位置づけられるもの

第 群 縄文時代晩期

第 群 弥生時代

石器

石器は形態・機能に応じて以下のように分類した。

A 類 石鏃

a 有茎 T 基のもの

b 有茎 Y 基 "

尖基 "

d 平基 "

e 円基 "

f 凹基 "

B 類 石槍

a 無茎のもの

b 有茎 "

C 類 石匙

a 縦型のもの (以下の d～e に該当するものを除く)

b 横型のもの (")

c 斜型のもの (")

d 両面加工で石槍状の先端をもつもの

e " 石錐状の "

f 四角形の短辺部分に抉りをもち、長辺部分を刃部とするもの

g 細部加工がほとんど加えられないもの

D 類 石錐

a 棒状のもの

b つまみがあるもの (以下の c に該当するものを除く)

c 先端のみつくりだしたもの

d 石鏃を転用したもの

E 類 石腕

a 短冊型のもの

b 撥型 "

F 類 ビエス・エスキーユ

- G類 不定形石器
- a いわゆるスクレイパー類
 - b いわゆるR、フレイク
 - c いわゆるU、フレイク
- H類 石斧
- a 磨製石斧
 - b 打製石斧
- I類 敲磨器類
- a 主に凹のあるもの
 - b " 敲打痕 "
 - c " 磨痕 "
- J類 半円状扁平打製石器
- K類 挟入扁平磨製石器
- L類 石皿・台石類
- M類 石棒類
- a 石棒
 - b 石刀
- N類 石錘
- O類 石冠
- a 北海道式石冠
 - b 三角柱状もしくは斧状の突出部を持つ磨製石器
- P類 石核類
- a 石核
 - b 原石
 - c 剥片・砕片（剥片石器の製作に関するもの）
 - d 剥片・砕片（礫石器の製作・使用に関するもの）
- Q類 その他
- R類 異形石器
- S類 砥石
- a 楕円礫を素材とし顕著な擦痕を持つもの
 - b 扁平あるいは板状の礫を素材とするもの
 - c 大型のもの（L類から分離されるもの）
- T類 軽石・軽石製品
- a 使用痕・加工の認められないもの
 - b 使用痕・加工の認められるもの
- U類 角柱状の礫・礫石器
- a 使用痕・加工痕の認められないもの
 - b 使用痕・加工痕の認められるもの
- V類 擦切具
- W類 礫

（土器：田中 珠美、石器：佐々木 雅裕）

第 6 節 調査の経過

第 23 次調査

第 23 次調査は、5 月 13 日から開始した。調査区内の層序とその層厚を確認するため、A 地区の E・F・G-178・179 から先行して調査を行った。調査を開始するにあたり、表土を除去した後、予めボーリング調査を行い配石遺構の所在について確認した。第 16 号配石遺構の例（第 14 次調査）に示されるような、配石内に土盛りを伴う可能性も考慮し、ボーリング調査の結果を踏まえて遺構の中心を通る土層観察用ベルトを設定し、注意を払い検出作業を進めた。その結果、5 月上旬には F・G-178・179 において第 3 号配石遺構を検出した。

その後、先行調査の結果を踏まえて、5 月下旬に職員の立ち会いのもと層厚を確認しながら重機による表土の除去作業を行った。グリッド、ベンチマークはともに第 20 次調査区に準じて設定し、各グリッド単位にセクションベルトを設定して遺構の検出に努めた。昨年度までの調査結果及び先行調査の結果から、調査区南西側と北東側に環状配石墓の所在が予測されたため、6 月上旬から 7 月上旬にかけて調査の範囲を広げ、ボーリング調査を先行させて調査にあたった。その結果、調査区の南西側で 4 基の環状配石墓（第 29・30・31・3 号配石遺構）を、北東側で 1 基の環状配石墓（第 3 号配石遺構）を検出した。

また、道路跡の検出作業も併行して行い、道路跡の検出に際しては、これまで道路跡の特徴と把握されていた第 1 層を起源とする黄褐色のロームブロックの広がり、地層の平面分布の観察により掘削された痕跡についての把握に努め、硬化面についても注意を払い検出にあたった。このため、道路跡と墓列の時間的關係が把握できるよう、各グリッド単位に、あるいは斜面に対して直交する土層観察用ベルトを設定し検出作業を進めた。7 月中旬から、道路跡の上面におけるロームブロックの分布と、道路跡の中央が掘削により第 1 層が、地点によっては第 1 層の上層までが欠落するあり方が確認され、道路跡の様相が明確になるとともに、次いで 8 月上旬には道路跡の両側に環状配石墓が並んでいる状況がこの墓域で初めて明らかとなった。調査区の南東端での調査結果により、これまで確認された道路跡と墓列の総延長は約 260m となった。

一方、第 23 次調査の B 地区は 8 月下旬に環境整備を行い、9 月 5 日から調査に着手した。第 20 次調査で把握された墓域の広がりを確認するため、斜面に沿うようにトレンチを 3 箇所を設定した。9 月下旬にはトレンチの北東側を拡張し、10 月中旬には 2 基の土坑を確認した。A 地区と B 地区ともに、10 月 3 日までに器材の撤収を行い、埋め戻し以外の作業を終了した。

（佐々木 雅裕）

第 26 次調査

第 26 次調査は平成 19 年 5 月 26 日から開始した。グリッド、ベンチマークは第 23 次調査区に準じて設定した。調査区北西部では第 23 次調査区から続く環状配石墓の広がりが予想されていたため、ボーリング調査を先行して行った。土層観察用ベルトは 23 次調査同様、グリッド単位あるいは斜面に直交するように、環状配石墓については遺構の中心を通るように設定し、掘り下げを進めた。

6 月上旬、第 23 次調査区に隣接する A 区・B 区で、予測された箇所から 4 基の環状配石墓（第

35・36・39・4号配石)が検出され、その斜面下方では斜面の掘削や帯状に続くロームブロックの広がりが認められた。また、平成6年度の試掘調査時のトレンチの埋め戻し土を除去し、試掘調査で確認されていた2基の配石遺構を再び確認した。その結果、これまで検出した環状配石墓と同様の特徴を示すことが改めて確認され、環状配石墓(第37・38号配石遺構)として認定した。これにより、墓域と道路跡がさらに南まで延びることがわかった。道路跡の斜面下方に関しては、運動公園の園路によって壊されており、道路跡を挟んで墓が並ぶ様相は確認できなかった。6月中旬、C区を設定し、掘り下げを行った。斜面の掘削と硬化面が認められ、道路跡がC区まで延びることがわかった。これまでの道路跡で見られたロームブロックの分布はみとめられず、環状配石墓や土坑墓も確認されなかった。B区とC区の間でボーリング調査を行ったところ、礫が検出されたが、環状に巡るものは見つからなかった。

7月上旬、D区に着手した。D区は三内丸山遺跡の史跡範囲の南端・近野遺跡との境界付近に設定された調査区である。斜面が掘削され、掘削部分に炭化物や焼土が混入する硬い貼り土が帯状に続くことが確認され、道路跡が史跡境界まで延びることが明らかになった。C区同様、ロームブロックの分布はみとめられず、環状配石墓や土坑墓も確認されなかった。D区の掘り下げと併行して、運動公園の園路の下の調査を行うこととした。この区域はこれまで調査が行われておらず、集落南西側の墓列と道路跡が、昭和5年度に西駐車場地区で検出された2列に並ぶ墓列と交わると予想される部分で、両者がどのような関係にあるのかを確認するために調査を行った。公園整備の影響で一度に調査できなかったため、7月上旬と8月下旬に分けて調査した。重機で園路を剥ぎ、砂利を除去したところ、削平により地山である第1層・第2層が露出した状態で、2つの墓列と道路跡の関係や他の遺構も確認できなかった。7月下旬、西駐車場地区の調査に着手した。公園整備のための盛土を重機で除去し、昭和5年度の調査区の再確認を目指したが、園路同様、地山である第1層・第2層が露出し、削平により遺構は確認できなかった。

8月上旬、谷頭部分にE区を設定し、遺構確認作業を行った。集落北東側の墓列と道路跡は谷に下りていくことがわかっており、南西側の墓列と道路跡も同様の状況にあるかどうかを確認するために調査を行った。調査の結果、E区全面で第1層が分布し、遺構は確認されず、南西側の墓列と道路跡は谷には下りていけないことが判明した。8月下旬、第36号配石の斜面上位に位置する第119号土坑の精査を行った。直接埋葬に関わる痕跡を検出するために、堆積土を5㎝ずつスライスする方法をとった。

9月12日、埋め戻し以外のすべての作業を終了し、器材の撤収を行った。

(田中 珠美)

第 7 節 調査区内の層序

平成 6 年度に設定された基本層序（註 1）のうち、第 層を除く全ての地層が調査区内に堆積する。調査区内の各層の概要は以下のとおりである。

第 層は黒色土で、第 2 次調査区および第 26 次調査区において、第 層の上位に堆積が認められ、表土とは区別された。

第 層は均質な黒褐色土で、調査区の全域に堆積が認められる。上位に白頭山火山灰が堆積する第 b 層を境に、その上位が第 a 層、下位が第 c 層に細分される。

第 a 層は均質な黒色土である。粘性が少なく、しまりも弱い。第 c 層とはほぼ同質であり、第 b 層が介在しない地点での識別は困難である。

第 b 層は若干赤みを帯びる砂質シルト層である。道路跡の範囲に認められる窪地を主体に 6 cm 未満の厚さで堆積する。本層の上層で検出される均質な黄灰色シルトは白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）である。

第 c 層は均質な黒色土で、道路跡、環状配石墓などの直上に堆積する状況が確認されている。縄文時代中期後葉の最花式期や、中期未葉の大木 1 式併行期の遺物が包含される割合が高い。列状墓と道路跡の分布域では、その下位に堆積する地層に違いが認められる。

第 層は縄文時代中期の包含層である。黒色から暗褐色を呈し、道路跡を除く広い範囲に堆積する。第 層は、第 a・b 層の 2 層に細分される。

第 a 層は、縄文時代中期中葉の遺物を含む暗褐色土層である。第 層及び第 層由来と思われる土壌が混入するため、色調が明るい。分布は非連続的で、特に道路跡の範囲では欠落する状況が認められる。

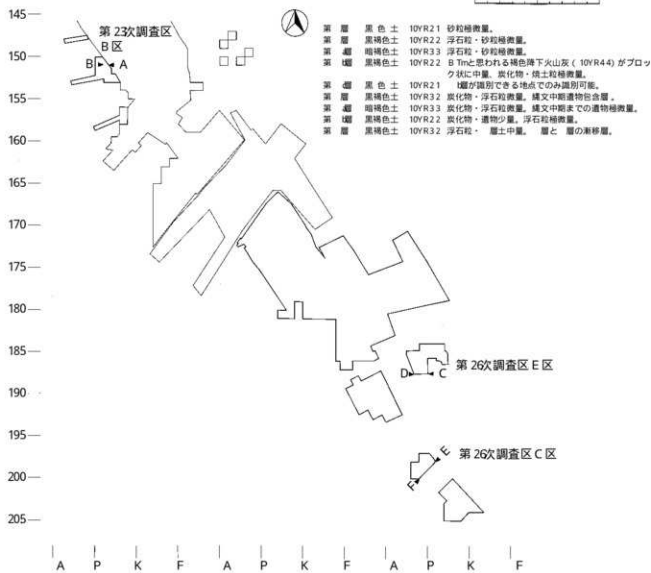
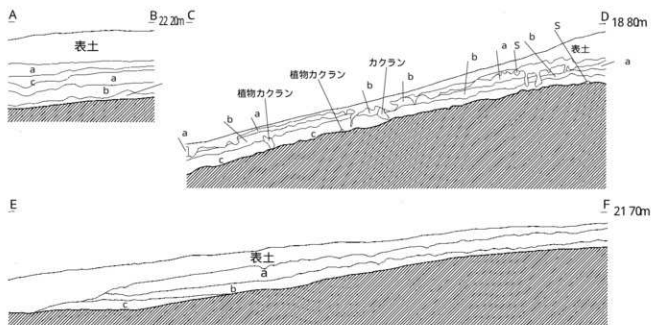
第 b 層も縄文時代中期中葉までの遺物を含む層で、第 層に近い黒色の土層である。第 a 層より広い範囲で堆積し、道路跡中にも残存する。縄文時代中期中葉の遺物を包含するが、色調その他の土質から見て第 層に由来する再堆積層の可能性がある。

第 層の漸移層以下は無遺物層である。

第 層は、千曳浮石や碇ヶ間浮石層に対比される黄褐色軽石層である。調査区全域に堆積していると思われるが、道路跡の中央では欠落する場合もある。なお、縄文時代の道路跡に散布される「ロームブロック」とは、本層を起源とする土壌である。

（註 1）調査初年の平成 4 年、基本層序設定（山口義伸「遺跡周辺の地形及び地質について」；青森県教委 1995 第 1 分冊 第 章 第 2 節）に用いた土層断面は、その後の調査によって自然堆積の状態を示していないことが判明し、平成 6 年に再設定されている（山口義伸 1998 「遺跡内の基本層序」；青森県教委 1998 第 1 分冊 第 章 第 1 節所収）。

（佐々木 雅裕）



3図 基本層序

第 8 節 調査の概要

第 23 次・26 次調査区は、集落が主に広がる低位の段丘から南西側の中位段丘に至る標高約 18.6m～21.6m の斜面に位置する。この周辺の集落南西側地区では、これまで平成 10・11・12・13 年度の調査（第 13・14・17・20 次調査）を通じ、墓列とこれに沿うように北西から南東方向へ延びる道路跡（第 2 号道路跡）が確認されている。墓列は土坑墓・配石墓・環状配石墓で構成され、道路跡片側の西側斜面上方に並ぶ。平成 13 年度に実施した第 20 次調査では、調査区の南東端において道路跡を挟んで環状配石墓の向かい側で、2 基の配石遺構（第 26・27 号配石）が検出され、道路跡の両側に遺構が並ぶ様相が確認されている。

第 23 次調査

平成 13 年度に実施した第 20 次調査区の周辺において、遺跡整備に伴う立ち木の伐採が行われ、隣接する未調査区域の調査が可能となった。これを受け、第 23 次調査はこの周辺での墓域と道路跡の範囲確認を主な目的に行った。発掘調査は 5 月 13 日から 10 月 31 日まで実施し、これまでの調査区と重複する 554m²を含む 1840m²を調査した。

調査区は 2 つの地点を選定した。まず、第 20 次調査区の南東側にあたる、墓域と道路跡の広がりが予測される地区に調査区（A 地区）を選定した。第 20 次調査区と一部重複する。次いで、この調査地区の北西側の、第 20 次調査区に隣接する西側斜面に調査区（B 地区）を選定した。この地区周辺では、平成 6 年度に取り付け道路建設予定地の試掘調査が実施されており、竪穴住居跡等が確認されている。また、平成 13 年度には第 14 次調査が実施されている。

検出した縄文時代の遺構は、道路跡 1 条、環状配石墓 6 基、土坑 10 基である。その他、古代以降と考えられる溝跡 2 条が確認された。また、出土物は縄文時代中期前葉から中期末葉の縄文土器・石器を中心とし、その総数はダンボール箱で土器 9 箱、石器 7 箱である。この他、土偶、ベンガラ素材となる赤鉄鉱等も出土している。

調査の結果、A 地区において新たに 6 基の環状配石墓を確認し、この墓域で確認された環状配石墓の総計は 16 基となった。この 6 基の環状配石墓は第 20 次調査で検出された配石遺構（第 26・27 号配石遺構）から南東側で、道路跡の両側に並ぶことが明らかとなり、道路跡西側の斜面上方に 4 基が、道路跡東側の斜面下方に 2 基が並ぶ。その間を路幅と捉えた場合約 8m 60cm となる。また、調査区の南東端での調査結果により、確認された墓列と道路跡の総延長は約 260m となり、両者はともにも南東側へとさらに広がる可能性が考えられた。

また B 地区では、平面形が楕円形の土坑を 1 基検出し、形態から判断して土坑墓の可能性が考えられる。この周辺では未調査区域が存在しており、土坑墓の分布状況に空白域が存在した。この検出結果により、未調査区域においても土坑墓が分布する可能性が考えられた。

第 26 次調査

第 23 次調査では、調査区の南東端で道路跡を挟んで両側に環状配石墓が並ぶ様子が明らかになり、集落南西側の墓域と道路跡は約 260m にわたって延びていることが確認された。一方、第 23 次調査区

に隣接する西駐車場地区では、昭和5年度の調査で東北東から西南西方向に並ぶ2列の土坑墓列が調査されており、その間の空白域が道路跡である可能性が指摘されていた。これらと、集落南西側の墓列と道路跡が延びる方向は、互いに交差する関係にあり、墓列と道路跡が分岐する、あるいは曲がる可能性が考えられた。

第26次調査はこの周辺での墓域と道路跡の範囲確認を主な目的に行い、発掘調査は5月26日から9月1日までの期間で実施し、269㎡を調査した。

調査区は道路跡と墓列の延び方を想定し、第23次調査区に隣接する箇所に6地点（A～E区・西駐車場地区）を選定した。また、西駐車場地区における昭和5年度の調査では、現在とは異なる測量基準を使用しており、正確な位置関係の把握と、道路跡と墓列が接続するあり方を把握する目的で、この地区を含めた周辺についても調査区を設定した。







検出した縄文時代の遺構は、道路跡1条、環状配石墓6基、土坑1基である。その他、古代以降と考えられる溝跡1条が確認された。また、出土遺物は縄文時代中期前葉から中期末葉の縄文土器・石器を中心とし、その総数はダンボール箱で土器8箱、石器6箱である。その他、土偶や耳飾、ミニチュア土器も出土している。

調査の結果、昭和5年度に調査した西駐車場地区の2列に並ぶ墓列は、駐車場造成の際にすでに削平されており、互いの墓列と道路跡が接続する状況は確認できなかった。しかし、第23次調査区に隣接する調査区（A・B区）では、新たに6基の環状配石墓を確認し、接続が予測された地点よりもさらに南東側に墓列が延びていることが明らかとなった。これにより、集落南西側の墓域で確認された環状配石墓は合計2基となった。また、これより南東側の調査区では、環状配石墓や土坑墓は確認されず、この結果、墓列は約310mにわたって延びていたことになる。

一方、道路跡は、環状配石墓の並びに沿うように延び、さらに史跡指定範囲の境界まで続いていることが確認され、その総延長は約370mになる。また、路面には環状配石墓を検出した地点（A・B区）までは、これまでと同様、第層を起源とする黄褐色のロームブロックが帯状に広がる状況が認められた。しかし、これより南東側の調査区（C・D区）では、その広がり確認されず、史跡指定範囲の境界側（D区）では、路面に炭化物を多く含む堅い土壌が帯状に貼られており、これまでとは異なる状況を示していた。道路跡は、さらに南東側へ延びる可能性が高い。

（佐々木 雅裕）



-  ロームブロック分布範囲（濃密な分布）
-  ロームブロック分布範囲（希薄な分布）
-  第 層及び第 層分布範囲
-  第 層分布範囲
-  第 層で硬化が認められる範囲
-  ボーリング調査によって確認された硬



0 20m

4図 調査区全体図

— S
— Q
— P
— O
— N
— M
— L
— K
— J
— I
— H
— G
— F
— E
— D
— C
— B
— A
— T
— S
— R
— Q
— P
— O
— N
— M
— L
— K
— J
— I

第 章 検出遺構と遺構内出土遺物

第 1節 縄文時代の検出遺構と遺構内出土遺物

1) 配石遺構・環状配石墓

第 23次調査と第 26次調査を通じて、1基の環状配石墓と 2基の配石遺構を検出した。その内訳は、第 23次調査が環状配石墓 6基（第 29～34号配石遺構）、配石遺構 2基（第 26・27号配石遺構）、第 26次調査が環状配石墓 6基（第 35～40号配石遺構）である。この結果、集落南西側の墓域で検出された環状配石墓は、合計 2基となった。また、新たに検出した 1基の環状配石墓のうち、配石の内側で土坑墓を確認したものは 2基である。内側の土坑墓について確認を行っていない例についても、形態から判断して環状配石墓に含めている。本報文中では、環状配石墓も配石遺構として番号を付して以下に記載する。

第 26号配石遺構（5～7図）

〔位置と確認〕 道路跡の北東側にあたる L・M - 168・169に位置し、その標高は 19.0～19.4m である。第 20次調査において表土を除去した後、予めボーリング調査を行い配石の所在を確認した。その成果を踏まえて土層観察用ベルトを設定し、第 1層から調査する過程で、第 a層上面において本遺構を確認した。この地点は、第 20次調査区の南東端にあたり、本遺構を含めた 2基の配石遺構（第 26・27号配石遺構）が隣接して確認された。これらは道路跡を境界に環状配石墓と向かい合い、道路跡の両側に遺構が並ぶ様相がこの墓域では初めて確認された。

〔重複〕 なし。

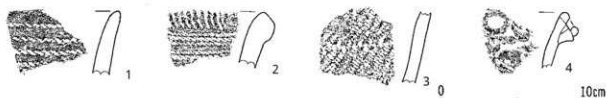
〔配石平面形・規模〕 拳大の礫を列状に配置し、4列の直線的な配列が 30～45mの一定した間隔で並列する関係にある。この並列する 4列の直線的な配列には、規模に長短の差違が認められ、列は北東側から南西側に至るに従い、それぞれ 1m 75cm、2m 60cm、3m 68cm、3m 75cmを計測する。これらの配置のあり方には視覚的に連続性が捉えられることから、一つの構造体を形成しているものと推察される。しかしその一方で、配石が個別の単位に分節される可能性も考えられる。礫の配置のあり方をさらに注意すると、直線的な中にも曲線的な軌跡が認められ、いくつかの長楕円形状の配置が視覚的に捉えられる。この場合、長さ約 90～180cmの長楕円形状の配列が基本的な単位として抽出され、これらを並列あるいは直列の位置関係で配置した構造とも把握される。この北側から北東側の位置にも礫が点在する状況が認められるが、この東側は攪乱を受けており原形が失われていると考えられるため、関連性があるものか全体構造の把握には課題が残る。なお、配石を構成する礫の中に凹石 1点が認められた。

〔堆積土〕 本遺構の上位には縄文時代中期後葉から形成されたと考えられる第 c層が堆積する。

〔出土遺物〕 本遺構が構築される第 a層の上面およびその上位において、礫間および周辺に遺物が点在する状況が認められた。主要な出土遺物を 6・7図に示す。6図 1は第 群 5類、2は第 群 1類、3は第 群 6類、4は第 群 4類の土器片である。7図 1は珪質頁岩製の剥片を素材とし、



5図 第 26号配石遺構



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	2号配		LR甲			ミガキ	5	繊維混入	
2	"		LR甲			"	1		
3	"	"			結核第1層(LR・LR)	"	6		
4	"	c	胎付				4		

6図 第2号配石遺構 出土土器

背面側の左側縁に比較的急斜度の調整を連続的に施す。2は珪質頁岩製の剥片である。3は珪質頁岩製の石核で、上設打面は左側面方向から剥離された剥離面により構成され、剥片剥離はこの上設打面を打撃面として、主に正面において剥片剥離が行われている。また裏面・下面でも剥片剥離が行われている。4は小型の磨製石斧で製作途上である。研磨により器面を調整し、直線的な擦痕が観察される。

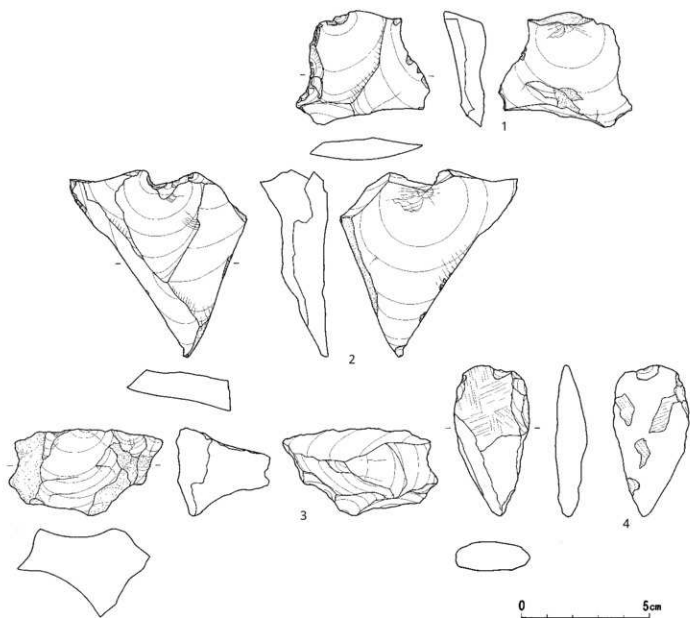
[時期] 本遺構は第 a 層の上面に構築され、その上位に縄文時代中期後葉以降に形成された第 c 層が堆積することから、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

第2号配石遺構(8～12図)

[位置と確認] 道路跡の北東側にあたる J - 169～171 K - 169～171 L - 169・170に位置し、その標高は19.1～19.6mである。第20次調査において表土を除去した後、ボーリング調査を先行して行い予め配石の所在を確認した。その成果を踏まえて土層観察用ベルトを設定し、第 a 層から調査する過程で、第 a 層上面において本遺構を確認した。次いで第23次調査において配石南東側の未調査であった部分を検出し、これで第2号配石遺構に関連する礫を全て検出した。

[重複] なし。

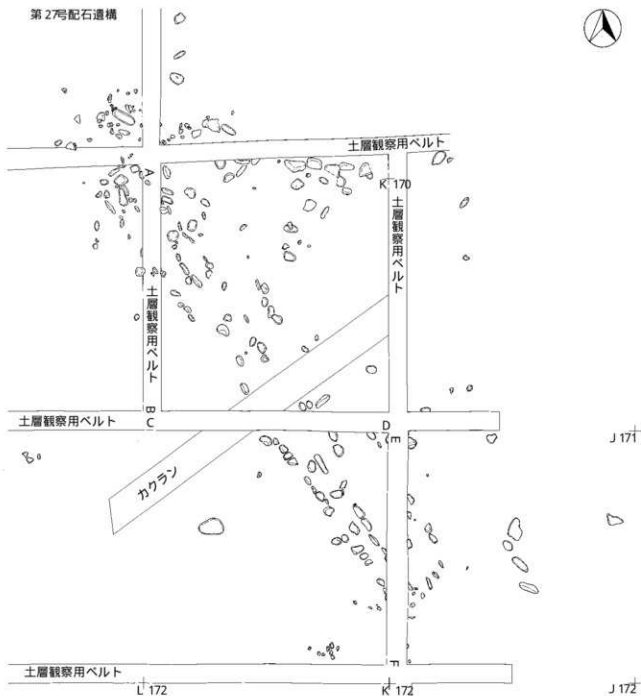
[配石平面形・規模] 礫を列状に配列する点に構造上の特徴が認められ、環状配石墓に窺える円の構造とは異なる点が指摘される。また、主に拳大の礫を選択し、環状配石墓とは選択される礫の大きさに相違が認められる。配列状況に、礫が部分的に欠落する箇所が認められるものの、互いの配列が約36cmの一定した間隔で並列する関係が窺える。この並列する列状の配列は、総延長が10m 38mを計測するが、その南東側は大きく攪乱を受けており、原形はこれ以上の規模を示していたものと推察される。配列のあり方には連続性が認められることから、一つの構造を形成しているものと推察される。しかしその一方で、第2号配石遺構と同様に、配石が個別の単位に分節される可能性も考えられる。配置のあり方に注意すると、直線的な中でも曲線的な配置を認めることも可能で、いくつかの長楕円形状の配列が捉えられる。この場合、長さ約60cm～90cmの長楕円形状の配列が基本的な単位として抽出され、これらを並列あるいは直列の位置関係で配置した構造とも把握される。本遺構の北西端には長さ約40cmの長楕円形を呈する礫が傾倒しており、立石であった可能性も想起される。さらに、北東側では、礫が北東方向と南東方向に放射状に点在する状況が認められ、同時に列状の配列を構成する礫に比して大型の礫で構成される状況も窺える。しかし、これらの東側も



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備	考	整理番号
1	290坑 M 168)	c	45	52	16	23.8	埴真	Ga			105654
2	"	"	74	69	26	52.5	"	Gc			105652
3	"	"	35	51	30	58.2	"	Pa			105653
4	"	"	60	30	13	27.5	粘	Ha			105650

7図 第26号配石遺構 出土石器

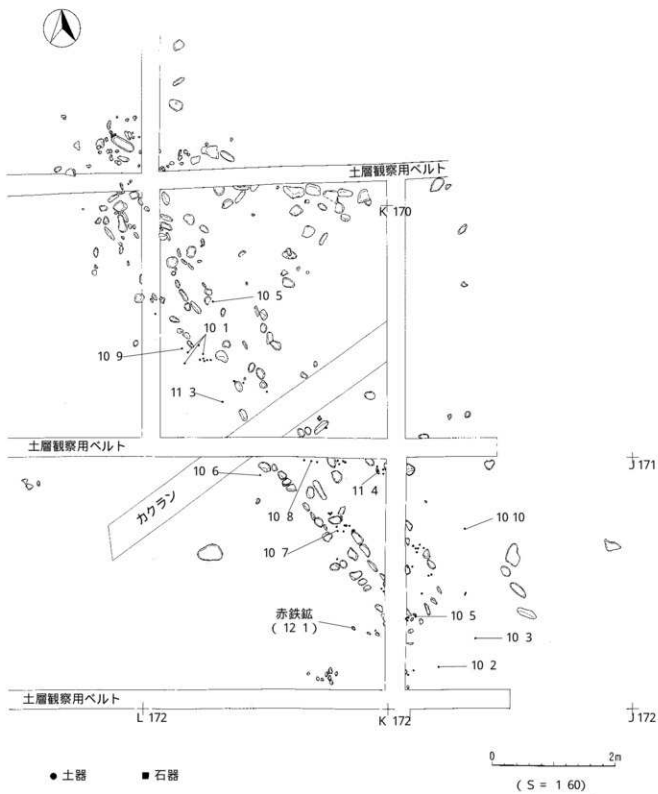
第27号配石遺構



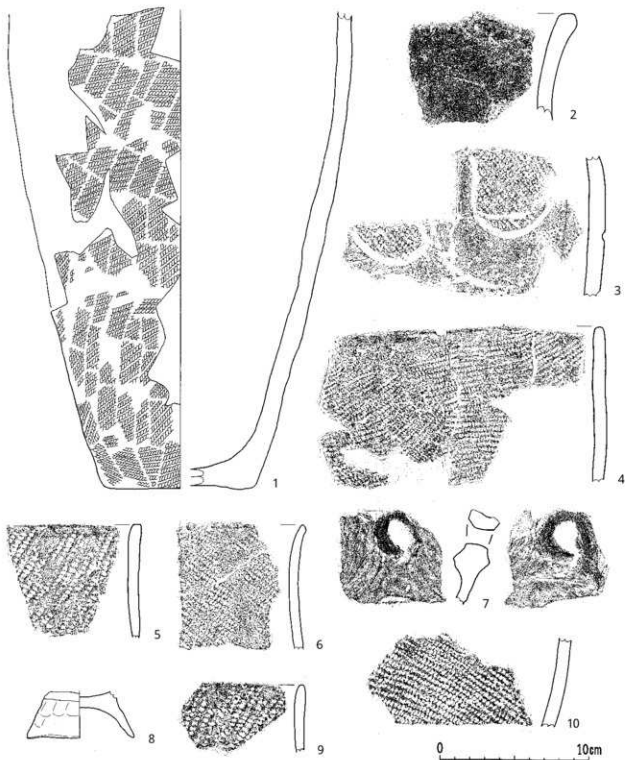
(S = 1 60)



8図 第27号配石遺構

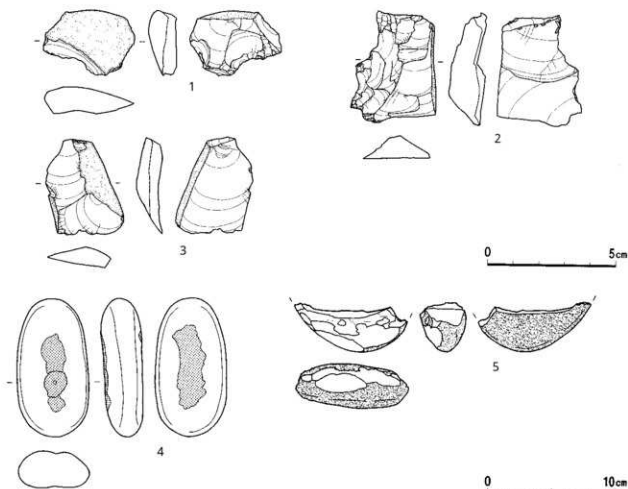


9図 第27号配石遺構 遺物出土状況



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胸部上半	胸部下半				
1	2配			RL	RL	ミガキ	ミガキ	11	
2	"	c	無文			ナデ		10	
3	"	"		LR 沈線		ミガキ	"	"	炭化物付着(外面)
4	"	"	LR			"	"	"	
5	"	"	RL			ナデ		11	
6	"	c	LR			ミガキ		"	炭化物付着(外面)
7	"	"	無文			"		10	黒褐色物質付着(内面)
8	"	"			無文	"	ナデ	11	
9	"	"	RL			ナデ		"	
10	"	c			LR	ミガキ		"	

10図 第2号配石遺構 出土土器



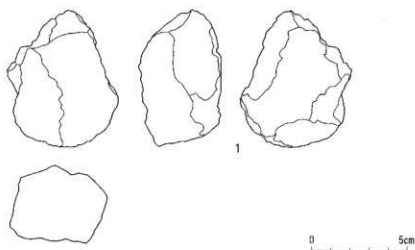
番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	材質	分類	備考	整理番号
1	Z配	b	26	35	11	10.1	珪質	Ga	S 17, J 171	105663
2	"	上	44	38	14	16.2	"	Gb	S 23, K 171	105673
3	"	"	38	30	10	7.6	"	Pc	S 36, K 170	105665
4	"	c	111	56	32	298.7	"	Ia	S 32, K 171	106506
5	"	"	(39)	(87)	(35)	(117.0)	"	Ic	S 14, J 171	106505

1図 第2号配石遺構 出土石器

攪乱を受けており、原形は失われているものと考えられ、全体構造の把握には課題が残る。本遺構と第2号配石遺構との配列のあり方には、互いに連動する一定の方向性が窺え、また構造上の類似点も認められる。

[堆積土] 本遺構の上位には縄文時代中期後葉から形成されたと考えられる第 c 層が堆積する。

[出土遺物] 本遺構が構築される第 a 層の上面およびその上位において、礎間および周辺から出土した遺物の分布状況を 9図に示す。また、主要な出土遺物を 10-12図に示す。10図 1・4・5・8-10は第 群1類である。1は復元個体で、単節縄文RLを縦位に施文する。8は小型台付鉢の台部である。2-4・7は第 群10類である。2は波状口縁を呈し、口縁部直下に無文帯を形成する。3は幅広の沈線により「J」字文を描出し、単節縄文LRを縦位方向に充填する。7は橋状把手である。10図 1は珪質頁岩製の剥片を素材とし、腹面側の末端に大きく深い調整を加える。2は珪質頁



番号	出土地点	出土層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	種類	備考
1	2配	c	74	59	43	190.2	赤鉄鉱	赤色顔料	

1図 第2号配石遺構 出土石製品

岩製の剥片を素材に、背面側の左側縁に調整を加える。3は珪質頁岩製の剥片で、背面に原礫面を留める。4は長楕円形の礫を素材に、平坦な表裏両面に敲打により凹部を形成する。5は磨石の破片で、表面に被熱による剥離が観察される。1図 1はベンガラを素材とする赤鉄鉱であり、その重量は190.2gである。

[時期] 本遺構は第 a 層の上面に構築され、その上位に縄文時代中期後葉から形成された第 c 層が堆積することから判断して、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。しかし、本遺構が構築される層位、あるいはそれに近い位置関係から縄文時代中期末葉の第 群 10 類も出土しており、存続期間には問題が残り、廃絶時期が中期末葉の可能性もある。ただし、本遺構の上位に堆積する第 c 層の層厚が 4～10cmと薄いことを考慮すると、本遺構の廃絶後も第 c 層の堆積は急速には進行せず、その過程で第 群 10 類の土器片が廃棄された可能性も考える必要がある。

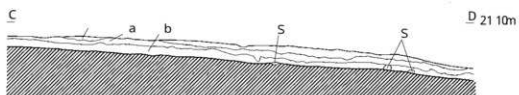
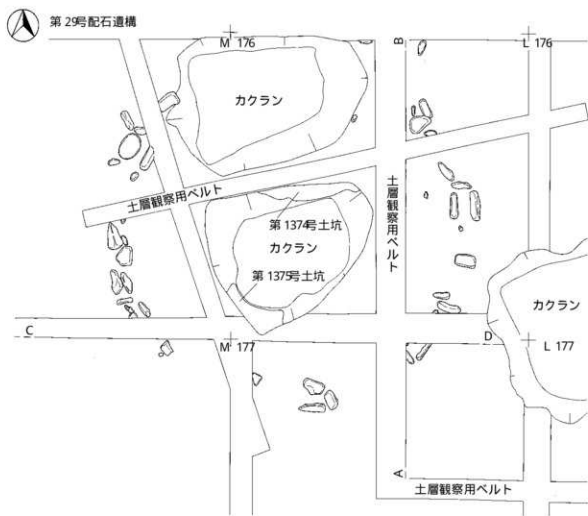
第29号配石遺構 (13・14図)

[位置と規模] 道路跡の南西側にあたる L・M - 176・177の北東向き緩斜面上に位置し、その標高は 20 1～20 7m である。第 2 次調査において表土を除去した後、ボーリング調査を先行して行い予め配石の所在を確認した。その成果を踏まえて土層観察用ベルトを設定し、第 層から調査する過程で、第 b 層上面で本遺構を確認した。

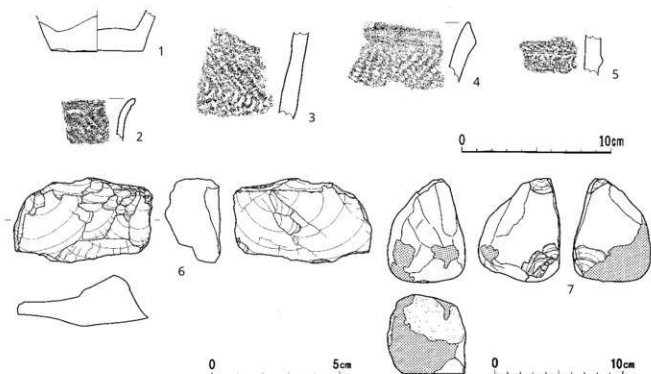
[重複] なし。

[配石平面形・規模] 径 4m 16cm～4m 64m の規模で環状に配置される。45 点の礫で構成されるが配石の北側と中央が大きく攪乱を受け、礫の配列に欠落が認められる。また、南側の配列が希薄な状況を示す。配置のあり方には環に対して、礫の長軸を平行あるいは直交方向に組み合わせる規則性が顕著に窺える。

[土坑] 配石の中央に位置する攪乱部の北側と南側において、断面の観察により土坑墓と推察され



13図 第29号配石遺構



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様		内面調整	底面	分類	備 考	
			口縁部	胴部上半					胴部下半
1	2配				無文	ナデ	ナデ	11	
2	#	#	RL			ミガキ	#		
3	#	#			結晶第1種(LR・RL)	#		6	
4	#	c	LR					4・5	
5	#	#	彫(縄文様模刻)・L滑			ミガキ		5	

番号	出土地点	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	分類	備 考	整理番号
6	2配	c	33	54	21	348	珪質	Pc	S 1, M 176	105672
7	#	#	83	61	63	389.2	#	Ab	S 4, L 176	106507

14図 第29号配石遺構 出土土器・出土石器

る黒褐色を呈する落ち込みを確認した(第1374・1375号土坑)。配石の構築面では土坑の輪郭を把握できず、未精査であるため、その平面形態および規模、長軸の方位等については不明である。断面での観察の結果、第1375号土坑は東側及び西側の壁がともに急斜度で立ち上がり、底面の壁際周囲は確認されなかった。

〔堆積土〕 配石の内側では、配石が構築される第 b 層の上位に第 b 層が堆積する。また、配石内側の中央には人為的な土盛り等の堆積は確認されなかった。

〔出土遺物〕 本遺構が構築される第 b 層の上面およびその上位から出土した遺物は希薄であり、主要な遺物を14図に示す。1・2は第 群 1類、3は第 群 6類の土器片である。4は第 群 4類あるいは5類に比定され、5は第 群 5類の土器片である。6は珪質頁岩製の横長剥片で、7は珪質頁岩製の敲石である。7の下端部及び稜部に著しい敲打痕が観察され、素材の下端と上端には打ち敲いた際に生じた剥離痕が認められる。

〔時期〕 本遺構の構築される層位とその上位に堆積する層位との関係から判断して、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

第30号配石遺構（15・16図）

〔位置と規模〕 道路跡の南西側にあたる K・L・176・177の北東向き緩斜面上に位置し、その標高は19.9～20.6mである。第23次調査において表土を除去した後、ボーリング調査を先行して行い、予め配石の所在を確認した。その成果を踏まえて土層観察用ベルトを設定し、第1層から調査する過程で、第b層上面で本遺構を確認した。

〔重複〕 配石の内側には、道路跡の上面と同様に第1層を起源とする黄褐色のロームブロックが広がる。また、このロームブロックは道路跡の上面と連続した広がりを示しており、分布あるいは堆積のあり方に両者を識別可能な状況は把握されなかった。道路跡の維持管理の過程で、路面とともに敷設されたものと考えられる。

〔配石平面形・規模〕 径3m28m～4m30mの規模で環状に配置される。北東側と南西側の配列に一部空白域が認められ、弧状を呈する配列が対をなす。これらは44点の礫で構成されるが、北側が大きく攪乱を受けており、礫の配列に欠落が認められる。配置のあり方には環に対して、礫の長軸を平行あるいは直交方向に組み合わせる規則性が窺える。特に西側の配列に顕著なあり方が示されている。

〔土坑〕 配石の北側に位置する攪乱部の南西隅において、断面の観察により土坑墓と推察される黒褐色を呈する落ち込みを確認した（第137号土坑）。配石の構築面では土坑の輪郭は把握できず、精査を行っていないため、平面形態および規模・長軸の方位等については不明である。北西側及び南東側の壁はともに急斜度で立ち上がり、底面の壁際に周溝は確認されなかった。

〔堆積土〕 配石の内側では、配石が構築される第b層の上位に第c層が堆積する。また、配石内側の中央に人為的な土盛り等の堆積は確認されなかった。

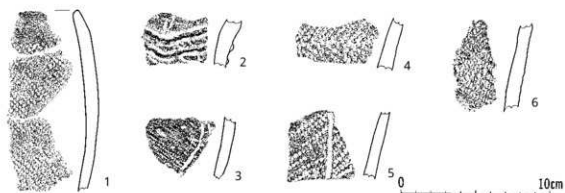
〔出土遺物〕 本遺構が構築される第b層の上面およびその上位から出土した遺物は希薄であり、主要な遺物を16図に示す。1・5は第群9類、2は第群4類、3は第群10類、4・6は第群3類6類の土器片である。

〔時期〕 本遺構は第b層の上面に構築され、その上位に縄文時代中期後葉以降に形成された第c層が堆積することから判断して、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

第31号配石遺構（17図）

〔位置と規模〕 道路跡の南西側にあたる M・N・O・174・175の北東向き緩斜面上に位置し、その標高は20.1～20.5mである。第23次調査において表土を除去した後、ボーリング調査を先行して行い、予め配石の所在を確認した。その成果を踏まえて土層観察用ベルトを設定し、第1層を調査する過程で第b層上面で本遺構を確認した。土坑墓の確認作業は行っていないが、形態から環状配石墓と判断した。

〔重複〕 配石の内側には、道路跡の上面と同様に第1層を起源とする黄褐色のロームブロックが広がり、この一部が礫の上面にも及ぶ。また、このロームブロックは道路跡の上面と連続した広がりを示しており、分布あるいは堆積のあり方に両者を識別可能な状況は把握されなかった。道路跡の維持管理の過程で、路面とともに敷設されたものと考えられる。



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	30配	#	RL	RL		ミガキ	9		
2	#	#		貼付、RL			4	炭化物付着(外面)	
3	#	c			RL 沈線		10		
4	#	#			縦線1本(LR・RL)	ミガキ	6		
5	#	b		LR 沈線		#	9		
6	#	c			RL	#	6		

14図 第30号配石遺構 出土土器

[配石平面形・規模] 径 4m 12m～ 4m 16mの規模で環状に配置される。北東側・北西側・南西側の配列に一部空白域が認められ、弧状の配列が向き合う。これらは34点の礫で構成され、配列の北側には他の構成礫とは区別される長軸72m、短軸57mを測る大型の板状礫を、その長軸を環に対して直交方向に配置する。また礫の配置のあり方には環に対して、礫の長軸を平行あるいは直交方向に組み合わせる規則性が窺える。特に東側の配列にそのあり方が示されている。

[堆積土] 配石の内側では、配石が構築される第 b層の上位に第 c層が堆積する。また、配石内側の中央に人為的な土盛り等の堆積は確認されなかった。

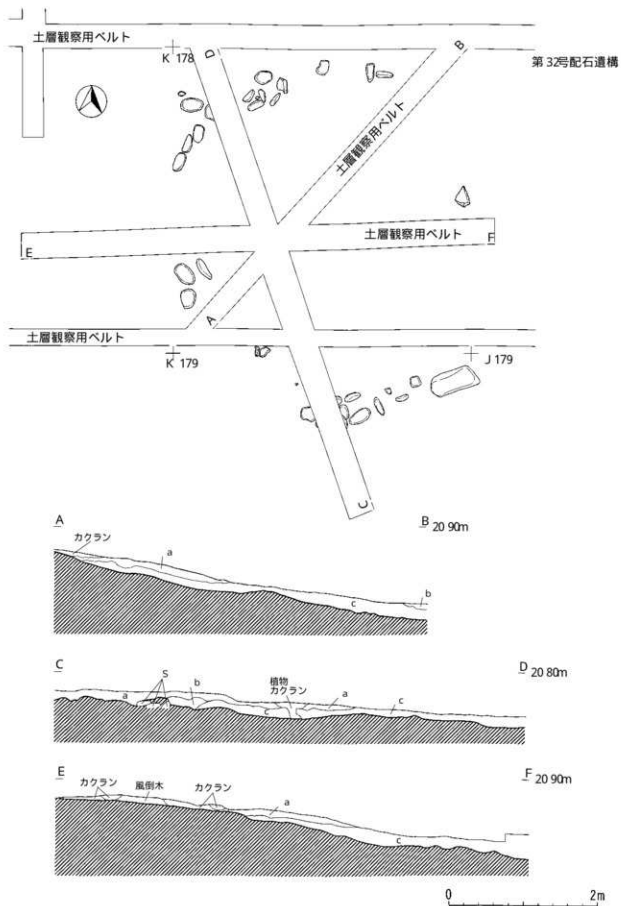
[出土遺物] 本遺構が構築される第 b層およびその上位から出土した遺物は希薄であり、主要な遺物を14図に示す。1は第 群 1類の土器片で、単筋縄文LRを縦位に施文し、これを地文に筒状の施文具により横位の区画帯を形成する。

[時期] 本遺構は第 b層の上面に構築され、その上位に縄文時代中期後葉以降に形成された第 c層が堆積することから判断して、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

第32号配石遺構(18図)

[位置と規模] 道路跡南西側にあたる J・175・176の北東向き緩斜面上に位置し、その標高は19.9～20.6mである。第23次調査において表土を除去した後、ボーリング調査を先行して行い予め配石の所在を確認した。その成果を踏まえて土層観察用ベルトを設定し、第 b層を調査する過程で第 b層上面で本遺構を確認した。土坑墓の確認作業は行っていないが、形態から環状配石墓と判断した。

[重複] 配石の内側には、道路跡の上面と同様に第 b層を起源する黄褐色のロームブロックが広がる。また、このロームブロックは道路跡の上面と連続した広がりを示しており、分布あるいは堆積のあり方に両者を識別可能な状況は把握されなかった。道路跡の維持管理の過程で、路面とともに



18図 第32号配石遺構

敷設されたものと考えられる。

[配石平面形・規模] 径 3m 92m～ 4m 52mの規模で環状に配置される。北東側と南西側の配列に一部空白域が認められ、弧状の配列が対をなす。これらは 34点の礫で構成され、配列の南東側には他の構成礫に比して比較的大型の礫を環に対して平行に配置する。配置のあり方には環に対して、礫の長軸を平行あるいは直交方向に組み合わせる規則性が窺える。特に南側の配列にそのあり方が示されている。

[堆積土] 配石の内側では、配石が構築される第 b層の上位に第 c層が堆積する。また、配石内側の中央に人為的な土盛り等の堆積は確認されなかった。

[出土遺物] 検出過程で遺物の出土は認められなかった。

[時期] 本遺構は第 b層の上面に構築され、その上位に縄文時代中期後葉以降に形成された第 c層が堆積することから判断して、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

第3号配石遺構 (19～2図)

[位置と規模] 道路跡の北東側にあたる H・I - 175・176に位置し、その標高は 19.6～19.8mを測る。第23次調査において表土を除去した後、ボーリング調査を先行して行い予め配石の所在を確認した。その成果を踏まえて土層観察用ベルトを設定し、第 b層を調査する過程で第 a層上面で本遺構を確認した。土坑墓の確認作業は行っていないが、形態から環状配石墓と判断した。

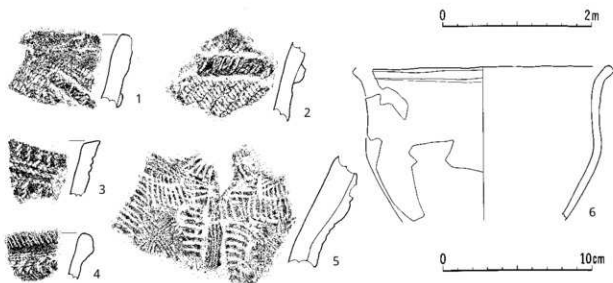
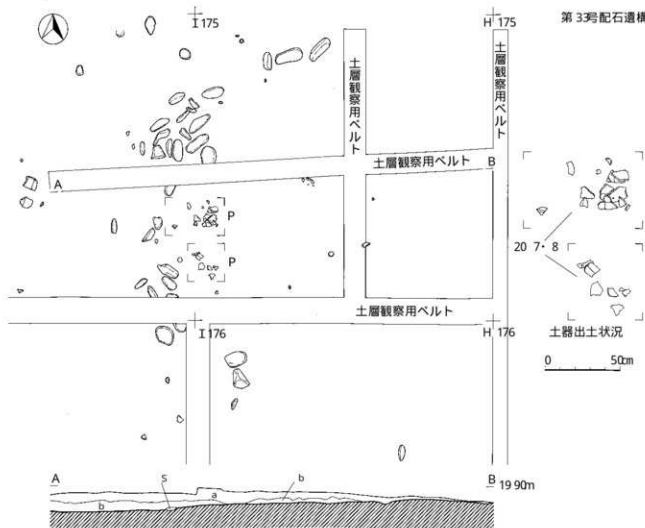
[重複] なし。

[配石平面形・規模] 道路跡に面した西側に礫を配置し、径 4m 72mの規模で弧状の配列に留まる。弧の中心線は道路跡に直交する関係を示す。これらは 36点の礫で構成され、その配置のあり方には、環に対して礫の長軸を平行あるいは直交方向に組み合わせる規則性が窺え、北西側が多量に配列される。

[堆積土] 配石の内側では、配石が構築される第 a層の上位に第 b層が堆積する。また、配石内側の中央に人為的な土盛り等の堆積は確認されなかった。

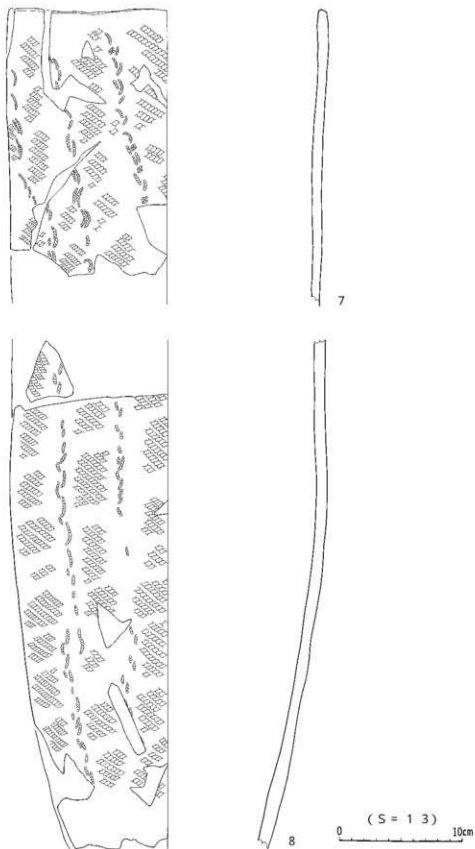
[出土遺物] 本遺構が構築される第 a層の上面およびその上位から出土した主要な遺物を 19～21図に示す。19図 1・2は第 群 4類、3・5は第 群 1類、4は第 群 1類、6は第 群 2類の土器片である。20図 1・2は第 群 10類の同一個体と把握される一括資料である。縄の開いた端を糸自身で結節を作り撚りを止めた単節縄文LRを縦位に施文する。2図 1は使用痕が認められる珪質頁岩製の不定型な剥片で、その末端に不規則で微細な剥離痕が観察される。

[時期] 本遺構の構築される層位とその上位に堆積する層位との関係から判断して、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。しかし、本遺構が構築される層位、あるいはそれに近い位置関係から縄文時代中期未葉の第 群 10類の一括資料が出土しており、存続期間には問題が残り、廃絶時期が中期未葉の可能性もある。ただし、本遺構の上位には第 b層が堆積し、第 c層の堆積を明確に確認できない状況を示していることから、本遺構の廃絶後も上位への堆積は急速には進行せず、その過程で第 群 10類の一括資料が廃棄された可能性も考える必要がある。



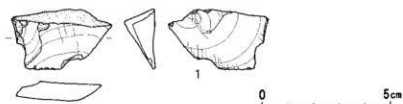
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	3配		貼付 (R押) RL			ミガキ		4	
2	"	b		刷 (透) 留 (透) (点孔)		"		"	
3	"	"	LR押					1	
4	"	b	L・R押 (馬蹄形状)					2	
5	"	"	貼付 (R押) R押			ミガキ		1	波状口縁
6	"	"	無文	無文		"		2	

19図 第3号配石遺構・出土土器 (1)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
7	3配		LR	LR		ミガキ		10	8と同一個体
8	"	"		LR	LR	"	"	"	7と同一個体

20図 第33号配石遺構 出土土器(2)



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備 考	整理番号
1	3配	b	24	39	12	7.8	珪質	Gc	S 1, H 175	105674

2図 第3号配石遺構 出土石器

第34号配石遺構 (22・23図)

[位置と規模] 道路跡の北東側にあたる E・F・G - 178・179に位置し、その標高は19.3~19.7mを測る。第23次調査において表土を除去した後、ボーリング調査を先行して行い予め配石の所在を確認した。その成果を踏まえて土層観察用ベルトを設定し、第 1層を調査する過程で第 b層の上面で本遺構を確認した。土坑墓の確認作業は行っていないが、形態から環状配石墓と判断した。

[重複] なし。

[配石平面形・規模] 径 4m 16cm~ 4m 72cmの規模で礫を概ね環状に配置する。4点の礫で構成され、第 b層の上面に据え置かれる。その配置のあり方には規則性が認められ、環に対して礫の長軸を平行あるいは直交方向に組み合わせ構成する。また、道路跡に面した南西側には、他の構成礫とは区別される長軸 110cm、短軸 56cmを測る大型の板状礫を、その長軸方向を環状配列の中心に向け配置する。さらに、配石の中心を通る東西軸を境界に孤状の配列が向き合い対をなしているが、対称性を示していない。その北側と南側の配列を構成する礫の選択には差違が認められ、北側の配列では長楕円形の礫を選択し、一方、南側の配列では扁平で楕円形の礫を選択するあり方が窺われる。構築過程における時間差を示す可能性もあり注意される。

[堆積土] 配石の内側では配石が構築される第 b層の上位に第 c層が堆積し、配石の内側が緩やかに穿む状況が確認された。また、その上位に人為的な土盛り等の堆積は確認されなかった。

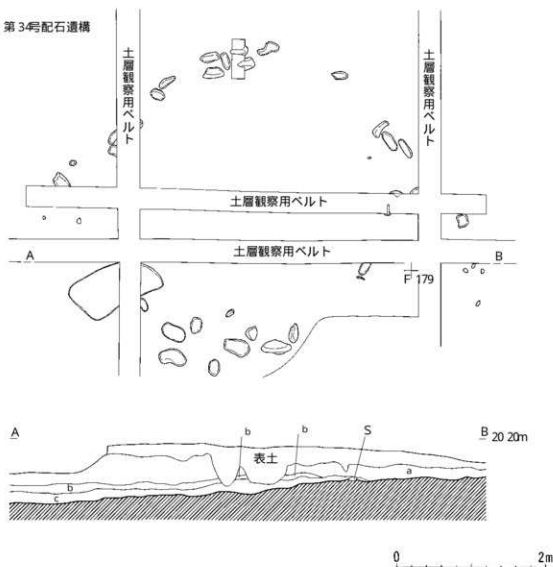
[出土遺物] 本遺構が構築される第 b層の上面およびその上位から出土した遺物は希薄であり、主要な遺物を2図に示す。1はミニチュア土器の底部破片で、単節縄文LRを横位に施文する。2は珪質頁岩製の剥片を素材とし、背面側の左側縁に連続的な細部調整を加える。3は玉髄製の剥片を素材とし、表裏両面に全周方向からの求心的な剥離を連続的に加える。

[時期] 本遺構は縄文時代中期中葉まで形成された第 b層の上面に構築され、その上位に中期後葉から形成された第 c層が堆積する状況を考慮すると、縄文時代中期中葉から後葉の時期に構築されたものと考えられる。

(佐々木 雅裕)



第34号配石遺構



24図 第34号配石遺構

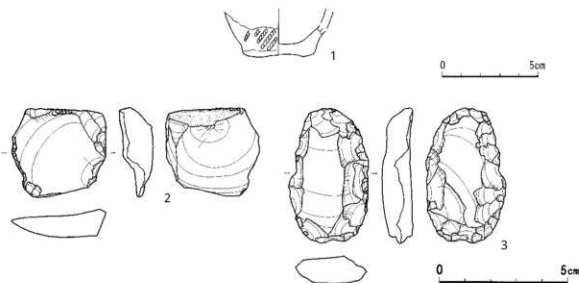
第35号配石遺構 (24図)

[位置と確認] 道路跡南西側の斜面、F - 184・185に位置し、標高は19.9～20.4mである。第26次調査において予めボーリング調査を行い、配石の所在を確認した。第1層上面において本遺構を確認した。土坑墓の確認作業は行っていないが、形態から環状配石墓とした。

[重複] なし。

[配石形態・規模] 長さ17～75cmの礫10点が径4m 20mの範囲に配列された配石である。配石南西側に位置する長軸75cmの大型の礫以外は17～27cmと小ぶりで、ほぼ同じ大きさである。礫の配置はきわめて希薄で、向かい合う弧状の配置をとっている。大型の礫は長軸を配石の中心のほぼ南北方向に向けて置かれている。

[堆積土] 配石内は、配石が構築される第1層の直上に第c層が堆積しており、他の人為的な土盛り層等は識別できなかった。



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	3配	c			LR	ナテ		ミナフタ目	

番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備考	整理番号
2	3配	#	36	37	13	144	珪質	Gb	F 179	105677
3	#	#	54	31	11	232	玉	Ga	F 178	105676

23図 第34号配石遺構 出土土製品・出土石器

[出土遺物] 遺物の出土量は少なく、主な遺物を24図に示す。配石構築面から 群5類～ 群1類、群4類の土器片が出土した。

[時期] 配石が構築される層位と直上の層から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

第36号配石遺構 (25・26図)

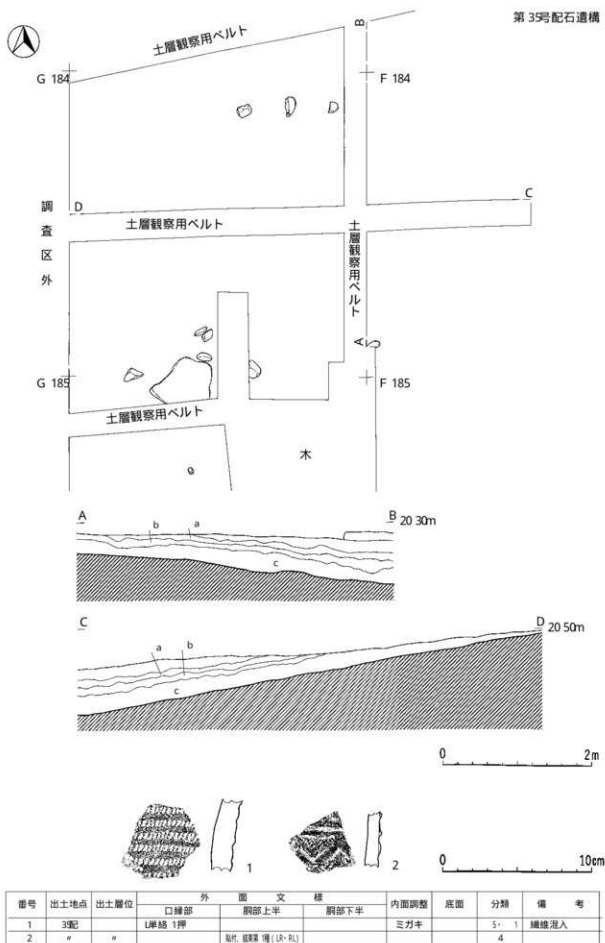
[位置と確認] 道路跡南西側の斜面、D・E-185・18dに位置し、標高は19.5～20.3mである。第26次調査において予めボーリング調査を行い、配石の所在を確認した。第1層上面において本遺構を確認した。土坑墓の確認作業は行っていないが、形態から環状配石墓とした。

[重複] なし。配石構築面でのボーリング調査によって配石下部の第1層中にも礫が確認された。

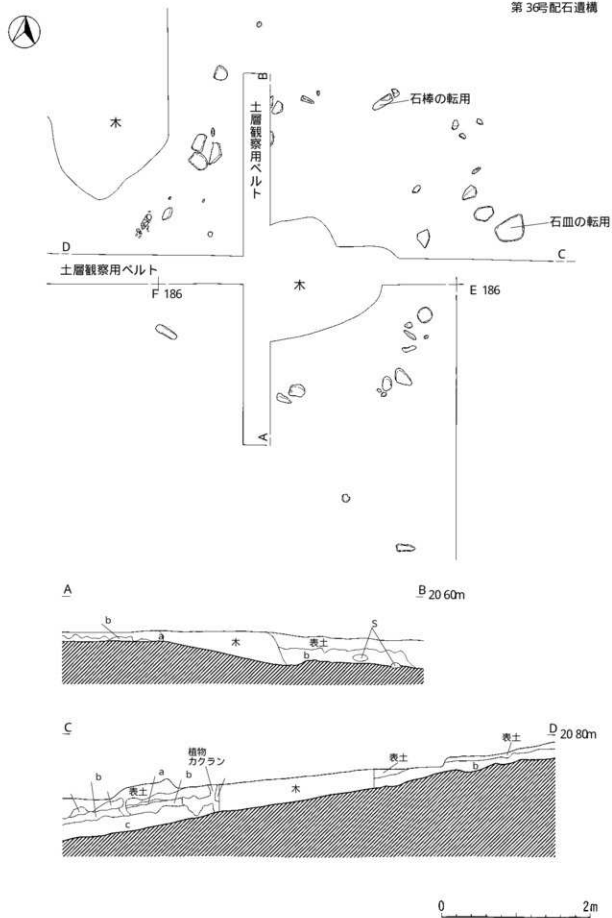
[配石形態・規模] 長さ10～42mの礫が長軸5m、短軸4mの北東から南西方向を長軸とする楕円形に配された配石である。配石北東側と南東側では礫の配置が希薄である。東側では環状に配された外側に、3点の礫が据え置かれている。環状の配列に対して平行に置かれる礫と直交して置かれる礫が見られる。配石に用いられている礫の中には被熱しているものが見られ、石棒や石皿の転用も認められた。

[堆積土] 配石内は、配石が構築される第1層の直上に斜面上位の西側では第b層が、斜面下位の東側では第c層が堆積しており、他の人為的な土盛り層等は識別できなかった。

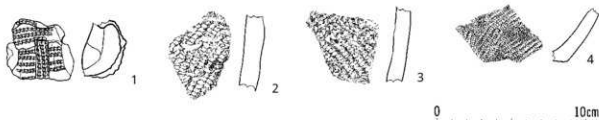
[出土遺物] 遺物の出土量は少なく、主な遺物を24図に示す。配石構築面から 群6類の土器片が、



24図 第35号配石遺構・出土土器



25図 第36号配石遺構



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	30配	c	胎付 (LR押)					1・2	
2	#				LR R磁回	ミガキ		6	
3	#	b			基層第1層 (LR・RL)	#	#		被熱 (内面)
4	#	#			LR	#	#	11	

26図 第36号配石遺構 出土石器

その上位からは 群 1・2類、6類、1類の土器片が出土した。

[時期] 配石が構築される層位と直上の層から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

第3号配石遺構 (27・28図)

[位置と確認] 道路跡南西側の斜面、B・C - 188・189に位置し、標高は19.3~20 mである。平成6年度に行われた試掘調査の際に配石が確認されている。平成6年度の調査では土坑と思われる落ち込みが確認されたとの報告があり(『三内丸山 遺跡』青森県教委1995)、当時のサブレンチを利用して改めて確認作業を行った。黒褐色土の上位に第1層に由来するローム層が堆積しているという状況であった。土坑墓と考えられていた落ち込みの立ち上がりが明確ではないことや、サブレンチ壁面において黒褐色土が配石の外方向に入り込む状況が確認されたこと、黒褐色土を土坑堆積土ととらえた場合、配石構築面から底面までの深さが浅すぎるなどから、風倒木と判断した。ただし、配石構築面では遺構内堆積土に類似する炭化物粒や焼土粒が混入する黒褐色土の広がりが見とめられ、土坑墓が存在した可能性が考えられる。

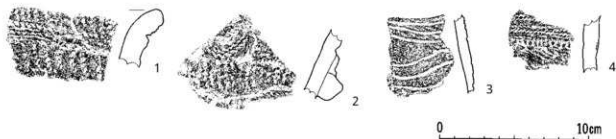
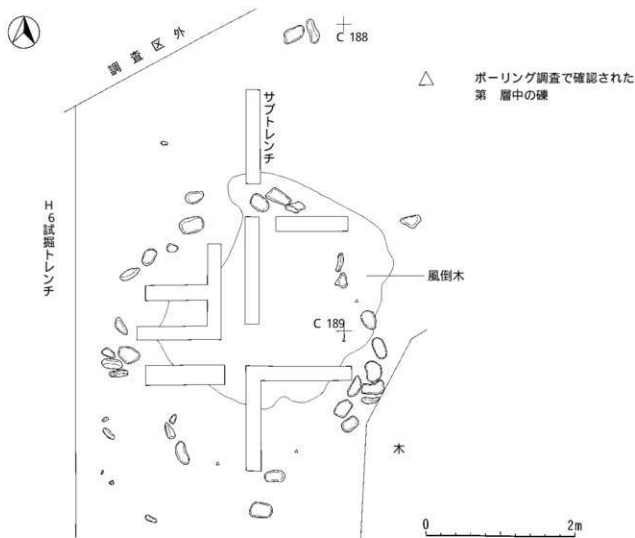
[重複] 第2号道路跡との重複部分で、配石がせり出すような構築層の高まりが見られた。道路構築時、あるいは拡幅時、または維持管理の際に掘り残したと考えられる。配石構築面でのボーリング調査によって第36号配石同様、配石下部の第1層中にも礫が確認された。

[配石形態・規模] 長さ16~30mの礫が、長軸4m 12m、短軸3m 5.2mの南北方向を長軸とする楕円形に配列された配石である。他の配石に比べ礫は小型であるが、ほぼ同じ大きさのものが用いられている。環状の配列に対して平行に置かれる礫と直交して置かれる礫が見られ、構築当初は規則的な配置をとっていたと考えられる。また、配置される礫の中には被熱したものやタール状の物質が付着するものが見られる。

[堆積土] 配石は平成6年度の試掘調査時に確認されており、堆積土はほとんど残されていない。

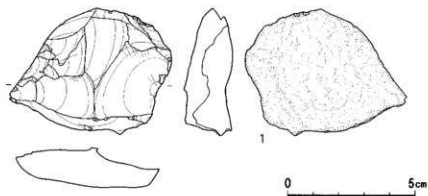
[出土遺物] 本遺構は試掘調査時に確認され、堆積土がほとんど残されていないため、遺物の出土量はかなり少ない。配石構築面およびその上面から 群1類・群2類の土器片と珪質頁岩製の石核が1点出土した。

第3号配石遺構



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	3配		L・R押、L押					1	
2	"	"	彫付(L押)、車轆1押			ミガキ	"		
3	"	"		沈線		"	"	2	
4	"	C	L・R押、刺突			"		5	繊維混入

2図 第3号配石遺構・出土土器



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備 考	整理番号
1	3配	c	51	63	19	55.2	珪質	Pa	S 4, C 189	106862

28図 第3号配石遺構 出土石器

[時期] 配石が構築される層位や他の配石遺構との位置関係などから、他の配石遺構と同じ縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

第38号配石遺構 (29・30図)

[位置と確認] 道路跡南西側の斜面、B・C - 189・190dに位置し、標高は19.5～20 mである。平成6年度に行われた試掘調査の際に配石の一部が確認されている。土坑墓の確認作業は行っていないが、形態から環状配石墓とした。

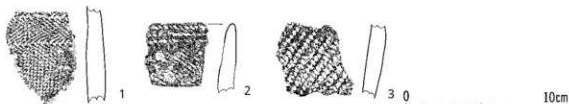
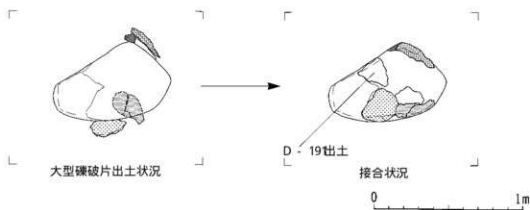
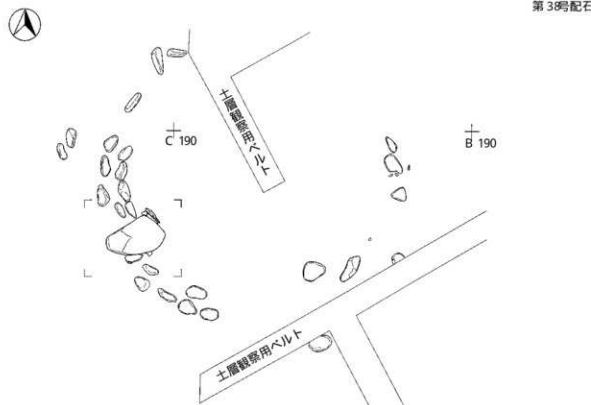
[重複] なし。

[配石形態・規模] 長さ20～40mの礫が、径約3.6mの円形に配列された配石である。配石西側では礫は二重に配置されるが、東側の配置は希薄で、北～北東には礫は配されない。配石の南西側には長さ80mの大型の礫が長軸を配石中心の北東に向けて配置されている。この礫の立石の可能性の有無を確認するため、礫の下部の精査を行ったが、下部には掘り方は確認されず、自重による沈み込みが見られた。また、礫には剥離痕が認められ、周囲には剥離した破片が見られたため、接合作業を行った。破片の出土状況と大礫との接合状況は29図に示す通りで、礫の南側下部と北側下部で検出された破片は大礫と接合することがわかった。

[堆積土] 配石内は、西側は平成6年度の試掘調査により堆積土はほとんど残されていないが、東側では配石が構築される第1層の直上に第2層が堆積しており、他の人為的な土盛り層等は識別できなかった。

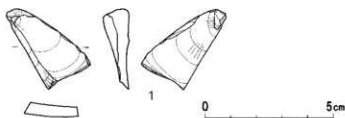
[出土遺物] 本遺構は試掘調査時に確認され、堆積土がほとんど残されていないため、遺物の出土量はかなり少ない。主な遺物を29図に示す。配石構築面から群5類、群6類の土器片、珪質頁岩製の剥片が出土した。

[時期] 配石が構築される層位や他の配石遺構との位置関係などから、他の配石遺構と同じ縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	38配			縦縞(上・下) 縦縞		ミガキ		6	
2	"	"	LR押	LR		"		5	被熱(内外面)
3	"	"			LR	"		6	

29図 第38号配石遺構・出土土器



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備 考	整理番号
1	3配	b	33	33	10	47	珪質	Pc	S 1, B 190	106861

30図 第38号配石遺構 出土石器

第39号配石遺構 (31・32図)

[位置と確認] 道路跡南西側の斜面、A・B - 193・194に位置し、標高は19.7～20.1mである。第26次調査において予めボーリング調査を行い、配石の所在を確認した。第1層上面において本遺構を確認した。土坑墓の確認作業は行っていないが、形態から環状配石墓とした。

[重複] なし。

[配石形態・規模] 長さ17～38mの礫が、径3m60cmの範囲に配列された配石である。配石の北西から北、南東にかけては礫が半円状に密に配されるが、反対側では礫が数点配されるだけである。配石北東側には長さ112mの大型の礫が長軸を配石の中心のほぼ南西に向けて配置されている。配石北西側では環状の配列に対して礫の長軸を平行あるいは直交に組み合わせた規則的な配置がみられる。また、北東側に配された大型の礫には第38号配石同様、剥離痕が認められる。

[堆積土] 配石内は、配石が構築される第1層の直上に第b層が堆積しており、他の人為的な土盛り層等は識別できなかった。

[出土遺物] 遺物の出土量は少なく、主な遺物を30図に示す。配石構築面から群6類・群1類の土器片、珪質頁岩製のリタッチドフレイク、土偶の胸部片が1点出土した。

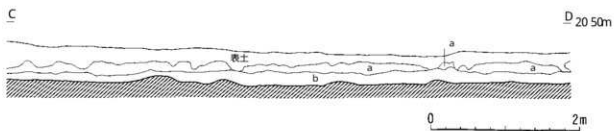
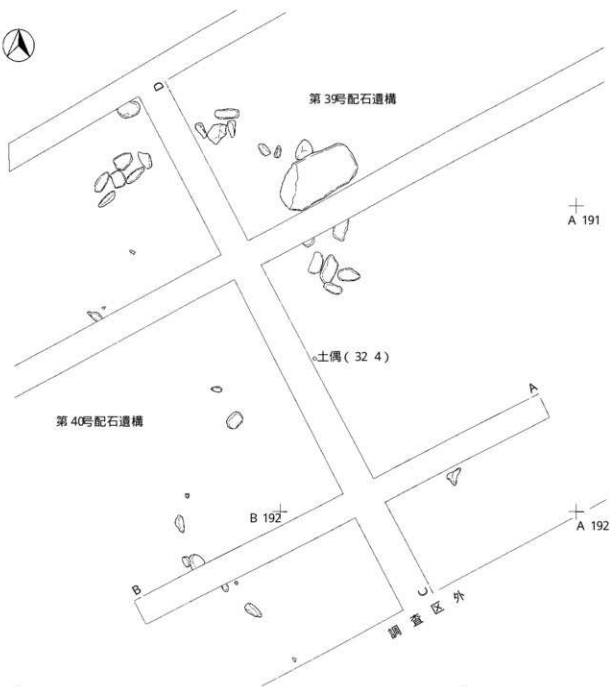
[時期] 配石が構築される層位と直上の層から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

第40号配石遺構 (31・33図)

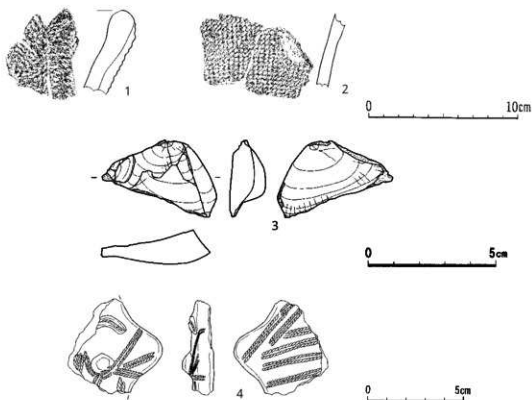
[位置と確認] 道路跡南西側の斜面、A・B - 191・192に位置し、標高は19.6～20.2mである。第26次調査において予めボーリング調査を行い、配石の所在を確認した。第1層上面において本遺構を確認した。土坑墓の確認作業は行っていないが、形態から環状配石墓とした。本遺構は、集落南西側の墓域で確認された、最も南側に位置する環状配石墓である。

[重複] なし。

[配石形態・規模] 長さ16～26cmの礫が、約3m90cmの範囲に配列された配石である。他の配石遺構に比べ、礫は小型で、配置も全体的に希薄である。配石西側では弧状の配置をとり、東側は1点の礫が配置されるのみである。



3図 第39・40号配石遺構



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	3配		貼付(L押) LR押			ミガキ		1	
2	"	"			L摩蝕 1	"		6	繊維混入

番号	出土地点	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	分類	備 考	整理番号
3	3配		31	45	14	127	珪質	Gb	A 191	106859

番号	出土地点	層 位	計 測 値 (mm)			文 様		種 類	備 考
			長 さ	幅	厚 さ	表 面	裏 面		
4	3配		(51)	(50)	(17)	貼付(R押) R押	R押	土塊	胴-胴部

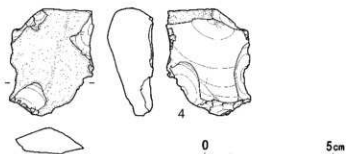
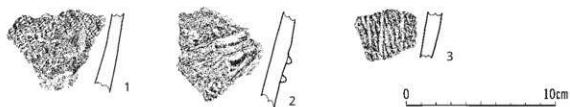
3図 第3号配石遺構 出土土器・出土石器・出土土製品

[堆積土] 配石内は、配石が構築される第 層の直上に第 b層が堆積しており、他の人為的な土盛り層等は識別できなかった。

[出土遺物] 遺物の出土量は少なく、主な遺物を3図に示す。配石構築面上位から 群4類と9類の土器片、珪質頁岩製のスクレイパーが出土している。

[時期] 配石が構築される層位と直上の層から、縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

(田中 珠美)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	4配	b		貼付、RL		三刃半		4	
2	"	"		貼付、縦溝(境) (LR・RL)		"	"	"	被熱(内面)
3	"	"			LR、沈線	"		9	

番号	出土地点	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	分類	備考	整理番号
4	4配	b	43	33	18	239	珉質	Ga	S 2, B 192	106860

33図 第40号配石遺構 出土土器・出土石器

2) 土坑・土坑墓

第23次調査・第26次調査を通じ、11基の土坑を検出した。その内訳は、第23次調査が10基、第26次調査が1基である。この中には、環状配石墓の内側で確認された3基も含まれる。確認された土坑の大方は、平面形が楕円形を呈しており、土坑墓の可能性がある。このうち精査を行ったのは、第26次調査で確認した第119号土坑の1基である。

第119号土坑(34図)

[位置と確認] F-186 第3号配石の斜面上方に位置する。標高は20.3-20.5mである。第26次調査で第1層上面において黒褐色土の落ち込みを確認し、北半分のみ精査を行った。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部は長軸182m、短軸100mの楕円形を呈し、長軸方向はN-82°-W方向に傾き、斜面下方にある道路跡に対して直交する。これまで調査された土坑墓と同様のあり方を示す。

[壁・底面] 壁は第1層を掘り込む。壁は底面から開きながら立ち上がる。底面には凹凸がみとめられ、中央部が周囲に比べてやや高い。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、5層に分層した。底面中央部には黒褐色土の汚れが認められた。しかし、炭化物などの埋葬に直接関わる痕跡は検出されなかった。

[出土遺物] 確認面・堆積土から群4類、6類の土器片が出土している。また、堆積土から石鏃が1点出土している。

[時期] 層位から縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

(田中 珠美)

第136号土坑(34図)

[位置と確認] 第23次調査区B区のN-O-152に位置し、その標高は21.3-21.5mである。第23次調査において第1層を調査する過程で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部の平面形は円形を呈し、その規模は南北軸112m、東西軸102mである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、第1層起源の浮石粒が混入する。

[出土遺物] 確認面において第1群5類、第1群6類、第2群4類、第2群6類の土器片が出土した。

[時期] 堆積土中に縄文時代中期後葉以降に形成された第1層c層を起源とする黒色土壌は認められず、層位関係と併せて判断すると縄文時代中期後葉以前に構築されたものと考えられる。

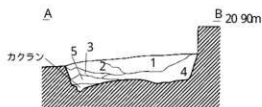
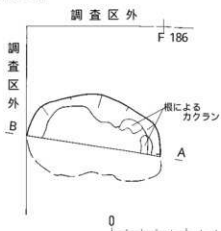
第136号土坑(35図)

[位置と確認] 第23次調査区B区のN-O-150に位置し、その標高は21mである。第23次調査において、第1層を調査中に黒褐色土の落ち込みを確認し、第1層上面で本遺構の輪郭が把握された。

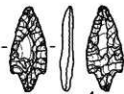
[重複] なし。



第119号土坑



- 第119号土坑
- 第1層 黒褐色土 10VR2.2 黄褐色浮石粒種微量。
 - 第2層 黒褐色土 10VR2.2 黄褐色浮石粒種微量。
 - 第3層 黒色土 10VR2.1 黄褐色浮石粒種微量。
 - 第4層 黒褐色土 10VR2.2 黄褐色浮石粒種微量。炭化粒種微量。
 - 第5層 黒褐色土 10VR2.3 黄褐色浮石粒種微量。

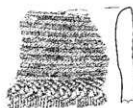
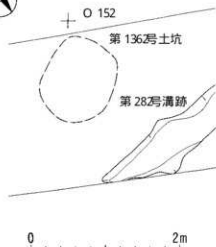


0 10cm

0 5cm



第136号土坑



0 2m

0 10cm

番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様		内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半				
1	119号	底面直上			R単絡 1		6	繊維混入
2	"	堆積土中層	LR押			ミガキ	4	繊維混入
3	"	破断面			LR	"	6	
5	136号	"	平 底 窪 溝 (LR-RL)	L単絡 1		"	5	
6	"	"			多軸絡糸体		6	
7	"	"	貼付、R押	LR		ミガキ	4	
8	"	"			LR	"	6	

番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備 考	整理番号
4	119号	堆積土	34	14	5	23	珪質	Aa S1, F 186		106818

34図 第119号・136号土坑・出土土器・出土石器

[平面形・規模] 一部が調査区外へ及んでいるが、開口部の平面形は楕円形を呈するものと推察される。規模は検出された長軸が122m、短軸が88mである。長軸の方位はN - 50 - Eを示す。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、第 層起源の浮石粒が混入する。

[出土遺物] 確認面において遺物は出土しなかった。

[時期] 堆積土中に縄文時代中期後葉以降に形成された第 c層を起源とする黒色土壌は認められず、縄文時代中期中葉までに形成された第 b層を掘り込んでいることから、縄文時代中期後葉以前に構築されたものと考えられる。

第1365号土坑 (35図)

[位置と確認] 道路跡の北東側にあたる J - 17に位置し、その標高は19.3mである。第23次調査において、攪乱を受け第 層が露出する箇所为本遺構の南東側部分を確認した。本遺構の北西側は攪乱を免れており、第 層が残存し、その上位に第 c層が堆積する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 本遺構の北西側は第 層が残存しており、その上面では平面形態を把握することはできなかった。開口部の平面形は不整な楕円形を呈するものと推察され、検出した部分の規模は、長軸方向が52m、短軸方向が62mである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、第 層起源の浮石粒が混入する。

[出土遺物] 確認面において遺物の出土は認められなかった。

[時期] 本遺構の構築される層位とその上位に堆積する層位との関係から判断して、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

第1367号土坑 (35図)

[位置と確認] 道路跡の北西側にあたる M・N - 177・178に位置し、その標高は21.3mである。第23次調査において第 層を検出する過程で、黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部の平面形は楕円形を呈し、その規模は長軸186m、短軸90mである。長軸の方位はN - 3 - Eを示す。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、第 層起源の浮石粒が混入する。

[出土遺物] 確認面において遺物の出土は認められない。

[時期] 本遺構の構築される層位とその上位に第 c層が堆積する状況から判断して、縄文時代中期後葉以前に構築されたものと考えられる。

第1368号土坑 (35図)

[位置と確認] 道路跡の南西側にあたる L - 179に位置し、その標高は19.9mである。第23次調査において、攪乱部を利用して遺構の確認を行ったところ、その南西側壁面において黒褐色土の落ち込みを断面で確認した。

[重複] 道路跡の上面に広がる第 層を起源とする黄褐色のロームブロックが本遺構の上面にも連

続して及ぶ。道路跡の維持管理の過程で、路面とともに敷設されたものと考えられる。

[平面形・規模] 本遺構の上面に道路跡の上面に広がる第 層を起源とするロームブロックが連続して及んでおり、平面形態を把握するには至らなかった。北西側及び南東側の壁はともに急斜度で立ち上がり、底面の壁際に周溝は確認されなかった。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、第 層起源の浮石粒が混入する。

[出土遺物] 確認面において遺物の出土は認められなかった。

[時期] 本遺構の構築される層位とその上位に第 c 層が堆積する状況から判断して、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

第 137号土坑 (35図)

[位置と確認] 道路跡の北東側にあたる F - 17に位置する。第 23次調査において溝状を呈する攪乱部を利用して遺構の確認を行ったところ、その底面で第 137号土坑に隣接して本遺構を検出した。また、北側には長軸 136cm、短軸 70cmの大型の礫が据え置かれ、さらに礫が点在する状況が認められるが、本遺構との関連性については課題が残る。

[重複] なし。

[平面形・規模] 本遺構の南西側は攪乱部の外側へと続き、全体形状を把握するには至らなかった。開口部の平面形は楕円形を呈するものと推察され、検出した部分での規模は長軸 70cm、短軸 74cmである。また、長軸の方位は N - 46 - E を示す。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、第 層起源の浮石粒が混入する。

[出土遺物] 確認面において遺物の出土は認められなかった。

[時期] 本遺構の構築される層位とその上位に第 c 層が堆積する状況から判断して、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

第 137号土坑 (35図)

[位置と確認] 道路跡の北東側にあたる F - 17に位置する。第 23次調査において、溝状を呈する攪乱部を利用して遺構の確認を行ったところ、その底面で第 137号土坑に隣接して本遺構を検出した。また、北側には長軸 136cm、短軸 70cmの大型の礫が据え置かれ、さらに礫が点在する状況が認められるが、本遺構との関連性については課題が残る。

[重複] なし。

[平面形・規模] 本遺構の大部分は攪乱部の外側へと広がりを示しており、全体形状を把握するには至らなかった。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、第 層起源の浮石粒が混入する。

[出土遺物] 確認面において遺物の出土は認められなかった。

[時期] 本遺構の構築される層位とその上位に第 c 層が堆積する状況から判断して、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築されたものと考えられる。

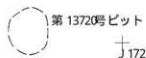
(佐々木 雅裕)



第 1365号土坑



第 1365号土坑

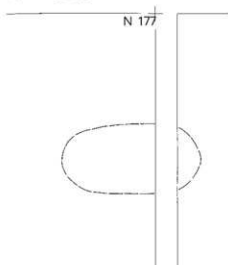


第 1372号ビット

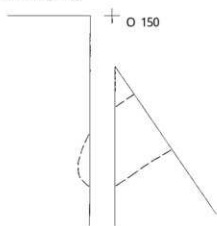
+

J 172

第 1367号土坑



第 1368号土坑



+

O 150

第 1370・ 1371号土坑



H 177

第 1370号土坑

カクラン

第 1370号土坑

+

L 175

第 1368号土坑



カクラン

第 1368号土坑

G 178

0 2m

35図 第 1363・ 1365・ 1367・ 1368・ 1370・ 1371号土坑

3) 埋設土器遺構

第23次調査および第26次調査を通じ、確認された埋設土器遺構は1基である。

第839号埋設土器遺構(36図)

[位置と確認] 道路跡の南西側にあたる P-17に位置し、その標高は19.9mである。第2号配石遺構および第2号配石遺構が隣接し、周囲には道路跡の上面から連続して第層を起源とする黄褐色のロームブロックが広がる。第23次調査において道路跡を検出する過程で確認し、精査および埋設された土器の取り上げは行っていない。

[重複] 道路跡の上面に広がる第層を起源とする黄褐色のロームブロックが本遺構の周辺にも連続して広がり、このロームブロックを掘り込んで本遺構が設置される。この状況から、周辺に広がるロームブロックは、本遺構が構築される以前に道路跡に敷設されたものと判断される。

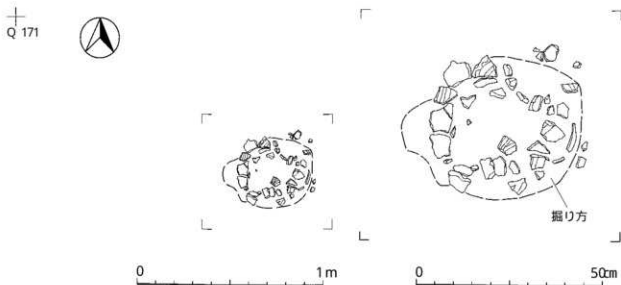
[平面形・規模] 掘り方は南北軸38m、東西軸48mの不整形を呈し、この内側に黒褐色土が堆積する。また、埋設された土器の径は約30cmを測り、この内側にも黒褐色土が堆積する。この上位には第c層が堆積し、埋設された土器の口縁部が器壁の外側および内側に折れた状況を示していることから判断して、口縁部が地表から露出していた可能性がある。

[堆積土] 本遺構の上位には第c層が堆積し、人為的な土盛り等の堆積は認められなかった。

[出土遺物] 確認面において遺物の出土は認められなかった。

[時期] 埋設された土器から判断して円筒上層c式期と考えられる。

(佐々木 雅裕)



36図 第839号埋設土器遺構

4) 道路跡

集落の南西側では、これまで平成10・11・12・13年度の調査(第13・14・17・20次調査)を通じ、土坑墓・配石墓・環状配石墓で構成される墓列とともに、その北東側斜面下方において墓列に沿って延びる道路跡(第2号道路跡)が約220mにわたって確認されている。第23次調査では範囲確認を目的に、それらの広がり予測される第20次調査区の南東側地区について調査を行った。

一方、第23次調査区に隣接する西駐車場地区では、昭和5年度の調査で東北東から西南西方向に並ぶ2列の土坑墓列が調査されており、その間の空白域が道路跡である可能性が指摘されていた。これらと集落南西側の墓列と道路跡が延びる方向は、互いに交差する関係にあり、墓列と道路跡が分岐する、あるいは曲がる可能性が考えられた。第26次調査ではその状況について確認するとともに、道路跡と墓列の範囲確認を目的に史跡指定範囲の境界まで調査を行った。

第2号道路跡(4・37~45図)

[位置と確認] 集落が主に広がる低位の段丘から南西側の中位段丘に移行する斜面際に沿って位置し、その標高は19.2~20.4mである。第23次調査区から第26次調査区A・B・C・D区にわたって確認され、北西方向から南東方向へと続く。

[重複] 第25号溝跡と重複し、本遺構が古い。また、P-17では、円筒上層c式期の第839号埋設土器遺構が路面に広がる第1層を起源とする黄褐色のロームブロックを掘り込んで設置されている状況が確認された。この状況から、周辺に広がるロームブロックは、第839号埋設土器遺構が構築される以前に道路跡に敷設されたものと判断される。その一方で、第30・31・32号配石遺構の内側に第1層を起源とするロームブロックが路面上の広がり連続して及んでおり、ここではそれらが構築された後に路面とともに敷設されたものと考えられる。さらに、第3号配石遺構の北東側では、配石の輪郭に沿った地形の変化が認められ、道路跡が構築される過程、あるいは修繕や拡幅を含めた維持管理の過程で配石が掘り残された痕跡と推察される。

[平面形・規模] 緩やかな斜面に掘削により断面形が皿状を呈する窪地が形成され、これが墓列と並行しながら北西から南東方向へN-34-Wの角度で帯状に続く。その総延長は第23次調査では約260mの地点まで確認され、次いで第26次調査の結果、史跡指定範囲の南限にあたる約370mの地点まで確認された。この検出結果により、南東側へさらに延びる可能性が高いものと判断される。

また、第23次調査では環状配石墓および列状の配列形態を示す配石遺構(第26・27号配石遺構)が、道路跡の両側に並ぶ様相がこの墓域では初めて確認された。その並びの間を路幅と捉えた場合、第25号配石遺構と第26号配石遺構を結ぶ間が16m 80cmで、第30号配石遺構と第33号配石遺構を結ぶ間が8m 60cmとなり、北西側から南東側に至るに従い路幅が減少する傾向が認められる。さらに、第23次調査区では掘削に関わる痕跡についても把握され、掘削を受けた両端の幅は約13m 40cm~21mである。その南東側の第26次調査区では、調査区のA区からD区にかけて道路跡の中央付近から北東側が県総合運動公園に至る圍路の建設により失われており、路幅や掘削の幅等について十分な情報は得られなかった。

一方、昭和5年度に調査を行った西駐車場地区の2列に並ぶ墓列と道路跡について前述の目的に従い改めて調査を行った。これに併せ、第26次調査区と西駐車場地区の間に位置する県総合運動公

園に至る園路部分についても、未調査区域でもあり重要性が高いことから調査の対象に含めた。しかし調査の結果、それらが造成工事の際に既に削平されて消滅していることが判明し、互いの道路跡と墓列が接続するあり方を把握することはできなかった。

[断面形・路面] 道路跡の両端を確認できた第23次調査区では、その断面形が皿状を呈する状況が窺え、さらに周辺との比較により層序が欠落するあり方が認められ、それが斜面を掘削した痕跡と把握される。道路跡の中央部では第 層および第 層が、あるいは第 層の上層までが欠落する場合もあり、第 層が帯状に露出する状況も認められる。しかし、第26次調査区のB区では掘削の痕跡についての把握は難しく、自然地形を利用した構築のあり方も窺えた。

掘削の深度が深い道路跡の中央部から両端への移行は、第24・25・31号配石遺構と第26・27号配石遺構が並ぶ間では緩やかな傾斜角を示し、路幅が狭くなる第30号配石遺構と第33号配石遺構を結ぶ間より南東側では路肩状の比較的急な傾斜角を示す。同様に、第26次調査区のA区からD区でも、検出された道路跡の南西側部分は、下端から上端への移行が比較的明確である。

また、帯状に掘削された範囲には、これに重複して第 層を起源とする黄褐色のロームブロックが帯状に広がる状況が窺える。第23次調査区ではそれが顕著に認められ、掘削の深度が浅く第 層が残存する範囲、あるいは道路跡の両側縁部により濃密に広がる。その幅は約2.9～11.3mで広がり、第29号配石遺構の周囲では、配石遺構の内側を回避するようにロームブロックが広がる状況も認められた。一方、掘削の深度が深く第 層が露出する範囲では、これとは対照的に希薄な状況を示し、広がり方も断続的となる。第26次調査区のA区では、ロームブロックの分布に第23次調査区との連続性が窺えるものの、南東側に至るに従い漸移的に希薄となる。それが墓列の南限にあたるB区でその分布は途絶え、これより南東側のC・D区では認められない。

第 層を起源とするロームブロックの広がりの中には、粒径が人頭ほどのものが供給されている状況も散見され、それらが路面に深く入り込み、亀裂が入り細かく砕けるあり方が観察される。上方から圧力が加えられた結果と考えられ、路面への敷設方法あるいは使用の過程に関わる属性とも判断され注意される。第26次調査では調査区A区のD-184において、帯状に広がるロームブロックの下部構造についてサブトレンチにより断面の観察を試みた(39図)。その結果、亀裂が入り凹凸の著しい第 層の上層に、この層を起源とする大小の粒径のロームブロックを混入する褐色土が堆積する状況が窺えた。このことから判断して、掘削の深度が第 層まで及び、その結果掘り起こされた土壌が整地されたあり方が推察される。その一方で、第23次調査区では第 層および第 層の上位にロームブロックが濃密に分布する状況も認められ、その供給された総量を併せて考慮すると、ロームブロックの供給先が分布範囲の直下とは限らず、他所からの供給により敷設される異なったあり方も想定される。

さらに、第23次調査区の道路跡の中心線上にあたるK-173-175 I-177-179では第 層が露出しており、表面の硬質化と第 層本来の黄褐色から褐色へ変色している状況が認められた。これらは、断続的ではあるものの連続性が認められ、帯状の広がりを示す。また同様に、第26次調査区C区のP-197においても路面の硬質化が認められた。一方、史跡指定範囲の南限に位置するD区では、帯状に掘削された範囲に重複して路面に炭化物を多く含む土壌が2～10cmの厚さで帯状に貼られている状況が確認され、その硬度は著しく堅緻である。これまでの調査区で確認された、

206 204 202 200 198 196 194 192 190 188 186 184 182 180 178 176 174 172 170 168 166 164 162 160 158 156 154 152 150



○ 土坑墓

■ 第 1 層起源のロームブロック分布範囲 (濃密な分布)

■ 第 1 層起源のロームブロック分布範囲 (希薄な分布)

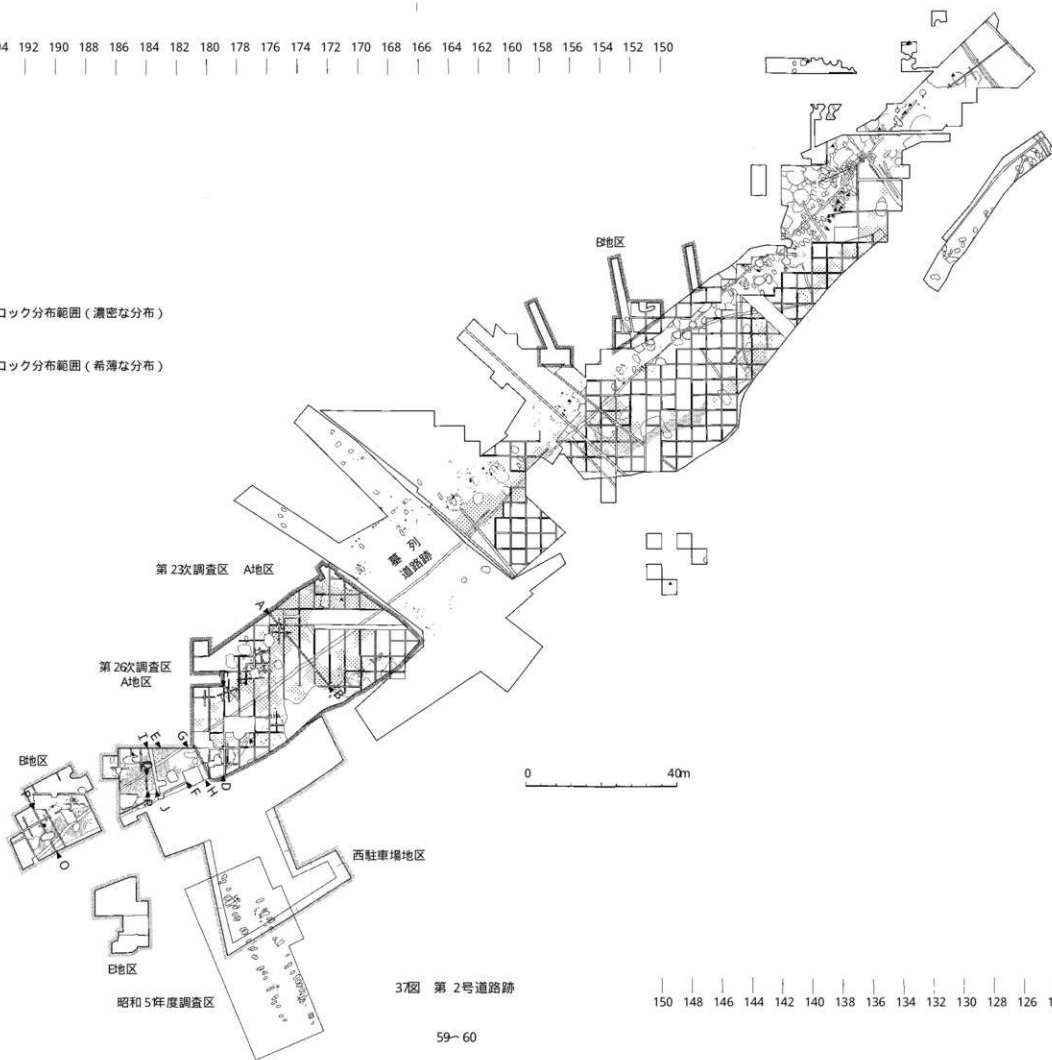
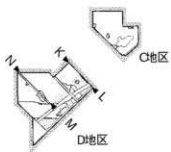
■ 貼り土範囲

▲ 埋設土器遺構

□ 第 23 次調査区

□ 第 26 次調査区

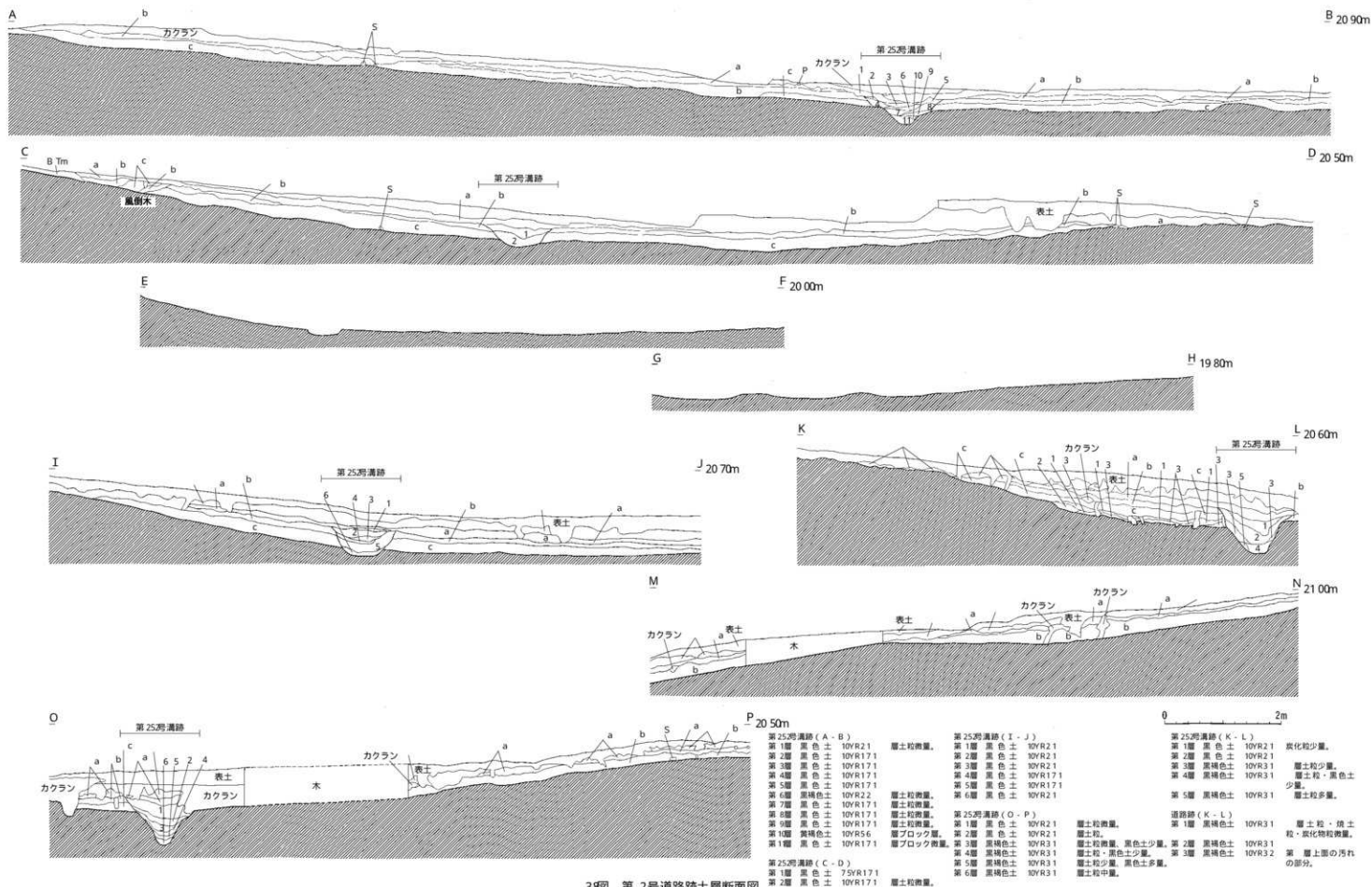
A—
S—
Q—
O—
M—
K—
I—
G—



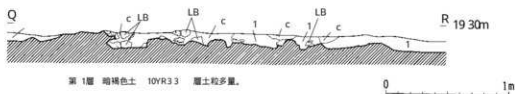
— O
— M
— K
— I
— G
— E
— C
— A
— S
— Q
— O
— M
— K
— I
— G
— E
— C
— A
— S
— Q
— O
— M
— K
— I
— G
— E
— C
— A

37 図 第 2 号道路跡

150 148 146 144 142 140 138 136 134 132 130 128 126 124 122



38図 第2号道路跡土層断面図



39図 道路跡断面

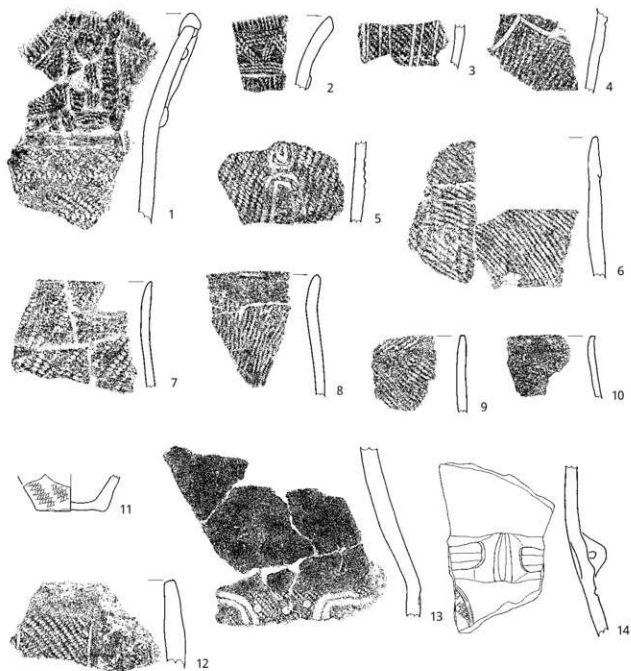
路面に第 1層を起源とするロームブロックが敷設される様相とは異なり注目される。その粘土の下位には第 1層が広がっており、路面の中央に至っては第 1層の上層まで掘削されていることが窺え、ここでも 2～8cmの厚さで第 1層本来の黄褐色から褐色へと変色する状況が認められた。

[堆積土] 道路跡の上位には広域にわたって縄文時代中期後葉から形成される第 c層が 8～24mの厚さで堆積する。道路跡中央の第 1層が露出する箇所では第 c層との境界が明瞭であり、一方、第 1層を起源とするロームブロックが分布する箇所では、第 c層の下層にも粒径の小さいロームブロックが含まれている。また、道路跡の上端の環状配石墓が並ぶ標高では第 c層の堆積は薄く、欠落して第 b層が堆積する場合も認められる。

[出土遺物] 検出の過程で路面およびその上位に遺物が点在して分布する状況が認められた。41・44図に主要な出土土器を示す。路面からは第 1群 1類、第 1群 8類、第 1群 9類、第 1群 10類、第 1群 1類が主に出土し、路面の直上では第 1群 9類、第 1群 10類、第 1群 1類、第 1群 1類、第 1群 2類が出土している。また、43・44図には主要な出土土器を示す。路面及びその上位からは石織、石錐、スクレイパー類、使用痕剥片、リタッチド・フレーク、ピエス・エスキューの他、敲石、磨石、石棒等が出土している。

[時期] P-17では、道路跡の上面に広がるロームブロックを掘り込んで円筒上層 c 式期の第 83号埋設土器遺構が設置されていることから、道路跡は円筒上層 c 式期以前の縄文時代中期前葉以前に構築されたことが窺える。また、縄文時代中期中葉から後葉の時期に構築されたと考えられる第 30・31・32号配石遺構の内側に、第 1層を起源とするロームブロックが路面上と連続して広がる状況を示しており、ここではそれらの配石遺構が構築された後に、路面とともに敷設されたことが考えられ、第 83号埋設土器遺構の事例との対比からロームブロックの敷設には時期差があることが把握される。さらに、道路跡と墓列は並列する位置関係にあり、両者の上位には縄文時代中期後葉以降に形成された第 c層が堆積することから判断して、互いに共存する時期が存在し、縄文時代中期後葉以前に廃絶されたと考えられる。しかし、路面および路面に近い位置関係から縄文時代中期中葉の第 1群 10類が出土していることから、存続期間には問題が残り、廃絶時期が中期中葉の可能性もある。ただし、平安時代の第 b層が形成されるまでの間、本遺構の上位には第 c層が 8～24mの層厚で堆積しており、その層厚を考慮すると、本遺構の廃絶後も第 c層の堆積は急速には進行せず、その過程で第 1群 10類の土器片が廃棄された可能性も考える必要がある。道路跡は延長や拡幅あるいは修繕等の維持管理がなされ、墓域ともに変容を遂げながら廃絶に至ったものと推察される。

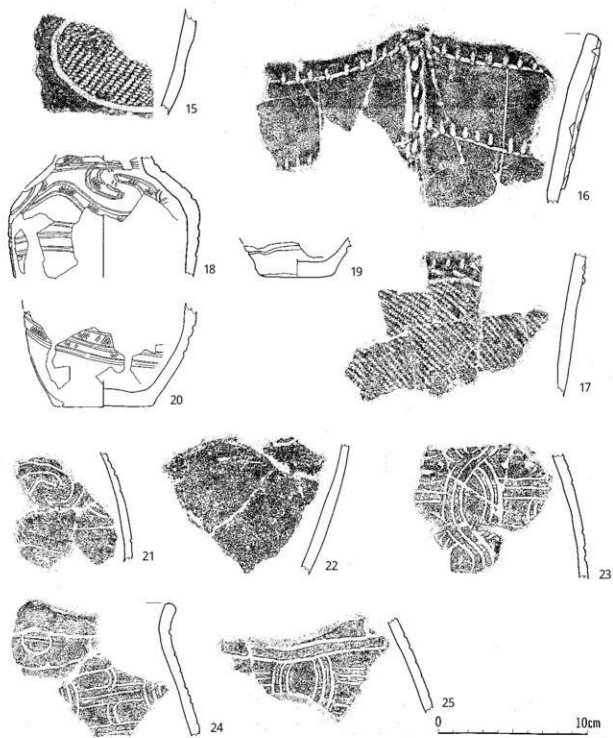
(佐々木 雅裕)



0 10cm

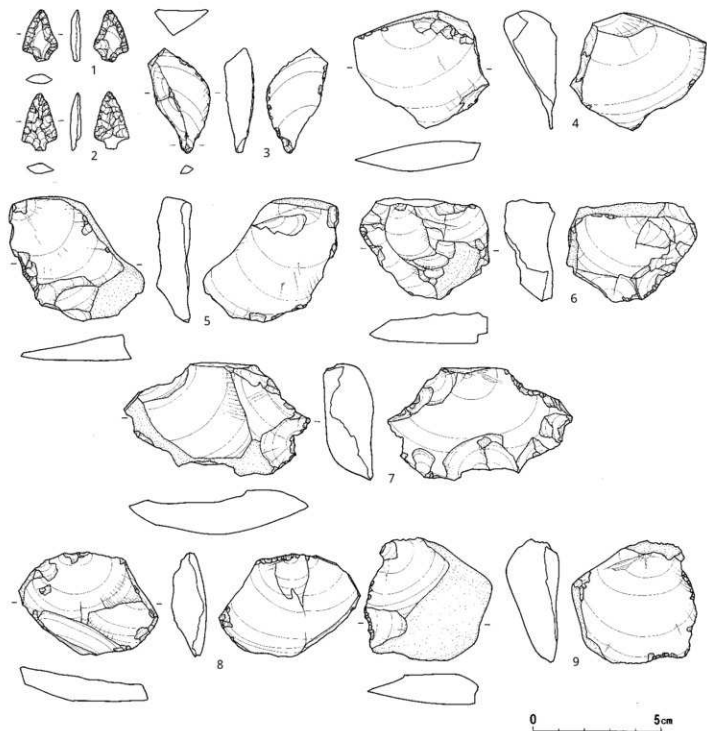
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	跡跡 (P 南)	路面直上	貼付 (L押) L押	結束蓋 1種 (LR・RL)		ミガキ	1	26次、液状口縁	
2	× (F 南)	路面	貼付 (L押) L押				#	26次、液状口縁	
3	× (F 南)	#			RL 沈線	#	9	26次	
4	× (E 南)	#		沈線、LR		#	8	3次、炭化物付着 (外面)	
5	× (G 南)	#		LR 沈線		#	9	23次	
6	× (E 南)	#	RL	RL		#	9・10	3次、灰泥塗 加敷(内)	
7	× (H 南)	#	RL	RL		ナデ	10	23次	
8	× (D 南)	#				ミガキ	#	26次	
9	× (B 南)	#	LR			#	#	26次	
10	× (E 南)	#	無文			#	8	26次	
11	× (F 南)	#			LR	#	11	26次	
12	× (E 南)	路面直上		無文	RL 沈線	#	9	26次	
13	× (C 南)	路面	無文	RL 沈線、割突 (竹管状)		#	#	3次、灰泥付着 (内)	
14	× (J 南)	路面直上	無文	貼付、横状把手、RL 沈線		#	10	3次、炭化物付着 (内)	

4 図 道路跡 出土土器 (1)



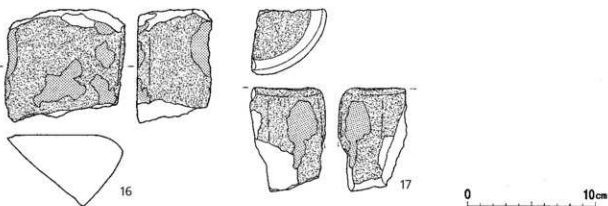
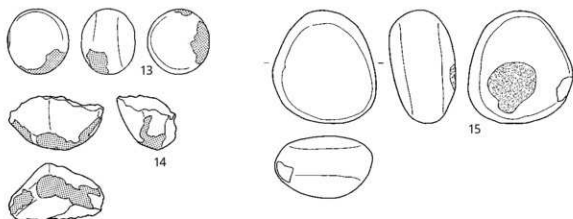
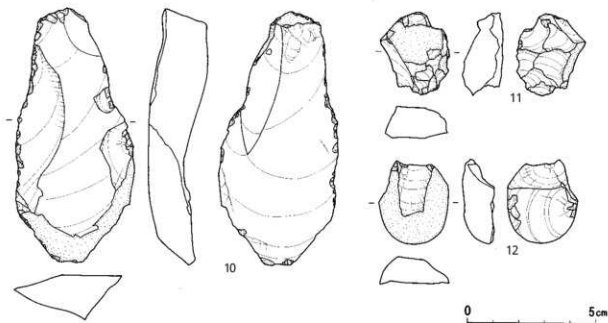
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
15	群馬(2) 164	路面直上		RL, 沈線		ミガキ	10	22c, 変化型付(外面)	
16	「(2) 164	「	貼付(刺突) 沈線, 刺突			「	1	26c, 17c同一體	
17	「(2) 164	「	貼付(刺突) 刺突	LR		「	「	22c, 21c同一體	
18	「(F) 164	「		沈線, LR		ナデ	2	26c	
19	「(「) 164	「		沈線, LR		ナデ	「	26c	
20	「(2) 164	「			沈線	ナデ	「	26c, 22c同一體	
21	「(E) 164	「		沈線		ナデ	「	26c, 21c同一體	
22	「(E) 164	「			沈線	ナデ	「	26c, 21c同一體	
23	「(E) 164	「		沈線		ミガキ	「	23c	
24	「(「) 164	「	沈線			「	「	23c, 25c同一體	
25	「(F) 164	「	沈線			「	「	23c, 24c同一體	

4図 道路跡 出土土器(2)



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備考	整理番号
1	道路跡 C 184)	路面	21	14	4	0.7	珩頁	Ab	26次	106816
2	" (E 182)	路面直上	23	14	4	1.0	"	"	"	106817
3	" (D 184)	路面	42	24	12	7.1	"	Dc	"	106820
4	" (#)	"	47	53	20	34.8	"	Ga	"	106858
5	" (E 184)	路面直上	50	53	13	27.9	"	"	"	106852
6	" (E 182)	"	40	51	20	38.9	"	"	"	106850
7	" (E 183)	路面	46	73	20	50.7	"	"	"	106854
8	" (#)	路面直上	42	55	13	22.6	"	Gb	"	106851
9	" (D 184)	路面	49	50	21	40.5	"	Gc	"	106857

4図 道路跡 出土石器 (1)



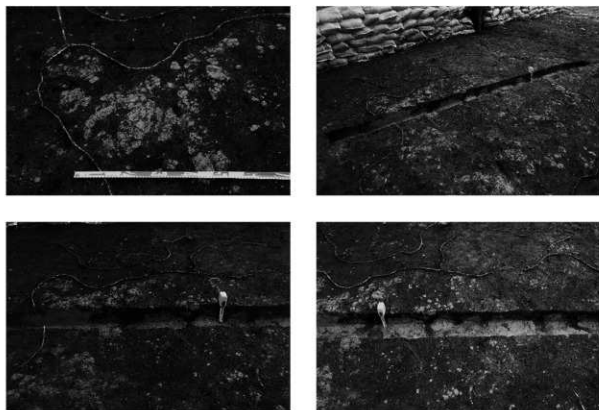
番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備 考	整理番号
10	道路跡 E 183)	路面	103	46	23	79.2	珪質	Gc	26次	106855
11	" (")	"	33	27	16	12.9	"	F	"	106853
12	" (D 183)	"	33	27	13	11.1	玉	Pc	"	同種 106856
13	" (F 182)	"	52	48	42	133.1	安	Ib	"	106543
14	" (A 188)	"	43	74	46	137.9	石英安	"	"	被熱 106540
15	" (J 176)	"	90	81	52	495.6	"	Ic	23次	106497
16	" (E 184)	"	90	92	58	505.9	"	"	26次	106541
17	" (F 181)	"	84	(59)	53	(260.7)	"	Ma	"	106542

44図 道路跡 出土石器 (2)



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	遺跡 E 10)	路面	無文	無文	無文			ミナツナ7±8	26次
2	遺跡 D 10)	路面			RL			ミナツナ7±8	26次, 被熱 (内面)
3	遺跡 D 10)	路面直上			無文			ミナツナ7±8	26次

49図 道路跡 出土土製品



道路跡断面

第 2 節 平安時代以降の検出遺構

1) 溝跡

平安時代以降に属する遺構は、第 23 次調査および第 26 次調査を通じ、溝跡 2 条を検出した。

第 25 号溝跡 (4・38 図)

[位置と確認] M - 17 と J - 20 を直線で結んだ範囲に位置し、溝跡の延びる方向は第 2 号道路跡の路面が延びる方向とほぼ同じである。道路跡が廃絶・埋没した後も凹地になっており、周辺の地形の中で最も低い部分に溝が構築されたと推測される。第 13 次調査で第 1 層中で確認され、第 23・26 次調査では部分的に精査を行った。

[重複] 第 23 次・26 次調査区においては第 2 号道路跡と重複し、本溝跡が新しい。

[平面形・規模] ほぼ北西から南東に走る溝跡であるが、第 26 次調査区 C 区では検出されず、B 区南端・D 区北端でそれぞれ東側にそって行く状況が認められる。第 23 次・26 次調査区で確認された長さは 114m、幅は 68～82m で、確認された部分の総延長は 306m となった。

[壁・底面] 第 b 層から掘り込まれ、第 1 層を底面とする。壁は底面から開きながら立ち上がり、断面は逆台形状を呈する。底面は第 23 次調査区から第 26 次調査区 B 区までは北西から南東に傾斜し、第 26 次調査区 D 区では南東から北西に傾斜し、C 区を挟んで北側と南側では底面の傾斜方向が異なっている。また、これまでの調査区において溝跡はやや東に蛇行しながらも、ほぼ直線的に延びていたが、B 区南端・D 区北端でそれぞれ東側にそって行く状況が認められ、C 区では検出されなかった。以上から、C 区を境とする異なる 2 条の溝跡である可能性と、谷方向に合流して行く可能性が考えられる。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、少量の炭化物や 層土の混入が認められる。溝跡の南側では堆積土下層に 層土のブロックが多く混入する。

[出土遺物] 土師器・須恵器など平安時代の遺物の出土はほとんどない。流れ込みの縄文土器が出土しているが、図示はしなかった。

[時期] 白頭山火山灰が混入する第 b 層を掘り込むことから、平安時代がそれ以降と考えられる。

第 28 号溝跡 (34 図)

[位置と確認] 第 23 次調査区 B 区の N - 15 に位置し、その標高は 210～216m である。第 23 次調査で確認され、精査を行った。

[重複] なし。

[平面形・規模] 北東から南西にほぼ直線的に走る溝跡である。確認された長さは約 37m、層上面での幅は 24～62m、深さは 1～16m である。

[壁・底面] 第 a 層から掘り込まれ、第 1 層を底面とする。壁は開きながら立ち上がり、底面は南西から北東に向かって緩やかに傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、ローム粒がわずかに混入する。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[時期] 層位から平安時代がそれ以降と考えられる。

(田中 珠美)

遺構名	位置	配石標高 (m)	確認	土坑 精査	配石規模 (長 短: m)	礎数	土坑長軸方位	土坑開口部規模 (長 短: m)	備考
第20号配石	M 168 169	19.0~19.4	20	未	4.34 1.08	88	未確認	未確認	
第2号配石	J・K・L 169~171	19.1~19.6	20	未	10.4 1.4	177	未確認	未確認	
第2号配石	L・M 176 177	20.1~20.7	23	未	4.64 4.16(径4.52)	45	未確認	未確認	
第30号配石	K・L 176 177	19.9~20.6	23	未	4.3 3.28(径4.2)	44	未確認	未確認	
第3号配石	M・N・O 174 175	20.1~20.5	23	未	4.16 4.12(径4.0)	34	未確認	未確認	
第3号配石	J 175 176	19.8~20.6	23	未	4.52 3.92(径4.64)	34	未確認	未確認	
第3号配石	H・I 175 176	19.6~19.8	23	未	径 4.72	36	未確認	未確認	
第3号配石	E・F G 178 179	19.3~19.7	23	未	4.72 4.16(径4.2)	41	未確認	未確認	
第3号配石	F 184 185	19.9~20.4	26	未	径 4.2	10	未確認	未確認	
第3号配石	E・F 185 186	19.5~20.3	26	未	4.96 4.0(径3.84)	36	未確認	未確認	
第3号配石	B・C 189 190	19.3~20.1	26	未	4.12 3.52(径3.48)	37	未確認	未確認	
第3号配石	B・C 190 191	19.5~20.1	26	未	3.78 3.6(径3.64)	30	未確認	未確認	
第3号配石	A B 190・191	19.7~20.1	26	未	径 3.6	25	未確認	未確認	
第40号配石	A B 191・192	19.6~20.2	26	未	径 3.92	11	未確認	未確認	

遺構名	位置	標高 (m)	確認	精査	重複・新旧	平面形	長軸方位	土坑開口部規模 (長 短: m)	備考
119土	F 186	20.3~20.5	26	26	なし	楕円形	N 82 W	1.82 1.1	
136土	N 152	21.3~21.5	23	未	なし	円形		1.12 1.02	
136土	O 150	21.1	23	未	なし	楕円形	N 50 E	(1.22) 0.88	
136土	J 171	19.3	23	未	なし	楕円形?	N 61 W	(0.52) 0.62	掘乱内で確認
136土	M・N 177 178	21.2	23	未	なし	楕円形	N 3 E	1.86 0.9	
136土	L 175	19.9	23	未	<道路跡	未確認	未確認	未確認	掘乱の断面で確認
137土	F 177	未	23	未	なし	楕円形	N 46 E	(0.7) 0.74	掘乱内で確認
137土	G 177	未	23	未	なし	未確認	未確認	未確認	掘乱内で確認
137土	K 177	20.1	23	未	なし	未確認	未確認	未確認	掘乱の断面で確認
137土	L 176	20.2	23	未	なし	未確認	未確認	未確認	掘乱の断面で確認
137土	L・M - 176	20.6	23	未	なし	未確認	未確認	未確認	掘乱の断面で確認

遺構名	位置	標高 (m)	確認	精査	重複・新旧	掘り方規模 (長 短: cm)	時期	備考
83埋	P 171	19.9	23	未	>道路跡	48 38	(円上c)	

表 3 検出遺構一覧

第 章 遺構外の出土遺物

第 23次調査および第 26次調査を通じ、出土した遺物はダンボール箱で土器が合計 17箱、石器が合計 1箱である。その内訳は第 23次調査が土器 9箱、石器 7箱、第 26次調査が土器 8箱、石器 6箱である。ここでは主要な遺物を図示し、遺物別に出土層位ごとに記述する。

第 1 節 遺構外出土土器

第 23次・26次調査で出土した土器は段ボール箱で 17箱で、多くは遺構外から出土したものである。破片資料が多く、器形を復元できたのはわずかである。時期は縄文時代中期を主体とし、前期・後期のものが見られる。少量ではあるが晩期のもも出土している。平安時代の土師器・須恵器も第 a・b 層から出土している。以下、層位ごとに述べていく。

第 層出土土器（46～48図）

縄文時代中期中葉を主体とするが、前期・中期後葉の土器も比較的多く出土している。破片での出土が多く、器形を復元できたのは数点のみである。

46図 1～7は前期の土器である。2は口唇部端面に、6は口唇部端面と頸部に巡る微隆帯上に刺突列が見られる。6は緩やかな小波状口縁を呈すると考えられる。8～10は前期末から中期初頭に位置付けられると考えられる。8・9は口縁部に単軸絡条体の押圧施文がみられる土器である。口縁最上部には縦位の押圧が施され、その下位には横位の押圧が施される。8の口縁部文様帯は広く、9は狭い。8は単軸絡条体の押圧の下部には刺突列がみられる。9には横位の隆帯が見られ、隆帯上にも縦位の単軸絡条体の押圧が施文される。10はLを平行に押圧施文した口縁部破片である。1～8・10は胎土に繊維が混入する。

46図 11は外面に条痕が施文される深鉢で、底部から口縁にかけて緩やかに開く器形である。外面の条痕は 3・4条を 1単位として縦方向に施文され、口縁付近では横・斜め方向の浅い施文がみとめられる。外面胴部上半には炭化物が付着する。12は円筒上層式の深鉢の胴部である。LRの結節第 1種羽状縄文が施文される。

47図 15～29は円筒上層式の土器である。15は波状口縁で、波頂部は肥厚する。口縁に沿って粘土紐を貼り付け、口縁部にも逆 J 字状の貼付がみられる。貼付上には単軸絡条体の押圧が縦位に施文される。中期初頭に位置付けられると考えられる。16・17は縷菌状の押圧施文が見られる。20は波状口縁の突起中央に貫通孔が見られる。22の外面には刻目が施文された粘土紐が貼り付けられ、内面には未貫通孔が見られる。23は口縁に沿って粘土紐を貼り付け、押圧縄文を斜位に施文している。器面には粘土紐が剥落した痕跡が認められる。24は口縁の折り返し部分に縦位の押圧縄文を施すもので、粘土紐の貼り付けや沈線などによる文様は見られない。25は口縁部内外面に、26は口縁部外面に楕円形状・縷菌状に粘土紐を貼り付けるものである。26の胎土には砂粒が多く混入している。28・29は地文上に粘土紐を貼り付ける円筒上層 d 式の土器片であるが、どちらも摩滅し、粘土紐が剥落している。

4図 31~34は 群 9類の土器片である。31は折り返し口縁で、口縁がやや内湾する器形を呈する。口縁部は地文施文のみで、胴部には地文上に沈線による 状の文様と竹管状刺突が施される。32は胴部の屈曲部に 2段の刺突列が施される。33は口頸部が内反する深鉢の口縁部破片と考えられる。34は口縁が内湾する器形で、口縁には無文帯が巡る。35は 群 8類の胴部破片であるが、小型の土器と考えられる。

4図 36は口唇部に沿って 2条の粘土紐が貼り付けられ、その間に連続した刺突が施される。下位にはL R施文後に粘土紐を貼り付けた文様が見られる。内面はミガキが施されるが、調整の際の粘土の浮き上がりが認められる。口唇部の粘土紐貼り付けや刺突列などから大木式の影響を受けた土器と考えられる。38は 群 8類の口縁部破片で、波状口縁を呈し、口唇部に沿って凹状沈線が巡る。口縁部には、口縁に沿って 2条の沈線が施文される。

4図 40~42は地文施文のみの深鉢の口縁部破片であるが、縄文原体の縦方向の回転により施文されており、円筒上層式以降の土器と考えられる。

第 c 層出土土器 (49~52図)

縄文時代中期後葉の土器が主体を占めるが、前期や中期中葉、後期の土器も出土している。前期の土器はわずかである。他の層位に比べ、器形復元できたものが比較的多い。

4図 49は前期の口縁部破片で、緩やかな波状を呈すると考えられる。

4図 46~52は円筒上層式の土器である。52は波状口縁の波頂部の内外面に円形に粘土紐を貼り付けている。口縁部は肥厚し、斜位に押圧縄文が施文される。胴部は地文縄文のみで沈線や粘土紐の貼り付けによる文様は見られない。 群 4類あるいは 5類と考えられる。

4図 53・54・57は底面に網代痕が認められる底部破片である。網代痕は57では明瞭であるが、これ以外では摩滅し、判然としない。53の外面には原体の横回転による文様が施文され、 群 6類に、57は単軸絡条体の回転施文が見られ、 群 6類に比定される。59は胴部中央にややふくらみをもつが、底部から口縁までほぼ直立する器形と考えられる。地文施文のみの底部破片である。59は小型の台付き土器の台部破片で、底面は平坦ではなく、凹凸がある。全体的に摩滅している。

5図 60は地文上に沈線による渦巻文様が施文される。胎土には砂粒を多く含む。 群 8類に比定される。

5図 61・64~69は 群 9類の口縁部破片である。61と64は口縁がやや外反し、65・66は口縁がやや内湾する器形である。61・64・66は口縁部に無文帯をもつ。61は無文帯下部に横位の刺突列が見られる。69は地文上に幅広の沈線より横位および 状の文様が施文される。

5図 69は 5図 78・79と同一個体である。73は無文の小型の深鉢胴部下半で、外面には炭化物の付着が認められ、内面には被熱によるハジケが見られる。74は口縁部は無文で、胴部にはL R地文上にヒレ状の貼付が見られる。口縁内面にもヒレ状の貼付をもつ。口縁内面には炭化物の付着が著しい。79は地文上に沈線による波状の文様を描くもので、 群 10類と考えられる。5図 76は胴部中央に最大径を有し、胴部から口縁部にかけていったんすぼまる器形で、口縁部は欠損する。77は同一個体で、胴部上半の破片である。R単軸絡条体の回転施文を地文とし、胴部上半に幅広の沈線による曲線状の文様が施文される。78・79は波状口縁の波頂部に沈線による縦長の楕円形を描き、内部にR Lを充填し、竹管状の刺突を施す。口縁内面は折り返しとなっていて波頂部に

はヒレ状の貼付が見られる。80～82は口縁部は欠損するが、底部からほぼまっすぐに開く器形で、胸部上半は内湾すると考えられる。器壁は薄く、胎土には砂粒を多く含み、摩滅が著しい。胸部上半に沈線で長楕円形の区画を作り、内部にR Lを充填、沈線の周りに刺突を施す。81も同一個体と考えられるが、沈線の内外が反転し、内部が無文、外部が縄文施文となっている。

5図 83・84はどちらも器壁が薄く、無文で、胎土には砂粒がやや多く混入する。83は外面に工具による横方向の成形痕が明瞭に残り、内面はミガキが施されるが、部分的に刷毛状の工具によると考えられる斜め方向の明瞭な調整痕も残る。84は外面が丁寧なミガキが施されており、内面は83同様、部分的に斜め方向の調整痕が見られる。胎土や調整などから十腰内式期のものと考えられる。

第 b 層出土土器 (52～54図 - 110～112)

本層は白頭山苦小牧火山灰が混入する層で、土師器や須恵器も出土する。しかし、最も多く出土するのは縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものである。破片での出土がほとんどで、復元できた底部が数点ある。

5図 86は口唇部に沿って粘土紐が貼り付けられ、横位にL Rの押圧施文が施される。

5図 88はゆがみがみられ、口縁がかなり強く内湾している。89は波状口縁の波頂部が王冠状を呈し、端面には渦巻状にLの押圧施文が見られる。90は口縁部端面に鋸歯状に粘土紐が貼り付けられる。91はL R地文上にRの結節回転施文をし、横位の沈線を施文する。この上位には斜位の粘土紐の貼り付けが見られる。93は緩やかな波状口縁、94は波頂部が三角形を呈する波状口縁で、どちらも口縁直下は無文で、胸部には地文以外の文様は見られない。94は口唇部に沿って粘土紐が貼り付けられる。群 4類あるいは5類と考えられる。

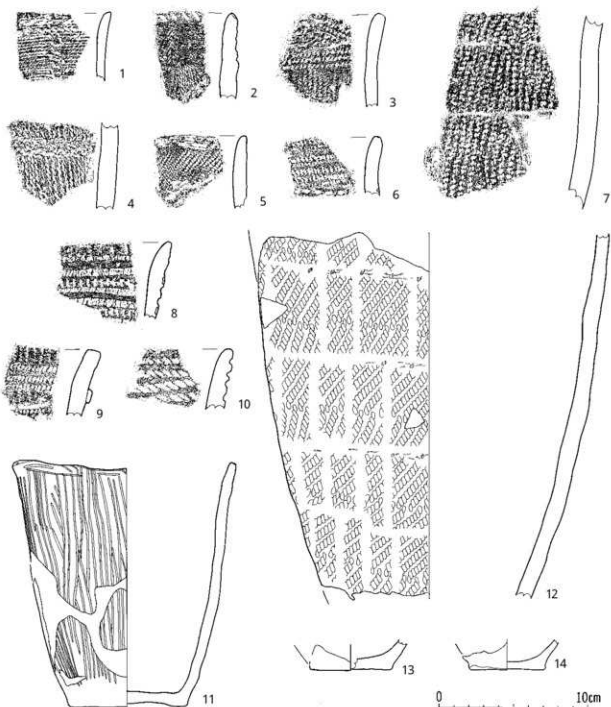
5図 95はL R地文上に細い沈線による渦巻文が施文される。器壁は薄く、内面はミガキが施されている。群 8類と考えられる。96は底径4.2mの小型の土器の底部である。L単軸絡条体の回転施文を地文とし、2条の垂下する沈線が施文される。群 8類あるいは9類と考えられる。53図 97・98は群 9類の口縁部破片で、口縁がやや内湾する器形である。地文上に2条あるいは3条の沈線による 状の文様が施文される。97では竹管状の刺突が付加される。99は群 9類土器の頸部～胸部上半の破片で、口縁が大きく内反する器形である。口頸部は無文で丁寧なみがかれ、胸部にはR L縄文が施文される。内外面には炭化物が付着する。101も群 9類の土器片であるが、口縁が強く内湾する器形と考えられる。2条の横位の沈線で口縁部を区画する。口縁部は無文で、下位は2条の沈線によりU字状に区画される。沈線間、沈線による区画内には竹管状刺突が施される。103は底部から胸部にかけて内湾する器形と考えられる。105は群 10類の口縁部破片で、R L地文上に沈線による波状文が施文される。106は内面に被熱によるハジケが認められる。

5図 110～112は地文のみが施文される底部である。110は底面および内面に被熱によるハジケが見られる。110は原体の横回転の施文、111・112は縦回転の施文で、110は群 6類、111・112は群 1類と考えられる。

第 a 層出土土器 (54図 - 113～115)

他の層に比べ土器の出土量が少ない。小破片が多く、図示できるものはかなり少なかった。

5図 113は縄文時代晩期の鉢の底部で、底部から口縁にかけて内湾する器形で、時期は晩期前葉



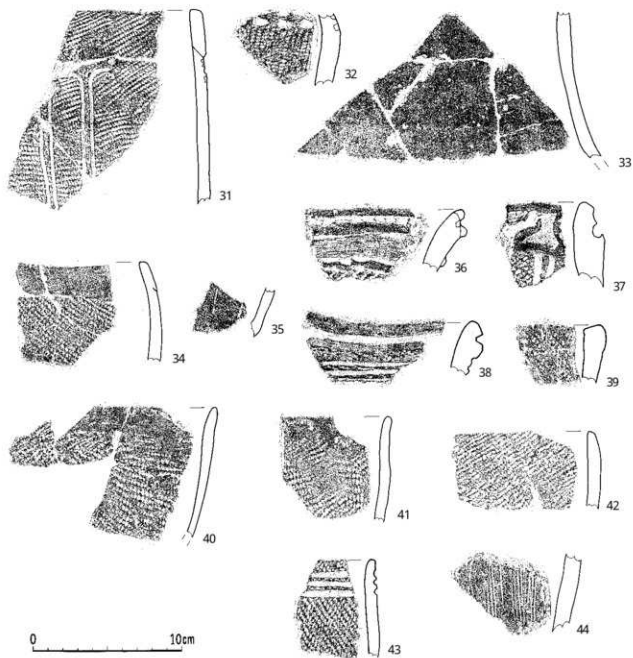
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	D 188		LR・R1押、R押結 2			ミカキ	4	26次、縹織混入	
2	O 150	#	LR押	多軸結		#	5	23次、縹織混入	
3	M 202	#	L押			#	#	26次、縹織混入	
4	K 168	#		R単結 1、R結回		#	6	23次、縹織混入	
5	O 151	#	LR			#	5	23次、縹織混入	
6	O 150	#	L単結 1押、割突			#	#	23次、縹織混入	
7	B 192	#			L R単結 1	#	6	26次、縹織混入	
8	D 198	#	R単結 1押、割突			#	5・1	26次、縹織混入	
9	Q 198	#	割(縹織押)、縹織押			#	#	26次	
10	B 185	#	LR押			#	#	26次、縹織混入	
11	O 150	#	糸履		糸履	#	ミカキ	11 注、灰化附着(9割)	
12	#	#	結果第 1種 (LR・LR)		結果第 1種 (LR・LR)	#	6	23次	
13	M 202	#			無文	#	6	26次、縹織混入	
14	C 188	#			無文	ナデ	11	26次	

46図 第 層出土土器 (1)



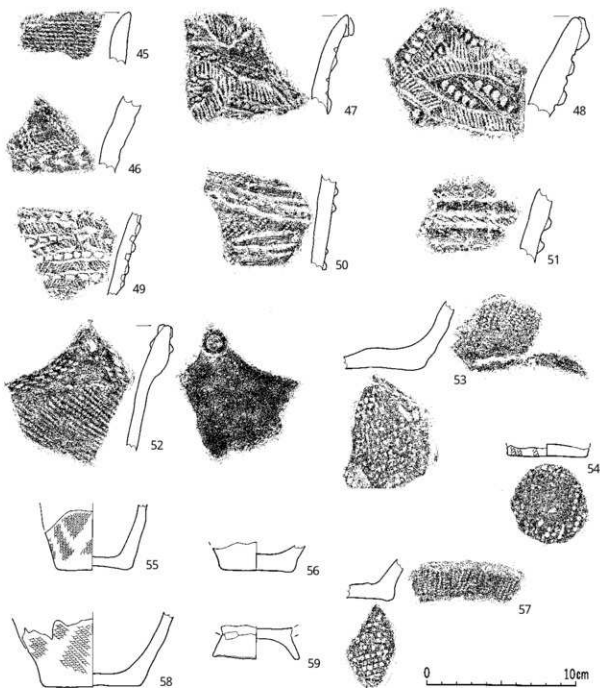
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
15	D 188	"	貼付 (L押) 単結押			ミガキ	1	26次、波状口縁	
16	P 199	"	貼付 (L押) L押			"	"	26次、波状口縁	
17	L 156	"				"	"	23次、波状口縁	
18	O 150	"	押肌、押付 (馬蹄形状)			"	2	23次	
19	E 180	"	貼付 (L押) L押・R押			"	1	26次、波状口縁、縁部混入	
20	C 189	"	貼付 (L押) 刺突、貫通孔			"	3	26次、波状口縁	
21	N 152	"	貼付 (押) 凸肩(馬蹄状)			"	2	23次、波状口縁	
22	N 151	"	貼付 (刻み)			"	4	26次、特設縁部、波状口縁	
23	N 150	"	L向押	貼付、LR		"	"	23次、表化焼付着(角部)	
24	N 151	"	R向押	RL		"	4・5	23次	
25	N 152	"	貼付			"	4	26次、内面に刺突、波状口縁	
26	E 179	"	貼付	RL		"	"	23次	
27	"	"	RL押			"	5	23次	
28	L 156	"	貼付			"	4	23次、焼熱(内面)	
29	M 152	"	貼付、凹刻(1種) (L・R)			"	"	23次	
30	D 190	"		RL、洗線		ミガキ	8・9	26次	

47図 第 4層出土土器(2)



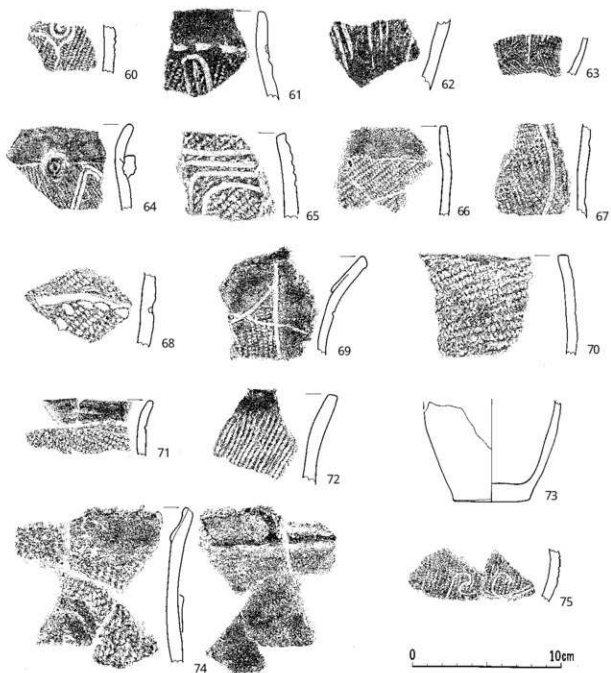
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
31	D 189-190		LR	LR 沈線, 刺突(竹葉状)		ミガキ	9	26次, 折り返し口縁	
32	O 151	"		LR 刺突		"	"	23次	
33	D 190	"		無文		"	"	26次	
34	D 189	"	無文	RL		"	"	26次, 折り返し口縁	
35	C 191	"			沈線		8-9	26次	
36	O 150	"	刺突, 貼付	貼付, LR		ミガキ		23次	
37	M 156	"	沈線	LR 沈線		"	"	23次	
38	M 203	"	RL, 沈線			"	8	26次	
39	N 150	"		RL		"		23次	
40	P 199	"	LR			"	11	26次, 炭化附付層(赤土)	
41	"	"	LR			"	"	26次, 炭化附付層(赤土)	
42	D 189	"	LR			"	"	26次	
43	L 156	"	RL, 沈線			"	2	23次	
44	O 150	"			糸縷	"	6	23次	

48図 第 層出土土器(3)



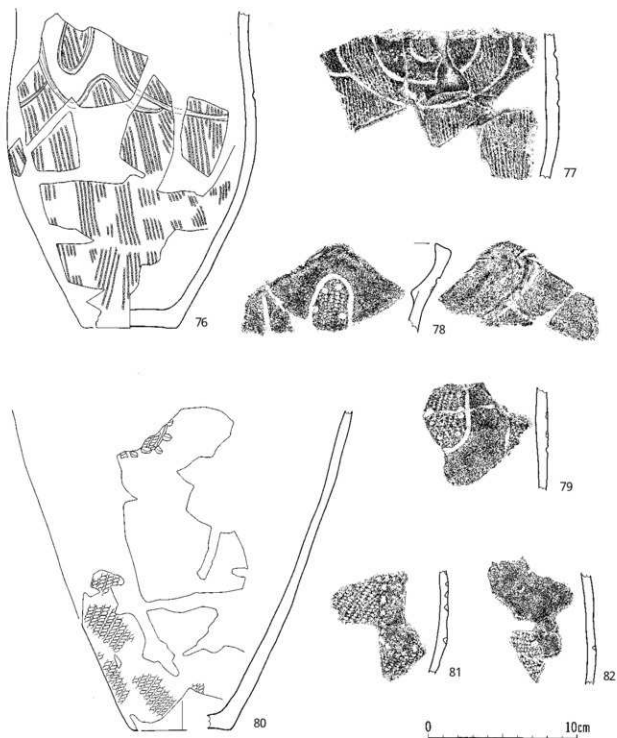
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
45	R 186	c	L甲					5	26次、織織混入
46	P 186	"	L甲、L甲(馬蹄形状)			ミガキ		2	26次
47	A 189	"	貼付(甲) L・甲、刺突			"		3	26次
48	M 172	"	貼付(馬) 透眼(蹄)形状			"	"	"	23次、波状口縁
49	E 182	"	貼付(L甲)、刺突			"	"	"	26次
50	M 201	"		貼付、透眼(馬) (LR・RL)			"	4	26次
51	L 172	"		貼付、透眼(馬) (LR・RL)			"	"	23次
52	N 201	"	貼付、甲	RL		ミガキ		4・5	裏、刺突、刺突(蹄)
53	L 171	"			LR	"	網代瓶	6	23次
54	D 183	"			無文		網代瓶	"	26次
55	Q 187	"			RL	ナデ	ナデ	11	26次
56	L 175	"			無文	ミガキ	"	"	23次
57	M 171	"			L甲絡 1		網代瓶	6	23次、織織混入
58	L 173	"			LR	ナデ		6	26次、被熱(内面)
59	L 174	"			無文			6	23次

49図 第 4層出土土器(1)



番号	出土地点	出土層位	面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
60	M 172	c		RL 沈線		ミガキ	8	23次	
61	R 185	#	無文、刺突	RL 沈線、刺突		#	9	26次	
62	Q 186	#			沈線	#	#	26次	
63	F 182	#			RL 沈線	#	#	26次	
64	A 189	#	無文	貼付、RL 沈線		#	#	26次、折り返し口縁	
65	M 172	#	LR 沈線			#	#	23次	
66	M 172	#	無文	LR		#	#	23次、折り返し口縁	
67	L 171	#		RL 沈線		#	10	23次	
68	M 172	#		RL 沈線、刺突		#	#	23次	
69	#	#	RL 沈線			ミガキ	#	23次、口縁内面折り返し	
70	#	#	RL			#	#	23次	
71	K 171	#	無文	RL		#	11	23次	
72	L 171	#	RL			#	10	23次	
73	K 186	#			無文		11	23次、刺突(付)、粘(付)	
74	K 171	#	無文	LR ヒレ状貼付			10	23次、刺突(付)、粘(付)	
75	I 175	#			LR 沈線	ミガキ	#	23次	

50図 第 5 層出土土器 (2)



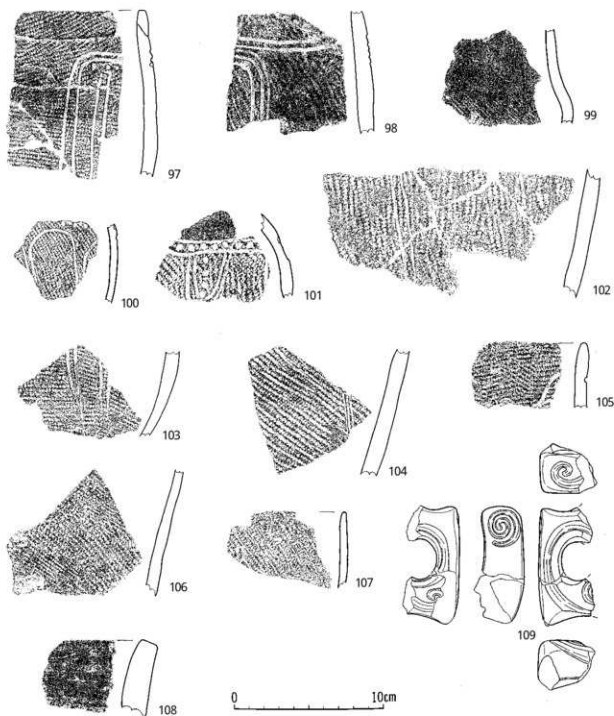
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
76	P 186	c		沈線、R線結 1	R線結 1	ミガキ	10	26次	
77	"	"		R線結 1、沈線		"	"	26次	
78	M 172	"	RL、沈線、刺突(竹筒状)			"	"	23次、口縁内面7ヶ所施付	
79	"	"	RL、沈線、刺突(竹筒状)			"	"	23次	
80	P 189	"		沈線、刺突、RL	RL	ナデ	"	26次、81・82と同一書体	
81	A 189	"		沈線、刺突、RL		ミガキ	"	26次	
82	"	"		沈線、刺突、RL		"	"	26次	

5図 第 層出土土器(3)



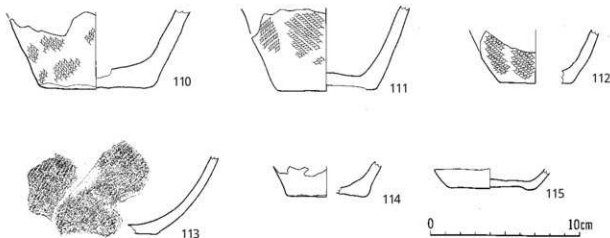
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
83	M 203	c		無文	無文	三刀半		26次	
84	I 175	#			無文	"	三刀半	2	23次
85	B 191	b	LR甲	R単結 1		"	"	5	26次、縹線混入
86	F 184	#	LR甲			"	"	1	26次
87	D 189	#	貼付 (L甲)、L甲			"	"		26次、透状口縁、縹通孔
88	A 191	#	L甲、貼付 (L甲)			"	"		26次
89	B 189	#	貼付 (L甲)、L甲、刺突			"	"	3	26次、波状口縁
90	E 180	#	貼付 (L甲)、L甲、刺突			"	"		26次、波状口縁
91	#	#		LR 縹筋、貼付、沈線		"	"	5	26次、縹化附付層 (赤蓋)
92	D 189	#	貼付			"	"	4	26次、透状口縁、内面に貼付
93	E 199	#	LR			"	"	4・5	26次、波状口縁
94	D 190	#	無文	RL		"	"		26次、波状口縁
95	D 191	#		LR、沈線		"	"	8	26次
96	D 192	#			沈線、L単結 1	"	三刀半	8・9	26次

52図 第 層出土土器 (4)



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
97	E 189	b	LR	LR 沈線、刺突(竹管状)		ミガキ半	9	底、外縁に黒い地刺(内面)	
98	M 168	"		RL 沈線		"	"	23次	
99	D 189	"	無文	RL		"	"	25次、炭化物付着(内外面)	
100	"	"		RL 沈線、刺突(竹管状)		"	"	26次	
101	"	"		RL 沈線、刺突(竹管状)		"	"	26次	
102	E 190	"			RL 沈線	"	"	25次、炭化物付着(内面)	
103	E 189	"			LR 沈線	"	"	26次	
104	D 192	"			LR 沈線	"	"	8・9 26次	
105	F 186	"	RL 沈線			"	10	25次、炭化物付着(内面)	
106	J 179	"			RL	"	6	23次、凝結(内面)	
107	F 184	"	RL			"	11	26次	
108	E 189	"	無文			"	"	26次	
109	D 190	"		沈線			"	26次、把手	

53図 第 層出土土器(5)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
110	D 189	b			RL	ナデ	6	ⅢB(Ⅱ) 26次	
111	P 199	#			LR	#	ミガキ	11 26次	
112	D 191	#			LR	ミガキ	#	26次	
113	M 177	a			LR		ミガキ	23次	
114	C 184	#			無文			11 26次	
115	不明	#			無文	ミガキ	ミガキ	2 26次	

54図 第 層出土土器 (6)

と考えられる。119は無文の底部破片で、外面は丁寧なミガキが施されるが、内面には刷毛状の工具によると考えられる斜め方向の調整痕が認められる。器壁は薄く、胎土には砂粒が多く混入する。調整・胎土などから十腰内式期のものと考えられる。

第 層出土土器 (55~57図 - 148~152)

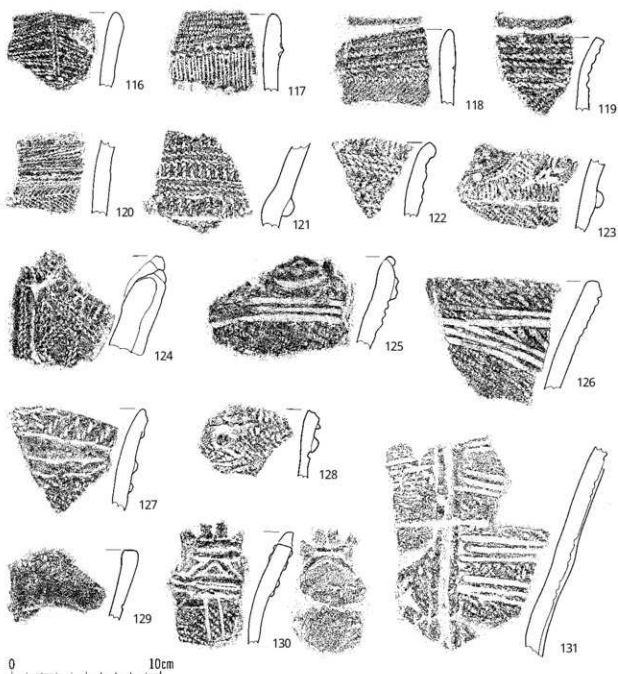
第 a ~ c 層を細分せず第 層として一括して取り上げたもので、縄文時代前期から後期までのものが出土しているが、他の層に比べて、後期のものが比較的多く見られる。破片資料がほとんどである。

55図 116~120は前期に属すると考えられる。116は緩やかな波状口縁で、押圧縄文による文様が施文される。117と118は刺突列によって口縁部が区画され、口縁部には押圧縄文による文様が施文される。117では低い隆帯上に2列の刺突列が施されている。118と120では胴部上半に結束羽状縄文が施文される。118・119は口縁端面にも縄文が施文される。

55図 121・122は横位の押圧縄文と縦位の短い押圧縄文の組み合わせによる文様が施文される。胎土には繊維は混入せず、円筒上層 a 式に属すると考えられる。128は口縁に押圧施文が施され、胴部は地文上に円形の貼付がみられ、その下部には沈線による鋸歯状の施文がみられる。129は緩やかな波状口縁の波頂部で、沈線により口縁部文様帯が区画され、その上位は無文である。130は口縁の突起部分の内外面に貼付が用いられるが、胴部は2条の沈線が垂下する。131は2条の縦位の貼付を中心として左右に3条ずつの横位沈線が施文される。125・126は同一個体と考えられる。

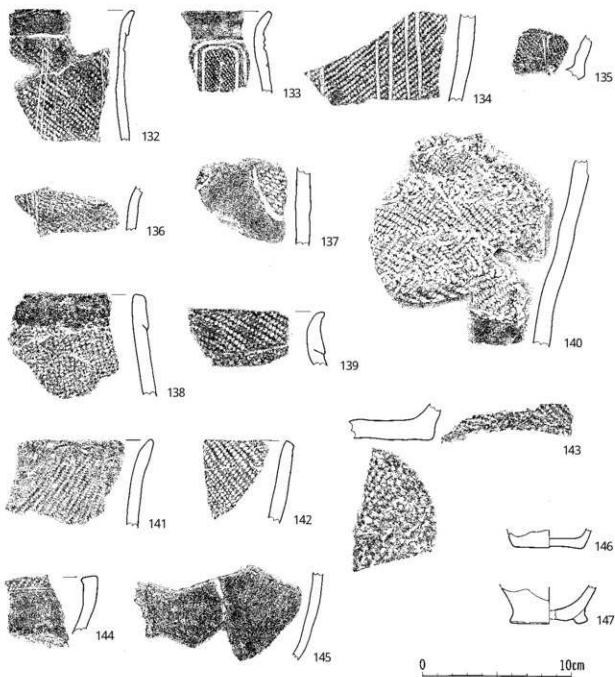
55図 132~134は 群 9類と考えられる。132は細い沈線による幅の狭い状、133は2条の沈線による状の文様が施文される。139は 群 8類あるいは9類の小型土器と考えられる。

55図 14は口縁がやや開く器形と考えられる。全体的に摩滅しており、文様等が判然としない部分もあるが、口縁部は無文で、胴部上半には縦回転の縄文が施文される。地文上に浅い沈線によ



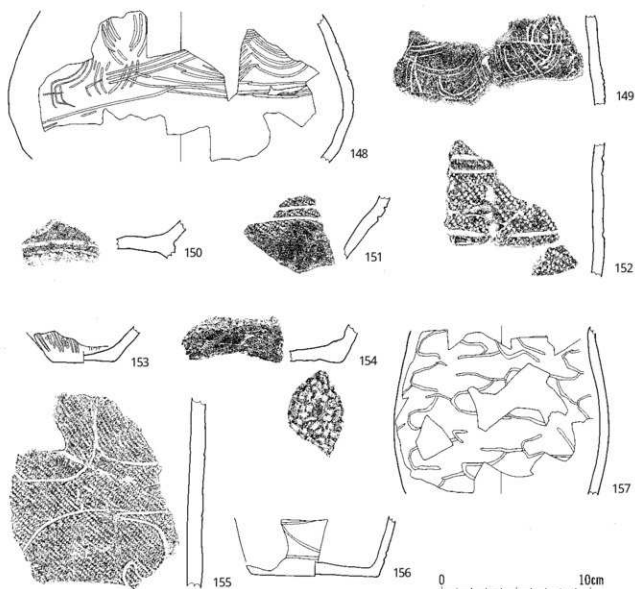
番号	出土地点	出土層位	外 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
116	T 181	"	L・R押、刺突			ミガキ	5	26次、横線混入	
117	Q 152	"	波状口縁(非刺突)	R押結 1		"	"	23次、横線混入	
118	R 152	"	L押結 5押、刺突	結束第 1種 (L・RL)		"	"	23次、横線混入	
119	M 152	"	L押	LR		"	"	23次、横線混入	
120	L 157	"	R押	結束第 1種 (L・RL)		"	"	23次、横線混入	
121	O 150	"	L押、貼付 (L押)			"	1	23次	
122	B 175	"	L押			"	"	波、刺突(内)	
123	P 152	"	波(刺) 波(刺) 波(刺)	RL		"	2	23次	
124	O 151	"	貼付 (L押)、L押			"	1	23次	
125	T 182	"	貼付	RL、沈線		"	5	26次	
126	"	"	R押	RL、沈線		"	"	26次	
127	K 170	"	R押	貼付、RL		"	4	23次	
128	E 179	"	R押	波(刺) 波(刺) 波(刺)		"	5	23次	
129	K 178	"	無文、沈線			"	9	23次、波状口縁	
130	N 151	"	貼付	RL、沈線		"	5	23次、波状口縁	
131	T 181	"		RL、貼付、沈線		"	"	26次	

55図 第 5 層出土土器 (7)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
132	F 178		無文	RL 沈線		ミガキ	9	注、別所埋(陸)	
133	E 179		無文	RL 沈線			※	23次	
134	L 168				LR 沈線		※	23次	
135	D 189				RL 沈線		8・9	26次	
136	L 180				陣結 1、沈線	ミガキ	※	23次	
137	N 157			RL 沈線			10	23次	
138	L 180		無文	RL			9・10	23次、折り返し口縁	
139	N 186		RL				※	26次、折り返し口縁	
140	J 177				結線第 1種 (LR・RL)	ミガキ	6	23次	
141	J 203		無文	RL 沈線		※	10	26次	
142	K 170		RL				4・5	23次	
143	N 174				RL		網代痕	6 23次、被熱(内面)	
144	B 191		LR 沈線	無文				26次	
145	P 152				無文	ナデ	6	23次	
146	B 191				無文		※	26次	
147	L 180				無文		6	23次、繊維混入	

56図 第 層出土土器 (8)



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
148	K 178			沈線		ミガキ	2	23次	
149	"	"		沈線		ナデ	"	23次	
150	T 189	"			沈線		"	26次	
151	P 184	"			RL 沈線	ミガキ	"	30次、黒化附片層(赤黒)	
152	B 175	"	RL 沈線			"	"	23次	
153	O 198	表土			沈線、RL	"	ミガキ	9	26次
154	C 183	風倒木			無文		網代痕	6	26次
155	L 178	表土	LR 沈線			ミガキ		10	23次
156	N 185	風倒木			沈線	"		2	26次
157	"	"		沈線		"	"	"	26次

57図 第 層出土土器(9)・第 層出土土器

る文様が施文され、口縁から1条の沈線が垂下している。第1群10類と考えられる。

56図147は胎土に繊維が混入し、前期の小型土器の可能性が考えられる。

57図148は群2類の壺型土器の胴部で、胴部下半に最大径を有し、胴部に屈曲をもつ器形と考えられる。3条を1単位とする沈線により縦位の連鎖状文様とそれを連結する横位・斜位の沈線が施文される。沈線は細く浅く、文様の途切れや付け足しが認められる。施文は縦位の連鎖状文様施文後に横位・斜位の沈線が施文される。149も148とほぼ同様のモチーフが見られる。150は底部破片で、横位に1条の沈線が施文される。

第 層出土土器 (57図・153～157)

第 層および表土・風倒木から出土した土器を一括した。

57図153は表土から出土した群8・9類の底部である。R L地文上に2条を1単位とする垂下する沈線が施文される。154は底面に網代痕が見られる。159は大木10式併行期の胴部片である。L R地文上に沈線による曲線状の文様が施文される。

風倒木からは群2類の土器が出土している。156は底部破片であるが、横位・斜位の沈線が施文される。157は壺の胴部で、最大径を胴部下半に有する器形と考えられる。細く、浅い沈線による蛇行する縦方向の曲線間を横位の沈線で連結する文様が施文される。施文は縦の曲線、続いて横位の連結する文様と、左から右へと展開していく。156・157どちらも摩耗が著しい。

(田中 珠美)

第 2 節 遺構外出土石器

第 23 次・26 次調査を通じ、出土した石器はダンボール箱で合計 13 箱である。その内訳は、第 23 次調査が 7 箱、第 26 次調査が 6 箱である。以下に主要な石器を図示し、出土層位別に記述する。また、本文中の石器番号は石器実測図（58 図～7 図）の通し番号を示す。

第 層出土の石器（58 図 1～6 図 24）

第 層は縄文時代中期に形成された遺物包含層である。遺構の多くは第 層上に構築されていることから遺構の検出作業は本層を指標とし、これより下層には調査は及んでいない。このため、本層から出土した遺物の総数は僅かである。ここでは出土した主要な石器を 58 図～6 図に示し、器種別に記述する。

・石鏃（58 図 1・2）

1 は有莖 Y 基鏃、2 は円基鏃である。2 は薄い剥片を素材に周辺調整により整形し、表裏両面に素材の剥離面を大きく留める。

・石槍（58 図 3）

木葉型を呈する両面調整の石槍である。平坦な剥離によって全面が調整され、裏面に素材剥片の剥離面を大きく留める。

・石匙（58 図 4・5）

4 は縦長剥片を素材とし、背面側の左右二側縁に比較的急斜度の連続的な調整を加え、刃部を作出する。5 は縦長剥片を素材とし、背面側の左右二側縁側から平坦で細長い調整を連続的に加え、背面側の全面に調整を施す。

・スクレイパー類（58 図 6～8）

6 は不定型な剥片を素材に、素材の背面側右側縁に比較的急斜度の調整を加え、鋸歯状の刃部を作出する。7 は大型の剥片を素材とする削器である。素材の背面側に全周方向からの求心的な細長く平坦な剥離を連続的に加え、平面形を三日月形に整形する。刃部は弧状を呈し、石匙の刃部の特徴に類似する。腹面側には調整を加えず、素材剥片の剥離面を留める。8 は剥片の腹面側右側縁に細部調整を加え刃部を作出する。

・使用痕剥片（58 図 9・59 図 10）

9 は珪質頁岩製の剥片に両極技法により二次加工を加え、その左側縁に不規則で微細な剥離痕が観察される。10 は背面側の左右二側縁及び末端に、不規則で微細な剥離痕が連続的に観察される。特に末端の剥離痕には稜線の摩滅が認められる。

・石核（59 図 11～13）

全て珪質頁岩製である。11 は複設打面石核で、下面と右側面に原礫面を大きく留める。打面と剥片剥離作業面が固定化されず、正面・上面・左側面で剥片剥離が行われている。上面は前方から剥離された剥離面で構成され、この上面の平坦部を打面に正面で一枚の不定型な剥片が剥離されている。12 は単設打面石核である。上設打面は主に前方から剥離された複数の剥離面により構成され、剥片剥離はこの上設打面を打撃面として、正面・裏面・左右両側面において行われている。石質は節理が多く、剥離された剥片も不定型で小型である。13 は扁平な礫を素

材とし、素材の表裏両面において表面側の右側面から求心的な剥離を連続的に行う。刃部と考えられる連続的な細部調整は認められず、一種の盤状石核と考えられる。また、被熱による赤色変化が認められ、被熱後に剥片剥離が行われた状況が観察される。石質は粗悪で、剥離された剥片も不定型で小型である。

・磨製石斧（6図14）

基部側の上半を大きく折損する。側面の稜線が明瞭で断面が不整な長方形を呈する。刃部は表裏両面から丹念に研ぎ出され、平面形が緩やかな弧状をなす。

・敲磨器類（6図15～6図23）


15・16は凹石で、素材の平坦な表裏両面に敲打を加え、凹部を形成する。15の表面及び側面にも敲打痕が観察される。17・18は表裏両面及び側面に敲打痕が認められる例である。19～23は磨石である。19は長楕円形を呈する小礫を素材とし、その平坦な裏面に広く磨痕が観察される。20・21は敲打痕と磨痕が複合して観察される例である。いずれも素材の平坦な部分に敲打を加え、さらに磨面に利用する。22・23は断面が扁平で、平面が楕円形を呈する礫を素材とし、側面の表裏両面及び下端の一辺に調整剥離を加える。その底部は摩耗により平坦面を形成する。23の折れ面には磨痕が観察され注意される。

・石皿（6図24）

扁平な礫を素材とし、その平坦な表面に直線的な擦痕が観察される。

第 c 層出土の石器（6図25～6図44）

第 c 層は縄文時代中期後葉以降に形成された遺物包含層であり、最花時期や大木10式併行期の遺物が包含される比率が高い。ここでは出土した主要な石器を6図～6図に示し、個別に記述する。

29は有茎Y基礎で、表裏両面にアスファルトの付着が認められる。26～28はスクレイパー類である。26は素材剥片の背面・腹面側の両面に周縁からの求心的な調整を加える。上部を折断する。27は背面側の左右二側縁に比較的急斜度の連続的な調整を加え、互いが平行する直線的な刃部を作出する。上部と下部を折断する。28は腹面側の左右二側縁に急斜度の連続的な調整を加え刃部を作出する。その刃部は右側縁が直線的で、左側縁が鋸歯状となる。末端には不規則で微細な剥離痕も観察される。29は使用痕が認められる剥片で、両極剥片の背面側の左側縁に不規則で微細な剥離痕が観察される。30・31はピース・エスキューである。断面が楔形を呈し直線的な上下の二辺が対をなす。器体の表裏両面には上下方向からの細かい剥離痕が認められる。32は小円礫を素材に両極技法により剥離された剥片である。背面に原礫面を大きく留める。33は異形石器である。表裏両面に縁辺部から連続的な細部調整を加え、左右対称の「」状に整形する。器面には広く光沢が認められる。34は磨製石斧で、上部を大きく折損する。断面が楕円形を呈し、刃部は表裏両面から丹念に研ぎ出され、平面形が弧状を呈する。器面の研磨が及ばない部分には敲打痕が残る。35～37は凹石で、素材の平坦な表裏両面に敲打を加え、凹部を形成する。35・36の側面にも敲打痕が観察される。38～40は敲石である。38は多面体を呈する礫を素材とし、その上下両端及び稜部に敲打痕が著しく観察される。39は長楕円形状の礫を素材に、上端及び稜部に敲打痕が観察され、裏面には敲打が集中し凹部を形成する。また、尖頭状を呈する下端には、長軸方

向に垂直に打ち敲いた場合に生じる様な剥離痕が認められる。40は拳大の円礫を利用し、下端及び側面に敲打痕が観察される。41～43は楕円形状を呈する礫を素材に、平坦な表・裏面及び側面に敲打痕が認められる例である。44は長楕円形を呈する礫を素材とし、表裏両面及び側面に広く磨痕が観察される。また、表面に敲打痕が僅かに残る。

第 b 層出土の石器 (65図 45～66図 60)

第 b 層は上層に白頭山苔小牧火山灰 (B-Tm) の堆積が認められる平安時代に相当する遺物包含層である。出土する遺物には縄文時代の遺物が占める比率が高く、平安時代の耕作等により土層が攪乱されている可能性がある。ここでは出土した主要な石器を65図～66図に示し、個別に記述する。

45は凹基礎で、アスファルトの付着が認められる。46～59はスクレイパー類である。46・47は素材剥片の左右二側縁に調整を加える例である。48は上部と下部を折断する。素材剥片の背面側の右側側縁及び腹面側の右側側縁に緩斜度の連続的な調整を施す。47は腹面側の左右二側縁に緩斜度の連続的な調整を加え、直線的な刃部を作出する。48～50は素材剥片の片側側縁に調整を加える例である。48は素材剥片の腹面側右側縁に緩斜度の連続的な調整を加える。打瘤の除去を目的とした剥離とも捉えられる。また、腹面側の鋭利な左側縁には、使用痕と推察される不規則で微細な剥離痕が観察される。49は背面側の左側縁下部から末端に急斜度の深い調整を加え刃部を作出する。また、腹面側にも同一方向から平坦な剥離を加え、打瘤が部分的に除去される。50は縦長の剥片を素材とし、背面側の右側側縁に連続的な調整を加える。また、左側縁の打面側には使用痕と推察される不規則で微細な剥離痕と摩耗が観察される。51は背面側の左右二側縁に大きく深い剥離を加える。末端には急斜度の剥離を連続的に加え刃部を作出する。52は素材剥片の背面側に全周方向からの求心的な剥離を連続的に加える。腹面側の上端及び末端にも調整が加えられる。53・54は両極技法により剥離された素材に、調整を加え刃部を作出する例である。53・54は正面側の左側縁に急斜度の剥離を連続的に施す。59は素材剥片の背面側末端に調整を加える。被熱による剥離が背面・腹面の両面に観察される。56は黒曜石製の剥片を素材とし、下部を折断する。鋭利な腹面側の左側縁に、使用痕と推察される不規則で微細な剥離痕が観察される。57・58は両極技法により剥離された剥片である。59は石匙である。素材剥片の背面側が左右二側縁からの平坦で細長い剥離により全面が調整される。腹面側の左側縁にも平坦で深い剥離を施し、下端の折れ面からも調整が及ぶ。60は敲打痕と磨痕が複合して観察される例である。素材の平坦な一面に敲打を加え、さらに磨面に利用する。

第 a 層出土の石器 (67図 61～68図 68)

第 a 層は白頭山苔小牧火山灰 (B-Tm) の降下以降に形成された地層である。ここでも縄文時代の遺物が占める比率が高い。出土した主要な石器について67図～68図に示し、個別に記述する。

61・63はスクレイパー類である。61は素材剥片の背面側左右二側縁に緩斜度の連続的な調整を加え刃部を作出する。腹面側の右側縁にも連続的な調整が施される。63は腹面側の右側縁に連続的な調整を加え刃部を作出する。62は剥片を素材に両極技法により二次加工を施す。64は磨製石斧の破片である。表面を研磨により整形する。65は楕円形を呈する礫を素材とし、その平坦な一面に敲打痕が広く観察される。66は敲打痕と磨痕が複合して観察される例である。長楕円形を呈

する礫の表裏両面に磨痕が広く観察され、側面には敲打痕が及ぶ。67は石棒である。表面に研磨による擦痕が認められる。68は石皿である。長方形状を呈する礫を素材とし、その平坦な表裏両面の中央に磨痕が観察される。

第 層出土の石器（68図 69～70図 82）

第 層出土として扱う遺物の多くに、調査の過程で第 層の分層が困難であった地点の、あるいは分層し難い状況下で取り上げを行った遺物が含まれている。ここでは主要な石器を68図～70図に示し、個別に記述する。

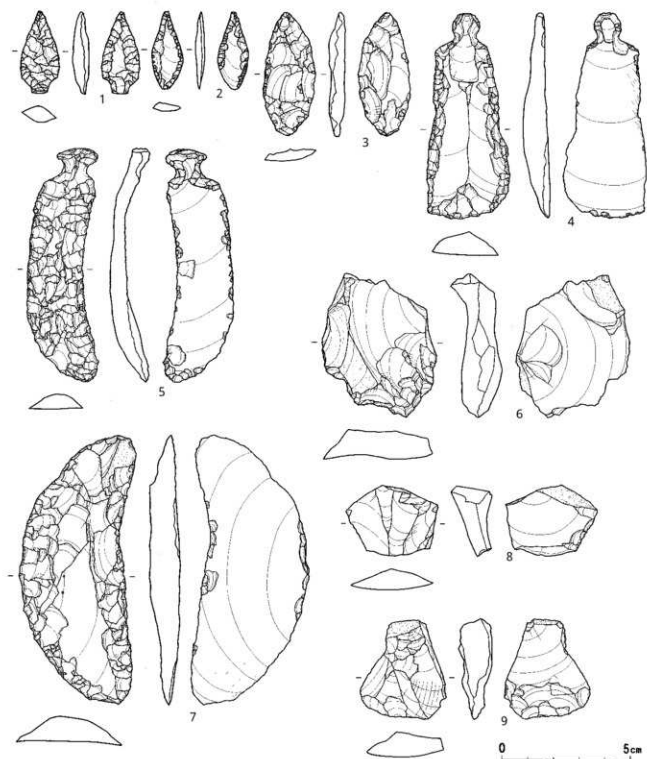
69は石鏃である。折損した基部にアスファルトの付着が顕著に観察される。70～73はスクレイパー類である。70は素材剥片の腹面側の右側縁に緩斜度の連続的な細部調整を加える。71・72は素材剥片の左右二側縁に調整を加え刃部を作成する例である。71は背面側の左右二側縁に比較的急斜度の連続的な調整を施し、直線的な刃部を作成する。72は腹面側の両側縁に連続的な調整を施し、左側縁が鋸歯状の刃部を形成する。73は背面側の末端に急斜度の連続的な調整を加え、平面形が弧状を呈する。また、素材の折れ面に腹面側から調整を加え抉状の刃部を作成する。74は両側剥片を素材とし、正面の上端と下端に連続的な細部調整を加える。79はピエス・エスキューである。平行四辺形状を呈し、断面が楔形をなす。上下の縁辺が平行し、細かい剥離痕が認められる。器体の表裏両面には上下方向あるいは横方向からの平坦な剥離が及ぶ。76・77は石核である。76は複設打面石核で原礫面を大きく残し、主に正面で剥片剥離を行う。上面は前方と後方から剥離された二面の剥離面から構成され、この平坦部を打面に正面で剥片剥離が行われる。77は珪質頁岩製の小円礫を素材とし、両極技法により正面と裏面で剥片剥離を行う。78は磨製石斧で、刃部を折損する。断面が楕円形を呈し、素材を敲打と研磨で整形する。器面には研磨による直線的な擦痕が観察され、左側面に敲打による整形痕が顕著に残る。79・80は敲石である。79は多面体を呈する礫を素材とし、素材の稜部を中心に敲打痕が著しく観察される。80は楕円形を呈する礫を素材とし、その下端及び側面に敲打痕が観察される。素材の平坦な表裏両面にも敲打が加えられ、さらに磨面に利用される。81は磨石で上部と下部を大きく折損する。表裏両面には磨痕が広く観察される。82は石棒の頭部で、先端に敲打により凹部を形成する。器面を研磨により整形し、直線的な擦痕が顕著に残る。

第 層出土の石器（71図 83～88）

第 層から出土した石器のうち、主要な石器を71図に示し、個別に記述する。

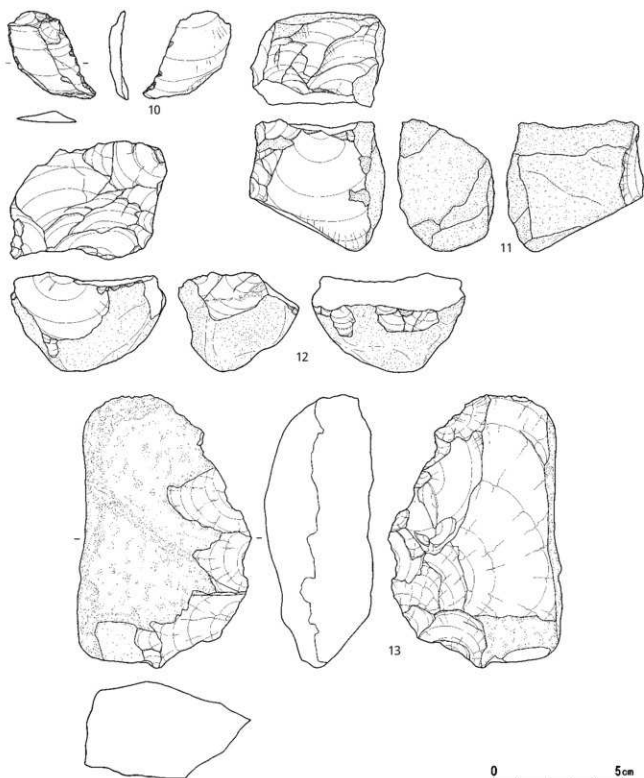
83は木葉型を呈する両面調整の石槍で、平坦な剥離によって全面が調整される。先端部を折損する。84・85・87はスクレイパー類である。84は素材剥片の背面側の左右二側縁から末端に急斜度の連続的な調整を加え刃部を作成する。85は素材剥片の背面及び腹面の右側縁に調整を加える。腹面側の右側縁が直線的な刃部に形成される。87は素材剥片の背面側右側縁及び末端に連続的な細部調整を加え刃部を作成する。末端の刃部は平面形が弧状を呈する。86は石匙である。縦長剥片を素材とし、背面側の左右二側縁から平坦で細長い剥離を連続的に加え、全面を調整する。88は断面が扁平な礫を素材とし、素材の側縁及び下端の一辺に連続的な調整剥離を加える。その下端は直線的な刃部を形成し、刃部の稜線に摩耗が観察される。

（佐々木 雅裕）



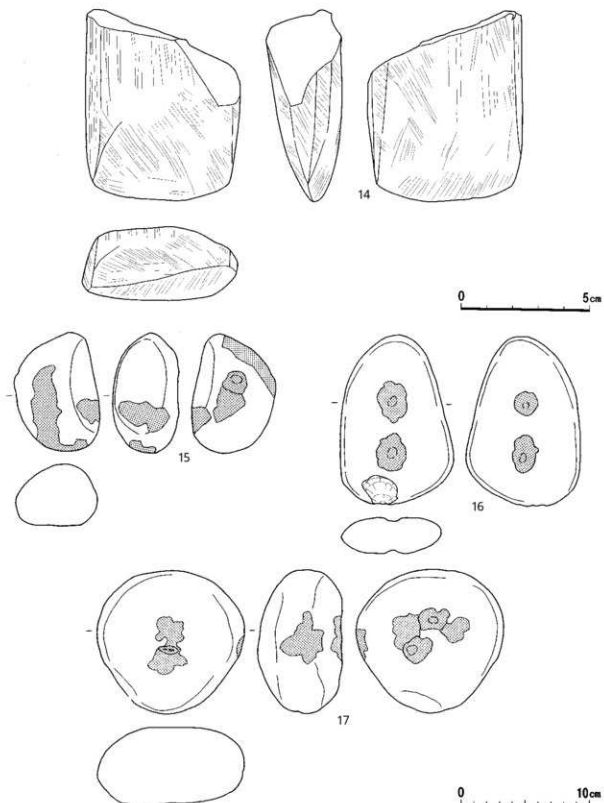
番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	分類	備 考	整理番号
1	Q 172	"	33	15	7	29	珪質	Ab	23次	107105
2	L 157	"	31	12	4	10	"	Ae	"	107106
3	L 204	上	50	20	6	57	"	Ba	26次	106819
4	N 184	"	82	33	10	230	"	Ca	"	106822
5	B 190	"	94	23	7	216	"	"	"	106823
6	B 191	上	58	45	16	325	"	Ga	"	106828
7	Q 199	"	108	42	12	503	"	"	"	106827
8	O 150	b	29	36	16	106	"	"	23次	105520
9	C 188	"	40	33	13	137	"	Gc	26次 両端・使用痕あり	106829

58図 第 層出土石器 (1)



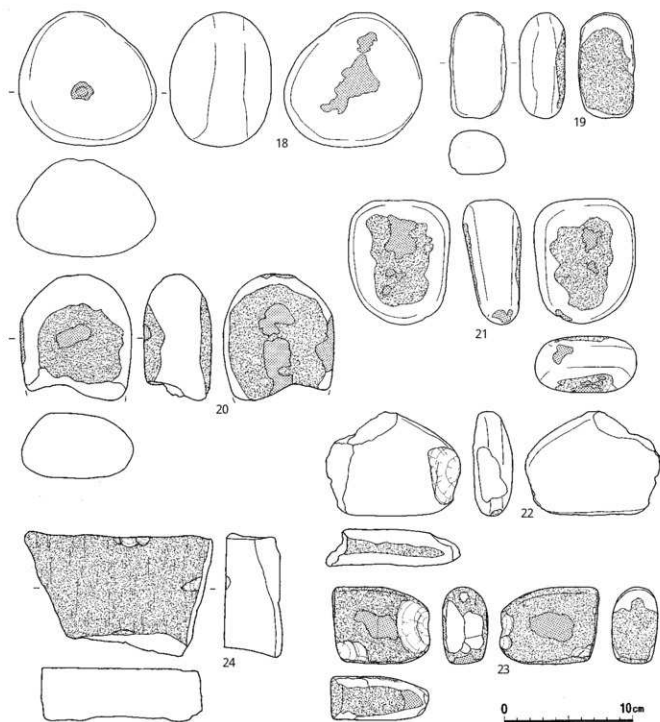
番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備考	整理番号
10	D 190	上	35	23	5	50	珪頁	Gc	26次	106821
11	E 179		52	53	37	1336	"	Pa	23次	105511
12	M 152	中	49	61	40	1179	"	"	"	105505
13	Q 198	上	109	68	43	3349	"	"	26次	被熱 106524

59図 第 層出土石器 (2)



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備	考	整理番号
14	L 156		77	61	30	189.1	綠綠凝	Ha	23次		105514
15	E 179	#	96	66	52	327.9	石英安	Ia	#		106501
16	Q 185	#	135	88	32	509.6	安	#	26次		106526
17	O 150	中	115	115	65	1102.0	#	Ib	23次		106500

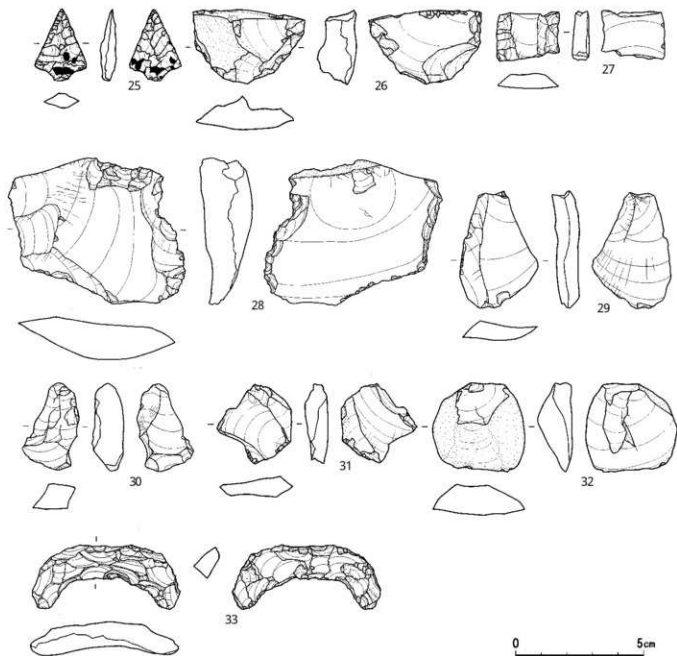
60図 第 層出土石器 (3)



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石種	分類	備	考	整理番号
18	N 201	上	108	107	78	9296	石英安	Ⅱ	26次		106523
19	N 151		84	44	36	2259	安	Ⅱ	23次		106502
20	L 204	上	(101)	81	52	(6004)	石英安	Ⅱ	26次	被熱	106521
21	P 199		100	79	45	4782	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ		106525
22	M 204	上	84	104	31	3509	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ		106522
23	L 156	Ⅱ	62	77	35	2864	安	Ⅱ	23次		106498
24	O 151	Ⅱ	100	146	45	7121	凝	L	Ⅱ	被熱	106499

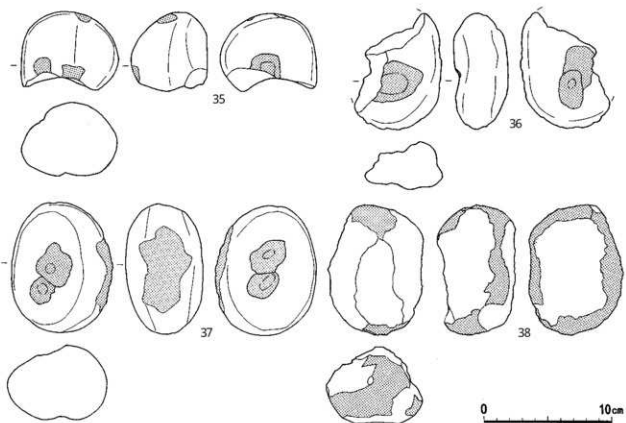
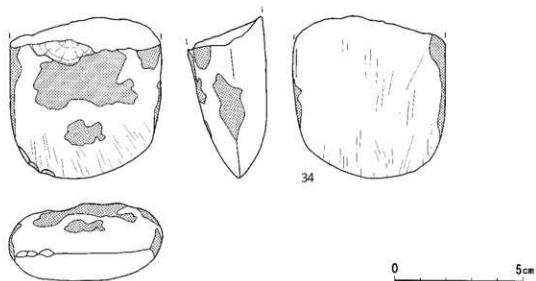
61図 第 Ⅱ 層出土石器 (4)

第 C 層



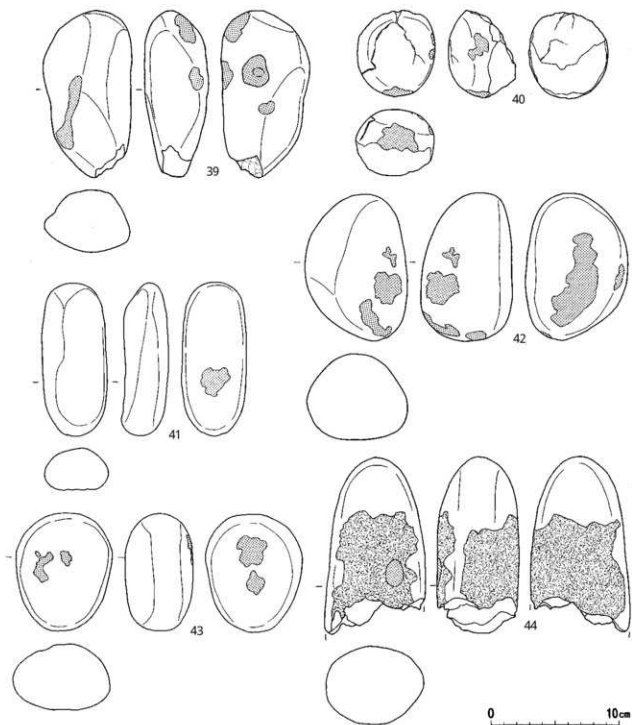
番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備 考	整理番号
25	N 167	c	29	20	6	23	珪質	Ab	23次 アスファルト	107107
26	P 187	#	30	43	15	16.4	#	Ga	26次	106831
27	J 172	#	19	25	6	3.9	#	#	23次	105523
28	M 201	#	59	62	19	68.3	#	#	26次	106830
29	M 172	#	47	31	11	10.3	#	Gc	23次 両種刮片	105556
30	J 172	#	35	23	12	5.9	#	F	# 両種	105524
31	B 188	#	32	29	9	6.9	#	#	26次 #	106840
32	F 182	#	36	36	8	18.1	#	Pc	# #	106841
33	E 189	#	59	14	10	13.1	#	R	#	106825

62図 第 C 層出土石器 (1)



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備 考	整理番号
34	Q 187	c	(65)	(60)	(31)	(158.2)	安	Ha	26次	106528
35	L 171	"	63	76	59	271.9	石英安	Ia	23次	106513
36	M 201	"	(93)	(68)	42	(202.1)	"	"	26次	106527
37	K 173	"	104	79	60	418.9	安	"	23次	106510
38	E 180	"	104	75	61	572.4	珉質	Ib	26次	106530

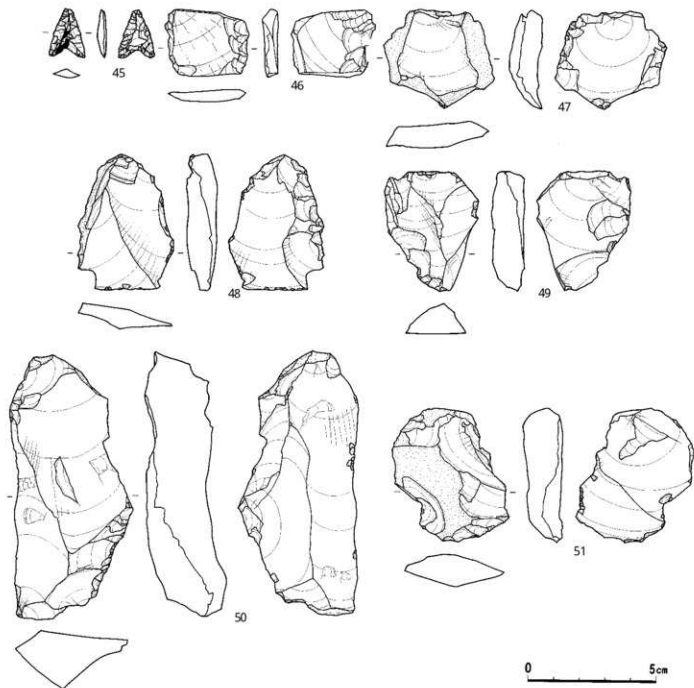
63図 第 層出土石器 (2)



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備 考	整理番号
39	K 175	c	135	69	49	503.8	石英安	Ib	23次	106511
40	K 173	"	69	61	53	248.8	"	"	被熱	106509
41	L 171	"	122	50	37	333.3	"	"	"	106512
42	F 183	"	118	80	71	881.8	"	"	26次	106533
43	F 182	"	94	75	53	470.2	"	Ic	"	106545
44	L 180	"	(140)	(77)	63	(870.7)	安	"	23次	106514

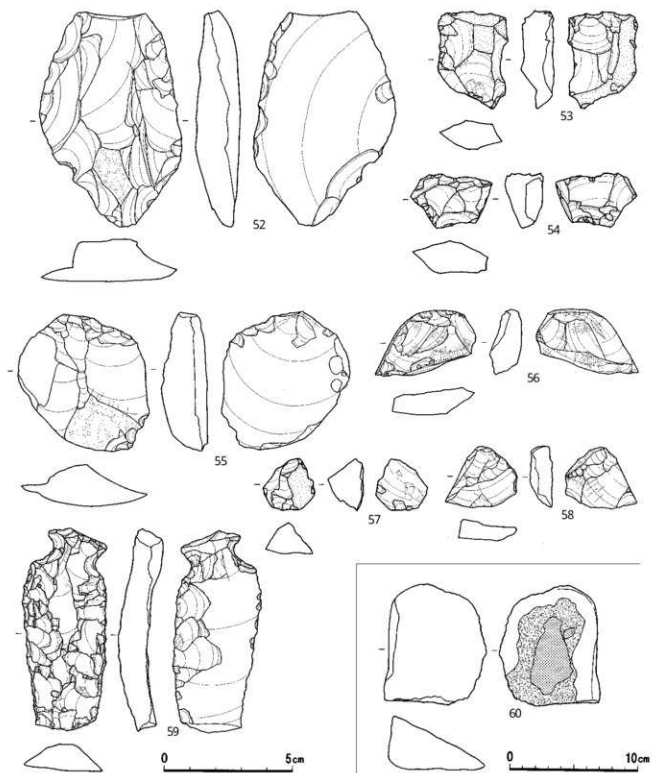
64図 第 層出土石器 (3)

第 b 層



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石種	分類	備 考	整理番号
45	L 173	b	19	14	4	06	珩頁	Af	23次 アスファルト	107109
46	K 173	"	27	33	7	6.8	"	Ga	"	105564
47	D 189	"	40	42	13	18.7	"	"	26次	106845
48	Q 185	"	54	37	12	19.5	"	"	"	106833
49	J 202	"	49	36	13	21.8	"	"	"	106832
50	C 191	"	106	47	31	114.6	"	"	"	106844
51	F 180	"	53	46	16	30.1	"	"	"	106847

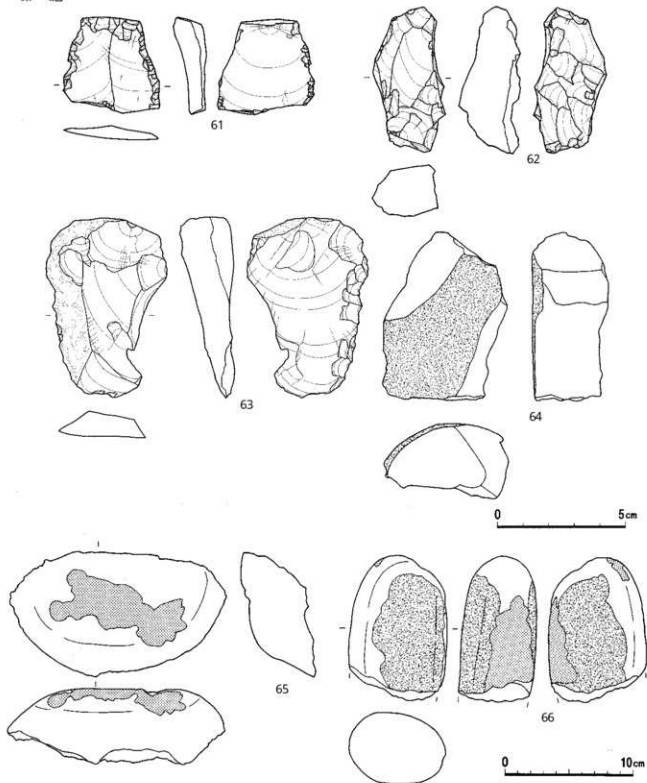
65図 第 b 層出土石器 (4)



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備	考	整理番号
52	J 175	b	87	56	17	71.6	珪質	Ga	23次		105560
53	A 189	"	39	27	13	14.5	"	"	26次	同種	106842
54	E 189	"	21	32	15	9.3	"	"	"	"	106846
55	K 173	"	55	51	18	45.5	"	"	"	被熱	105563
56	B 187	"	26	40	13	9.2	黒	Gc	26次		106865
57	A 192	"	21	20	14	4.3	玉	Pc	"	同種	106843
58	M 172	"	25	28	9	5.2	"	"	23次	"	105566
59	E 189	"	72	33	11	35.6	珪質	Ca	26次		106824
60	D 191	"	96	79	43	351.3	石英安	Ib	"		106538

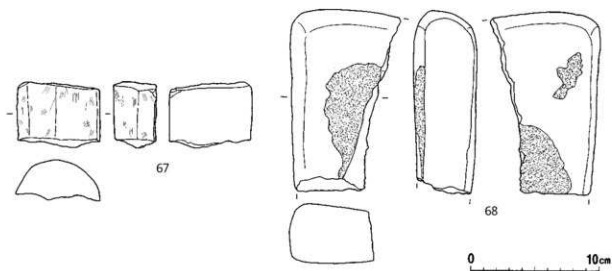
66図 第 層出土石器 (5)

第 6 編

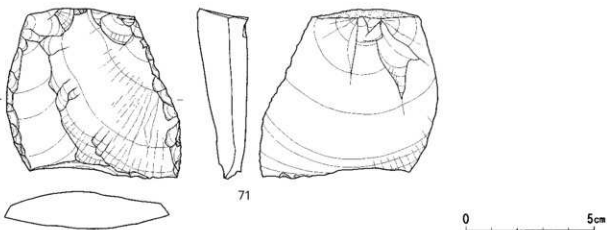
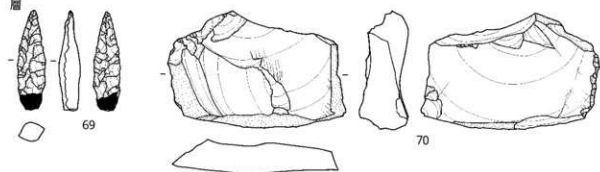


番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備	考	整理番号
61	L 202	a	38	38	13	130	珪質	Ga	26次		106834
62	"	"	58	28	24	35.5	"	Gb	"	兩種	106835
63	I 177	"	72	46	21	48.5	"	Ga	23次		105572
64	A 191	"	68	49	30	109.2	花崗	Ha	26次		106537
65	E 184	"	169	99	59	1014.4	石英安	Ab	"		106539
66	M 171	"	(116)	(79)	(59)	(804.8)	安	Ac	23次	被熱	106515

67図 第 6 層出土石器 (6)

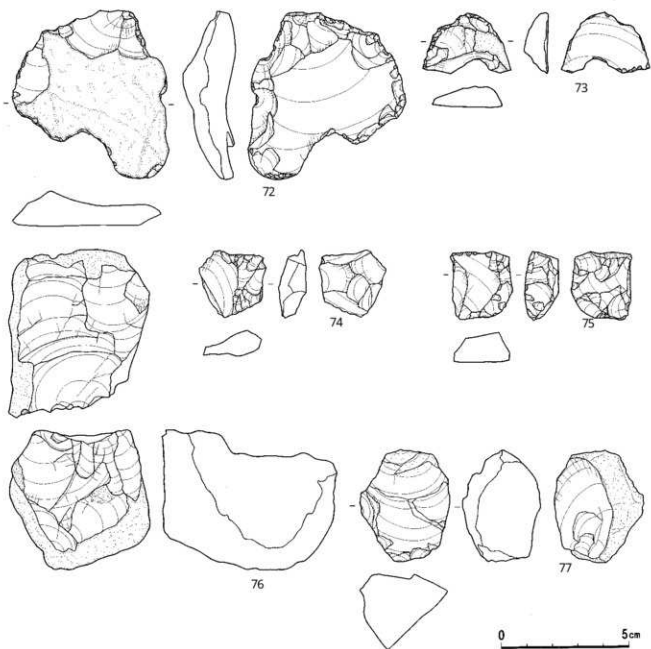


第 層



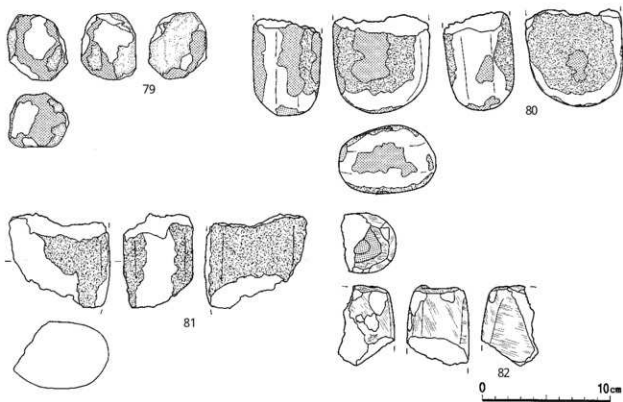
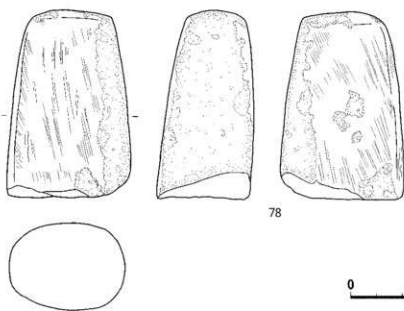
番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備 考	整理番号
67	M 204	a	52	65	33	140.4	石英安	Ma	26次 被熱	106536
68	M 171	#	(146)	(85)	(49)	(939.5)	安	L	23次	106516
69	M 152	#	40	11	9	3.5	珪頁	A	# アスファルト	107104
70	D 191	#	47	69	19	58.7	#	Ga	26次	106849
71	R 153	#	69	69	20	87.0	#	#	#	105631

68図 第 層出土石器 (7)



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備	考	整理番号
72	N 175	"	67	62	20	57.1	珪質	Ga	23次	"	105601
73	A 189	"	24	35	9	6.3	"	"	26次	"	106848
74	L 180	"	27	26	11	5.4	"	Gb	23次	両種	105597
75	K 170	"	27	24	13	10.1	"	F	"	"	105589
76	O 152	"	56	55	69	223.2	"	Pa	"	"	105624
77	M 152	"	45	35	31	36.8	"	"	"	両種	105604

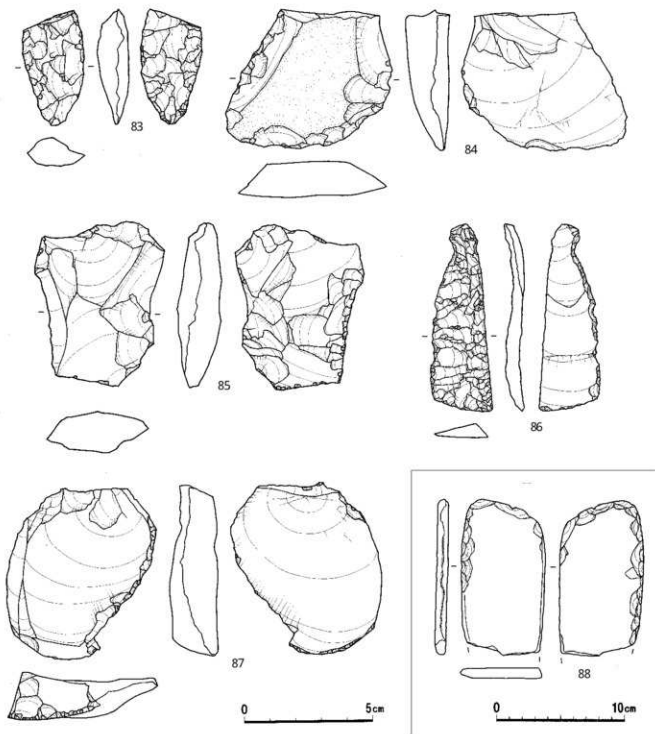
69図 第 層出土石器 (8)



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備 考	整理番号
78	P 152		76	47	38	220.2	閃	Ha	2次	105627
79	E 179	"	54	46	43	132.1	珉	Ib	"	106519
80	O 152	"	(79)	(76)	(54)	(436.1)	石英	A	"	106517
81	J 173	"	(76)	(79)	(54)	(356.6)	"	Ic	"	106518
82	Q 152	"	(64)	(43)	(48)	(146.1)	"	Ma	被熱	106520

7(図) 第 層出土石器 (9)

第 層



番号	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	分類	備	考	整理番号
83	L 204	表土	46	24	12	131	玉	Ba	26次		106836
84	A 191	"	56	65	17	616	珉頁	Ga	"		106839
85	Q 198	"	66	50	18	502	"	"	"		106838
86	O 185	"	75	23	7	113	"	Ca	"		106826
87	L 204	"	69	59	19	671	"	Ga	"		106837
88	M 201	"	(124)	(66)	9	(1291)	凝	正	"		106544

7図 第 層出土石器

第 3 節 遺構外出土石製品・土製品

遺構外から出土した主要な石製品・土製品を 72・73 図に示し、以下に記述する。

石製品 (72 図)

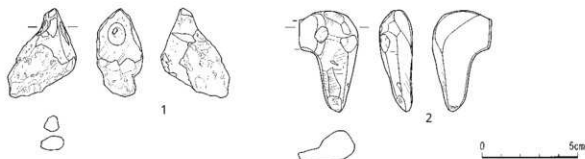
穿孔された石製品が 2 点出土している。1 は安山岩製で、三角錐または四角錐を呈すると考えられる。大部分を欠失するが、残存する面には、擦痕がみとめられ、平坦面が作り出されている。頂部には両方向から穿孔された、貫通孔がある。2 は一部を欠失しているが、V 字状あるいは L 字状を呈すると考えられる。二股に分岐する部分には両方向から穿孔された貫通孔がある。自然面を多く残すが、部分的には著しい擦痕がみとめられ、製作途中の可能性も考えられる。石材は頁岩である。

土製品 (73 図)

土偶 3 点 (1~3)、ミニチュア土器 1 点 (4)、耳栓 1 点 (5)、三角形土製品 1 点 (6)、円盤状土製品 4 点 (7~10)、円盤状土製品未製品 1 点 (11)、板状土製品 1 点 (12) が出土している。

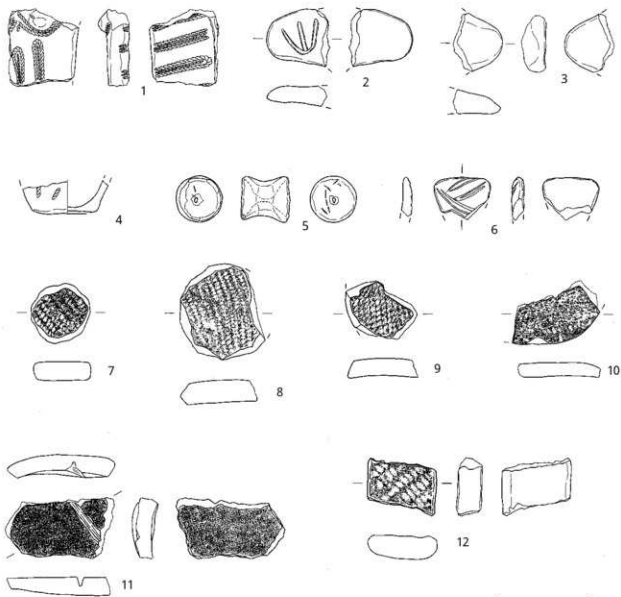
1 は土偶の胴部破片で、表裏面とも押圧縄文による文様が施文される。裏面には凹線がみられる。2・3 は土偶腕部で、2 には沈線による文様がみられる。5 の耳栓は鼓形で、径 2.4cm、長さ 2.6cm を測る。端部は漏斗状に凹み、中央部には径 1mm の貫通孔が見られる。6 は一辺が 3cm の三角形土製品で、中央がやや張り出す。表面には 2 条の沈線を斜位方向に施文した文様がみられる。7~10 は土器片利用の円盤状土製品である。6~9 は縁辺部の打ち欠きによって成形され、10 は縁辺部はスリによって成形されている。7 の胎土には繊維が混入する。9 は単軸絡糸体の回転による施文がみられ、胎土には繊維が混入する。11 は擦り切り痕がみとめられる土器片である。内外面とも無文で、丁寧なミガキが見られる。擦り切り痕は幅 1mm・深さ 4mm 程度で、ほぼ垂直に切り込みが入れられている。擦り切り痕に対する辺は擦られており、製作途中の円盤状土製品の可能性も考えられる。12 は厚さ 1.4cm の板状の土製品で、幅は 3.6cm で、湾曲はみられず、方形を呈すると考えられる。表面には R1 が施文され、裏面は無文である。側面には弱い擦痕が認められる。これらのほかに図示しなかったが、近世の土人形が 1 点出土している。

(田中 珠美)



番号	出土地点	出土層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	種類	備考
1	P 198	c	(48)	(36)	(25)	(16.7)	安山岩	有孔石製品	26次
2		埋め戻し	55	(32)	18	(20.4)	頁岩	有孔石製品	26次

72 図 遺構外出土石製品



番号	出土地点	層位	計測値(mm)			文様		種類	備考
			長さ	幅	厚さ	表面	裏面		
1	不明	不明	(42)	(37)	12	L・F押	L・F押	土偶	23次、胴部
2	D - 190	#	(31)	(33)	(12)	沈線	無文	#	26次、胴部
3	L - 150	#	(31)	(25)	(13)	無文	無文	#	23次、胴部

番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
4	R 186	c			RL			ニシキリ	26次

番号	出土地点	層位	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	表面	裏面	種類	備考
5	D 189	b	24	24	26	(9.9)	無文	無文	耳栓	26次
6	D 182	#	(23)	30	7	(3.5)	沈線	#	三角形土製品	26次
7	D 151	#	33	31	10	10.9	RL		円盤状土製品	23次、土器片利用、確認済
8	F 178	#	52	(44)	15	(34.3)	RL	ミガキ	円盤状土製品	23次、土器片利用
9	Q 196	表土	(32)	(38)	20	(9.8)	L・F押	1	円盤状土製品	26次、土器片利用、確認済
10	M 203	a	(24)	(46)	8	(9.9)	LR	#	円盤状土製品	26次、土器片利用
11	O 151	#	(32)	(57)	13	(19.0)	無文		円盤状土製品未製品?	23次、土器片利用
12	K 171	c	(32)	36	14	(13.9)	RL	無文	板状土製品	23次

7図 遺構外出土土製品

第 章 調査の成果と課題

これまで集落の南西側では、平成 10・11・12・13年度の調査（第 13・14・17・20次調査）を通じ、土坑墓・配石墓・環状配石墓で構成される墓列とともに、その北東側斜面下方において墓列に沿って延びる道路跡（第 2号道路跡）について継続して調査を行ってきた。第 23次調査および第 26次調査では、これまでの成果と所見を踏まえて墓列と道路跡が延びる位置を想定した上で、第 20次調査区の南東側について史跡指定範囲の境界まで調査を行い、道路跡や環状配石墓の分布等に関して新たな知見も得られた。この結果を受け、集落南西側の墓列と道路跡についての範囲確認を目的とした調査は、第 26次調査をもって終了することとなった。この章では、これまでの調査方法とともに、調査の成果と新たに提起された課題等について提示する。

1) 道路跡と環状配石墓に関する調査方法

集落南西側に位置する道路跡（第 2号道路跡）と環状配石墓の調査に関し、調査に着手した第 13次調査の時点からその調査方法について検討を重ねてきた。第 13・14次調査では、道路跡の特徴の一つである第 Ⅱ層を起源とする黄褐色のロームブロックの分布を指標に、道路跡を検出してきた。また、環状配石墓について予めボーリング調査を行い、配石の所在について確認し、それにより道路跡の位置も想定した。しかし、ロームブロックの分布状況には相密が認められ、また、断続的な分布状況を示す場合もあり、ロームブロックの分布を指標に道路跡を広域にわたって検出するには限界性があった。続く第 20次調査では、墓列と道路跡の全体像を把握する目的で 4089㎡の広い範囲について調査を行った。ここでは道路跡の上位に第 Ⅲ層が堆積する事実と、その境界が明確な点に着目し、これを指標に道路跡の検出を試みた。このため、道路跡については各グリッド単位に、あるいは道路跡に対し直交する土層観察用ベルトを予め設定し、層位に従い調査することを基本とした。まず、第 Ⅱ層を指標に第 Ⅲ層を検出し、次いで第 Ⅲ層を指標にすることにより路面を忠実に検出することが可能となった。

第 23・26次調査では、第 20次調査で行った調査方法に準じて、道路跡の検出にあたった。また、環状配石墓に関しても、これまでの調査方法に従った。環状配石墓が列状に並ぶ状況が示されていたことから予め位置を予測し、ボーリング調査により配石の所在について確認を行った。併せてこれを道路跡の位置と方向性を想定する情報とした。次いで第 16号配石遺構の事例（第 14次調査）に示されるような配石内に土盛りを伴う可能性を考慮し、ボーリング調査の結果を踏まえて遺構の中心を通る土層観察用ベルトを設定し、土盛りの有無や礫が据え置かれる層位を確認しながら検出にあたった。また、状況に応じて環状配石墓の中心を通り、さらに道路跡に直交する土層観察用ベルトの設定も行った。環状配石墓と道路跡の上位に堆積する層位の検証を基に、両者の時間的關係を把握するのが狙いである。第 20次調査と同様、道路跡および環状配石墓の上位に第 Ⅲ層がともに堆積する状況が把握され、両者の共時的なあり方と廃絶時期が同一である可能性が高いことが確認された。さらには、層序が欠落するあり方についても同様に把握でき、道路跡が掘削を伴って構築されていることがより明確となった。これに併せて、第 20次調査から地層の平面分布についても記

録を行っており、道路跡を構築する際に掘削した範囲や掘削深度の程度、道路跡の上面における第層を起源とするロームブロックの分布状況について視覚的に把握することが可能となった。なお、上記の土層観察用ベルトは再び調査する場合に備え、追認できるよう遺構とともに保存している。

2) 墓域について

第13・14・17次調査を通じ、環状配石墓を含む墓列が道路跡片側の南西側斜面上方に並ぶ様相が把握されていた。次いで第20次調査では、道路跡を挟んで環状配石墓の向かい側で2基の配石遺構(第26・27号配石遺構)を検出し、道路跡の両側に遺構が並ぶ様相がこの墓域では初めて確認された。さらに第23次調査では、これらの配石遺構に隣接して南東側で第33・34号配石遺構を検出し、環状配石墓が道路跡の両側に並ぶことが明らかとなった。

第23次調査および第26次調査の結果、新たに合計12基の環状配石墓を確認し、これらは高い密度で分布する。その内訳は、第23次調査で6基を、第26次調査で6基を確認し、これにより、集落南西側の墓域で確認された環状配石墓は合計22基となった。同時に、これらは北西端に位置する第28号配石遺構から南東端に位置する第40号配石遺構まで、総延長が約211mにもわたって列状に並ぶ様相が明らかになった。一方、土坑は環状配石墓の内側で確認されたものも含め、新たに11基が確認され、その結果、この墓域で確認された土坑は合計188基となった。これらは道路跡に平行して北西から南東方向へ列状に配置され、墓列の北西側では土坑墓が、南東側では環状配石墓が主に分布する傾向が窺える。

環状配石墓および土坑墓は第23次調査区から第26次調査区のA区・B区に至って確認され、それらの配置には連続性が窺え、列状に並ぶ状況が認められた。しかし、これより南東側に位置する第26次調査区のC区・D区では両者はともに確認されず、このため、B区より南東側においてボーリング調査を幾度か試みた。その結果、碑の所在は確認されたものの(4図参照)環状の構造を把握できたものはB区の南東端で検出した第40号配石遺構が南限となる。このことから判断して、この付近が墓列の南限にあたるものと考えられ、墓列は総延長約310mにわたって形成されていたことが明らかとなった。

環状配石墓の並びに注意すると、列状に配列する規則性は保ちながらも、第23次調査区の第30号配石遺構と第3号配石遺構の間で路幅が減少する状況に呼応するように、第31・29・30・32号配石遺構の並びが緩やかに蛇行するあり方が窺える。また、これより南東側に並ぶ第26次調査区A・B区の第36・37・38・39・40号配石遺構は、その北西側に並ぶ第24・25・31・29・30・32・3号配石遺構、および第33・34号配石遺構とを比較した場合、径約4.0~4.72mの規模から径約3.48~3.92mの規模へ縮小化する傾向が窺え、路幅の減少とともに環状配石墓の規模にも変化が認められ、注意される。この位置は、西駐車場地区の昭和5年度の調査検出した2列の土坑墓列とその間の道路跡が交差する可能性がある位置に近い。

また、第23・24次調査を通じ環状配石墓の内側で土坑墓を確認したのは、第29・30号配石遺構の2基であり、いずれの土坑墓も第層まで深く掘り込んで構築している状況が確認された。さらに、土坑墓内の堆積土には、構築の際に排出された土量に対し、第層を起源とする黄褐色の土壌が含まれる比率が低く、第層に近似する黒褐色の土壌が堆積する状況を示す。しかし、この状況はこ

これらの例に限られるものではなく、第14・17・20次調査において精査および確認を行った土坑墓についても同様の傾向が認められていた。確証は得られていないが、構築から埋葬までの過程で、第1層を起源とする黄褐色の土壌が意図的に選別された可能性も考えられ、注意していく必要がある。さらに、環状配石墓が構築された層位では、配石の内側で土坑墓の輪郭を確認できない場合が多いことも特徴として窺われる。環状配石墓の大方は第1層に構築されており、前述のとおり土坑墓内には第1層に近似する黒褐色の土壌が堆積する場合が多く、それが識別を困難にしている要因の一つとも考えられる。しかし、第11・36・37号配石遺構に示されるように、配石が据え置かれた層位のさらに下位で礎の存在が確認されている事例もあることから、埋葬後も配石の内側に第1層の堆積が継続した可能性や、第1層が再堆積した可能性、さらには土坑墓上の土盛りが配石の内側に広く流出した可能性も考えられ、環状配石墓の形成過程と関連する事象でもあり、大きな課題である。

3) 道路跡について

これまで平成10・11・12・13年度の調査(第13・14・17・20次調査)を通じ、集落南西側の道路跡(第2号道路跡)について継続して調査を行ってきた。第23次調査および第26次調査では、両者の広がり予測される第20次調査区の南東側について調査を行った。その結果、第23次調査では総延長が約260mの地点まで確認し、次いで第26次調査ではさらに南東側の史跡指定範囲の境界まで確認を行い、これまで確認された道路跡の総延長は約370mとなった。道路跡の南端が確認されていないことから、さらに南東方向へ延びる可能性が高いものと考えられる。

これまで三内丸山遺跡では、この集落南西側の道路跡(第2号道路跡)のほか、集落の東側では第4・7・8次調査を通じて2列に並ぶ土坑墓列とともに、その間を通る道路跡(第1号道路跡)が約420mにわたって確認され、また、集落の西端では第18・21・24次調査を通じて土坑墓列を伴った道路跡が約80mにわたって確認されている。一方、集落南側の第23次調査区に隣接する西駐車場地区では、昭和5年度の調査で東北東から西南西方向に並ぶ2列の土坑墓列が約45mにわたって調査されており、その間に続く帯状の空白域が道路跡である可能性が指摘されていた。

西駐車場地区の道路跡に関しては路面等の状況について窺い知ることはできないが、これまでの調査を通じ、三内丸山遺跡における道路跡の特徴が示された。いずれの道路跡にも墓列が伴う、掘削により断面形が皿状を呈しこの痕跡が帯状に続く、その上面に第1層を起源とする黄褐色のロームブロックが帯状に広がる等の特徴を共通点として認めることができる。ただし、第26次調査区では、南東側に至るに従いロームブロックの広がりが漸移的に希薄となり、C区に至っては分布は認められない。また、史跡指定範囲の南限に位置するD区では、路面に炭化物を多量に含む堅緻な土壌が帯状に貼られており、これまでの様相とは異なり注目される。

また、それらの路幅について比較検討してみると、墓列の間を路幅と捉えた場合、集落東側の第1号道路跡は集落側の西端で最大値約20mを測り、その東側に位置する第4次調査区内では約12~15mとなる。さらに、その東側の第7次調査区では約6~10mの規模を示し、史跡指定範囲の東端に位置する第8次調査区では約8.5~9.5mとなる。それぞれの調査区内においても路幅に変動が認められるものの、集落の西端から東側に至るに従い路幅が減少しつつも、ある一定の範囲内で路幅が維持される傾向が認められる。

一方、西駐車場地区の道路跡では約 4～5mの狭い規模を示すものの規格的なあり方が窺え、集落西端の道路跡では路幅を捉えられる地点が限られているが、そこでは約 20mの広い規模を示す。それぞれの道路跡の路幅とその変動の幅には差も認められ、集落内において統一された規格の存在は窺えない。

さらに集落南西側の第 2号道路跡は、第 20次調査区内では墓列が道路跡の片側に並ぶ状況を示していることから、ここでは掘削された幅を基に検討すると、その幅には 14.5～21.6mの差があり、北西側から南東側に至るに従い幅が減少するあり方を示している。その南東側の第 23次調査区内では、環状配石墓および列状に配列された配石遺構（第 26・27号配石遺構）が、道路跡の両側に並んでいることから、ここではその間を路幅と捉えることができる。第 25号配石遺構と第 26号配石遺構を結ぶ間が 16m 80cmで、第 30号配石遺構と第 33号配石遺構を結ぶ間が 8m 60cmとなり、北西側から南東側に至るに従い路幅が減少する状況を示している。なお、第 26次調査区では調査区の A区から D区にかけて道路跡の中央付近から北東側が県総合運動公園に至る園路の建設により失われており、路幅や掘削の幅等について十分な情報は得られず、それらの検討は行えない。この第 20調査区と第 23次調査区で示された状況からは、第 2号道路跡は北西側から南東側に至るに従い路幅が減少するあり方が捉えられ、この点においては、集落東側の第 1号道路跡のあり方と類似も認められる。しかし、変動の幅は大きく、漸移的で緩やかな変化を示していないことから、構築には幾つかの過程が存在する可能性と、その結果、路幅あるいは掘削の規模に変動が現れた可能性すらも想起させる。

第 2号道路跡について形成過程と変容のあり方について、墓列との関係から二、三の知見が得られ、主要な点を以下に挙げる。

その知見の第一に、円筒上層 c 式期の第 83号埋設土器遺構が路面に広がる第 1層を起源とする黄褐色のロームブロックを掘り込んで設置している状況が確認されたことが挙げられる。この状況から、周辺の路面に広がるロームブロックは、第 83号埋設土器遺構が構築される縄文時代中期前葉以前に道路跡に敷設されていたものと判断される。

第二として、縄文時代中期中葉から後葉の時期に構築されたと考えられる第 30・31・32号配石遺構の内側に、第 1層を起源とするロームブロックが路面上の広がりや連続して及んでいる状況を確認し、ここではそれらの配石遺構が構築された後に、路面とともに敷設されたことが考えられ、第 83号埋設土器遺構の事例との対比からロームブロックの敷設には時期差があることが把握される。

第三に、第 1号配石遺構（13・14次調査）および第 3号配石遺構では、配石の輪郭に沿った地形の変化が認められ、道路跡が構築される過程、あるいは修繕や拡幅を含めた維持管理の過程で配石が掘り残された可能性が考えられる。

以上の知見から、道路跡の形成は一時期に限られるものではなく、構築後における拡張、あるいはさらなる拡大、修繕等の維持管理の過程を経て、廃絶時期に至るまで墓列とともに変容を遂げながら最終的なあり方を示しているものと考えられる。

（佐々木 雅裕）

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 (1992) 図説『ふるさと青森の歴史』シリーズ 「青い森の縄文人とその社会縄文時代中期・後期編」
- 青森県教育委員会 (1994) 『富ノ沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第14集
- 青森県教育委員会 (1995) 『泉山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第18集
- 青森県教育委員会 (1995) 『上蛇沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第17集
- 青森県教育委員会 (2002) 『黒坂遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第30集
- 青森県教育委員会 (2002) 『近野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第31集
- 青森市教育委員会 (1988) 『三内丸山遺跡(2)遺跡発掘調査報告書』青森市の埋蔵文化財
- 青森市教育委員会 (1995) 『三内丸山遺跡(2)遺跡』青森市埋蔵文化財調査報告書第2集
- 青森市教育委員会 (1999) 『小牧野遺跡』青森市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 阿部 義平 (1983) 『配石』『縄文文化の研究』第9巻 雄山閣
- 阿部 朝衛 (1979) 『ピエス・エスキュー(楔形石器)』『聖山』考古資料別冊二
- 岩手県教育委員会 (1981) 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』岩手県文化財調査報告書第5集
- 岡村 道雄 (1976) 『ピエス・エスキューについて』『東北考古学の諸問題』
- 岡村 道雄 (1979) 『縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例 その1』『東北歴史資料館研究紀要』第5巻
- 岡村 道雄 (1983) 『ピエス・エスキュー、楔形石器』『縄文文化の研究』第7巻 雄山閣
- 岡村 道雄 (1997) 『縄文時代の船と道』『ここまでわかった先史時代』角川書店
- 小笠原雅行・秦 光次郎 (2002) 『青森県青森市三内丸山遺跡の道路跡について』『古代交通研究』第1号
- 鹿角市教育委員会 (1984) 『天戸森遺跡』鹿角市文化財調査資料 26
- 神奈川県教育委員会 (1977) 『尾崎遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告 13
- 神奈川県立埋蔵文化財センター (1983) 『早川天神森遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 2
- 小宮 恒雄 (1998) 『縄文時代の道』『考古学ジャーナル』434
- 佐藤 良二 (1984) 『滝ヶ谷遺跡の楔形石器』『二上山北麓石器製作遺跡の調査 清風荘第3地点遺跡・滝が谷遺跡』奈良県立橿原考古学研究所編
- 鈴木道之助 (1991) 『図録・石器入門事典 縄文』柏書房
- 塚原 正典 (1987) 『配石遺構』ニューサイエンス社考古学ライブラリー 49
- 天間林村教育委員会 (1997) 『ニッ森貝塚平成8年度ニッ森貝塚発掘調査報告書』天間林村文化財調査報告書第5集
- 天間林村教育委員会 (2000) 『村内遺跡発掘調査概要報告書ニッ森貝塚発掘調査報告書7』天間林村文化財調査報告書第7集
- 遠野市教育委員会 (2002) 『新田 遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 東北大学文学部考古学研究会 (1979) 『聖山』考古資料別冊二

- 富樫 泰時 (1983)「青竜刀形石器」『縄文文化の研究』第 9 巻 雄山閣
- 成田 滋彦 (1998)「円筒土器文化圏の葬制」『史跡三内丸山遺跡年報 1』
- 新潟県朝日村教育委員会 (2002)『元屋敷遺跡 (上段)』奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書
- 羽賀 憲二 (1983)「北海道式石冠」『縄文文化の研究』第 7 巻 雄山閣
- 北海道虻田町教育委員会 (1991)『入江遺跡発掘調査報告』
- 水野 正好 (1969)「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』21 3・4
- 村越 潔 (1974)『円筒土器文化』雄山閣
- 八木 光則 (1976)「いわゆる「特殊磨石」について」『信濃』28 4
- 山内 清男 (1979)『日本先史土器の縹紋』先史考古会
- 山村 信榮 (1994)「大宰府周辺の道路遺構」『季刊考古学』第 46 号
- 領塚 正浩 (2002)「縄文時代の道路跡 市川市向台貝塚の事例を中心として」『市立市川考古博物館報』第 9 号

* 青森県教育委員会による三内丸山遺跡の報告書については、特別史跡三内丸山遺跡発掘調査報告書
一覧を参照。

特別史跡三内丸山遺跡発掘調査報告書一覧（県教委発行分）

年 度	書 名	調査回数	内 容
昭和51	近野遺跡発掘調査報告書() 三内丸山()遺跡発掘調査報告書 青森県総合運動公園建設関係発掘調査	第3集	昭和5年度に調査した県総合運動公園西駐車場地区の調査報告
昭和53	近野遺跡発掘調査報告書() 青森県総合運動公園建設関係発掘調査	第4集	昭和5年度に調査した近野地区の調査報告
平成5	三内丸山 遺跡 県営運動公園拡張事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	第15集	平成4年度に調査した旧野球場建設予定地3層側スタンド地区検出遺構
平成5	三内丸山 遺跡 県営運動公園拡張事業に係る埋蔵文化財発掘調査概報	第16集	平成4～5年度の調査概要報告
平成6	三内丸山 遺跡	第18集	平成6年度に調査した旧サッカー場建設予定地の試掘調査報告
平成7	三内丸山遺跡 第1次～4次調査報告書	第20集	平成7年度に実施した第1次～4次調査の報告
平成7	三内丸山遺跡	第20集	平成4～7年度の調査概要報告
平成8	近野遺跡 県営運動公園拡張整備事業に伴う遺跡試掘調査報告	第21集	平成6～7年度に調査した近野地区の試掘調査報告
平成8	三内丸山遺跡 第5次～7次調査概要報告書	第22集	平成8年度に実施した第5次～7次調査の概要報告
平成8	三内丸山遺跡 第6鉄塔地区調査報告書1	第23集	平成4～5年度に調査した第6鉄塔地区の検出遺構及び第1～4層の調査報告
平成9	三内丸山遺跡 第6鉄塔地区調査報告書2	第24集	平成4～5年度に調査した第6鉄塔地区の第1～4層及び自然科学分野の調査報告
平成9	三内丸山遺跡 旧野球場建設予定地発掘調査報告書2	第25集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
平成9	三内丸山遺跡 第5次～7次調査報告書	第25集	平成8年度に実施した第5次～7次調査の報告
平成9	三内丸山遺跡 第8次～10次調査概要報告書	第25集	平成9年度に実施した第8次～10次調査の概要報告
平成10	三内丸山遺跡 第1次～13次調査概要報告書	第26集	平成10年度に実施した第1次～13次調査の概要報告
平成11	三内丸山遺跡 第14次～16次調査概要報告書	第28集	平成11年度に実施した第14次～16次調査の概要報告
平成11	三内丸山遺跡 旧野球場建設予定地発掘調査報告書3	第28集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
平成12	三内丸山遺跡 旧野球場建設予定地発掘調査報告書4	第28集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
平成12	三内丸山遺跡 第6鉄塔地区調査報告書3	第28集	平成4～5年度に調査した第6鉄塔地区の遺構外遺物に関する調査報告
平成12	三内丸山遺跡 第1次～19次調査概要報告書	第30集	平成11年度に実施した第1次～19次調査の概要報告
平成13	三内丸山遺跡 第20次～22次調査概要報告書	第33集	平成13年度に実施した第20次～22次調査の概要報告
平成13	三内丸山遺跡 第8・9次発掘調査報告書	第33集	平成9年度に実施した第8・9次調査の報告
平成14	三内丸山遺跡21 第23次～25次発掘調査報告書	第36集	平成14年度に実施した第23～25次調査の概要報告
平成14	三内丸山遺跡22 第13・14・17・20次発掘調査報告書	第36集	平成11～13年度に実施した第13・14・17・20次調査の報告
平成15	三内丸山遺跡23 第23・24次発掘調査報告書	第38集	平成14・15年度に実施した第23・24次調査の報告

写 真 图 版



第23次調査区全景（東から）



第26次調査区全景（南東から）

写真1 調査区全景



第 23次調査区 A 区調査前風景 (北西から)



同左 (東から)



同上 (南東から)



第 23次調査区 B 区調査前風景 (北東から)



第 26次調査区調査前風景 (南から)



同左 (南から)



作業風景 (23次)



同左 (26次)

写真 2 調査前風景・作業風景



第 26 次調査区 C 区 (北西から)



第 26 次調査区 E 区 (北西から)

写真 3 基本層序

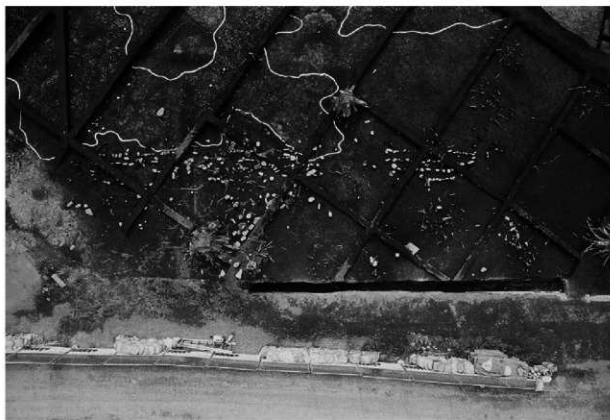


第26号配石遺構検出状況（北西から：23次）



同 土層（西から：23次）

写真4 第26号配石遺構



第26・27号配石遺構検出状況（北東から：23次）



第27号配石遺構検出状況（北東から：23次）

写真 5 第26・27号配石遺構



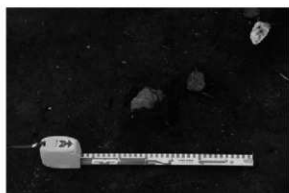
第2号配石遺構検出状況（北東から：23次）



同 検出状況（西から：23次）



同 検出状況（北西から：23次）



同 赤鉄鉱出土状況



同 遺物出土状況

写真6 第2号配石遺構



第29号配石遺構検出状況（南から：23次）



同 土層（南東から：23次）

写真 7 第29号配石遺構



第30号配石遺構検出状況（東から：23次）



同 検出状況（北東から：23次）



同 土坑検出状況（北東から：23次）



同 南北土層（東から：23次）



同 東西土層（南から：23次）

写真 8 第30号配石遺構



第31号配石遺構検出状況（東から：23次）



同 検出状況（東から：23次）

写真 9 第31号配石遺構



第32号配石遺構検出状況（東から：23次）



同 土層（東から：23次）

写真10 第32号配石遺構



第3号配石遺構検出状況（西から：23次）



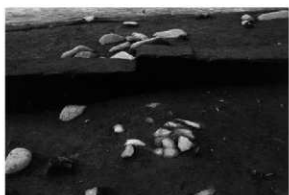
同 検出状況（南から：23次）



同 検出状況（南西から：23次）



同 遺物出土状況（南東から：23次）



同 遺物出土状況（南から：23次）

写真11 第3号配石遺構



第34号配石遺構検出状況（南西から：23次）



第35号配石遺構検出状況（北東から：26次）

写真12 第34・35号配石遺構



第35号配石遺構検出状況（西から：26次）



第36号配石遺構検出状況（北東から：26次）



第36号配石遺構検出状況（東から：26次）



第36号配石遺構検出状況（南から：26次）



第36号配石遺構検出状況（東から：26次）

写真 13 第35・36号配石遺構



第36号配石遺構検出状況（北東から：26次）



同 石皿の転用（東から：26次）



同 石棒の転用（北東から：26次）



同 第 層中礫検出状況（南から：26次）

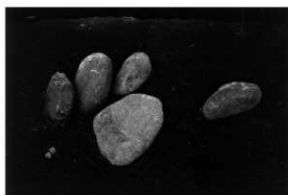


同 第 層中礫検出状況（南から：26次）

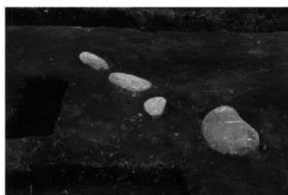
写真 14 第36号配石遺構



第37号配石遺構検出状況（北東から：26次）



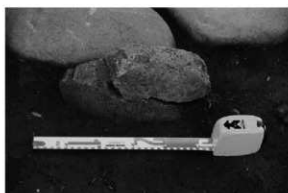
同 検出状況（東から：26次）



同 検出状況（東から：26次）



同 検出状況（南から：26次）



同 タール状物質付着礫（南から：26次）

写真15 第37号配石遺構



第38号配石遺構検出状況（東から：26次）



同 検出状況（北東から：26次）



同 大型の礫検出状況（東から：26次）



同 大型の礫検出状況（北東から：26次）



同 大型礫接合状況

写真16 第38号配石遺構



第39号配石遺構検出状況及び南北土層（北東から：26次）



同 検出状況（北西から：26次）



同 検出状況（北西から：26次）



同 検出状況（東から：26次）



同 土偶出土状況（東から：26次）

写真17 第39号配石遺構



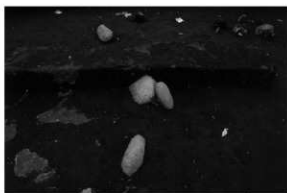
第39・40号配石遺構東西土層(北東から：26次)



第40号配石遺構南北土層(北西から：26次)



第40号配石遺構検出状況(北東から：26次)



第40号配石遺構検出状況(北西から：26次)



第40号配石遺構検出状況(北から：26次)

写真18 第39・40号配石遺構



第 29・ 30・ 32号配石遺構 (東から : 23次)



第 37・ 38・ 39・ 40号配石遺構 (南から : 26次)

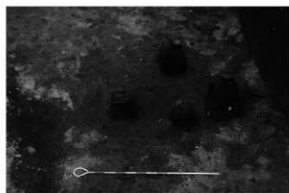
写真 19 配石遺構が並ぶ様子



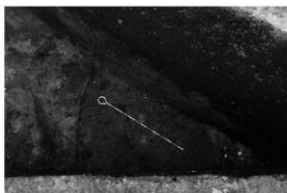
第119号土坑確認（東から：26次）



同左 土層断面（北から：26次）



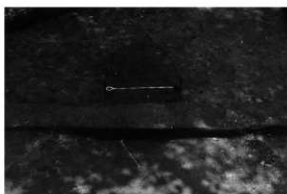
第1362号土坑確認（東から：23次）



第1363号土坑確認（北東から：23次）



第1365号土坑確認（南東から：23次）



第1367号土坑確認（東から：23次）

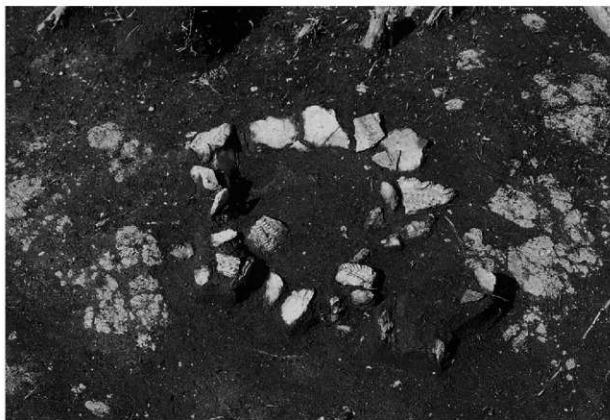


第1368号土坑確認（北東から：23次）



第1370・1371号土坑確認（北東から：23次）

写真20 第1191・1362・1363・1365・1367・1368・1370・1371号土坑



第839号埋設土器遺構（北東から：23次）



第23次調査区および近野遺跡を臨む（北西から：23次）

写真21 埋設土器遺構・道路跡（1）



道路跡検出状況（北西から：23次）



道路跡と第29・30・32・3号配石遺構（北東から：23次）

写真22 道路跡（2）



道路跡と第29・30・32号配石遺構（北東から：23次）

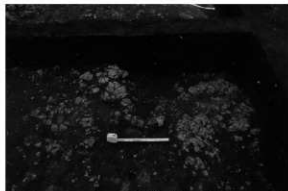


道路跡と第29・30号配石遺構（東から：23次）

写真23 道路跡(3)



ロームブロックの分布状況 (南東から: 23次)



路面のロームブロック検出状況 (東から: 23次)



路面のロームブロック断面 (南西から: 23次)



道路跡セクション・ G - 179(南から: 23次)



硬化面検出状況・ J - 174(西から: 23次)



道路跡セクション・ J - 174(北西から: 23次)



硬化面検出状況・ J - 177(南東から: 23次)



硬化面検出状況・ J - 177(東から: 23次)

写真 24 道路跡 (4)



道路跡のエレベーション（南東から：26次A区）



地層の分布状況（南東から：26次A区）



地層の分布状況（北から：26次A区）



道路跡路肩検出状況・D-18（西から：26次A区）



ロームブロック分布状況（南東から：26次A区）

写真25 道路跡（5）



道路跡と第37・38号配石遺構（東から：26次B区）



道路跡のエレベーション（北西から：26次B区）

写真26 道路跡（6）



道路跡のエレベーション(北西から：26次C区)



地層の分布状況(北東から：26次C区)



路面の貼り土検出状況(東から：26次D区)



貼り土上位の土層堆積状況(東から：26次D区)



道路跡のエレベーション(北西から：26次D区)

写真27 道路跡(7)



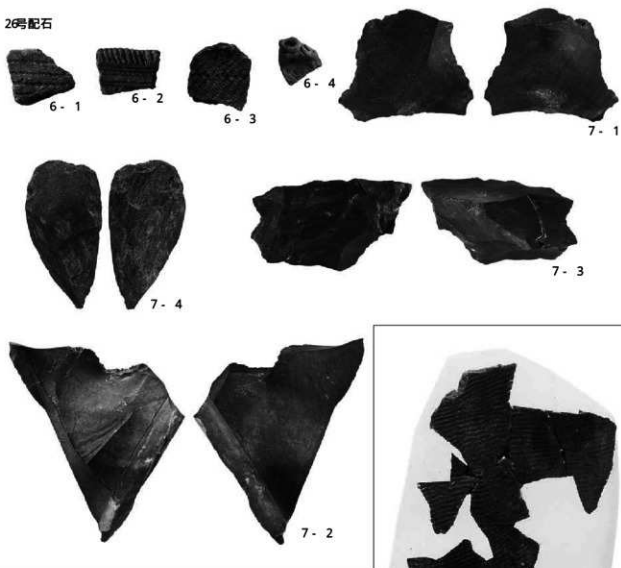
E区全景（東から：26次）



西駐車場地区全景（南東から：26次）

写真 28 第 26 次調査区 E 区・西駐車場地区

26号配石



27号配石

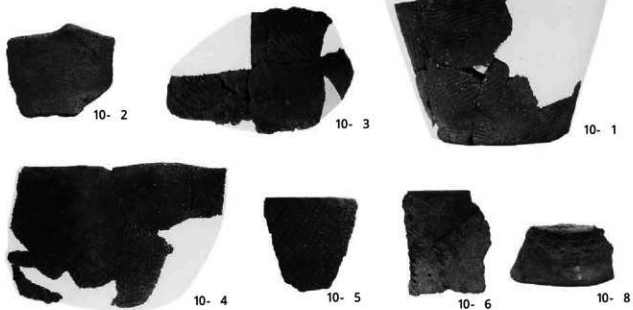
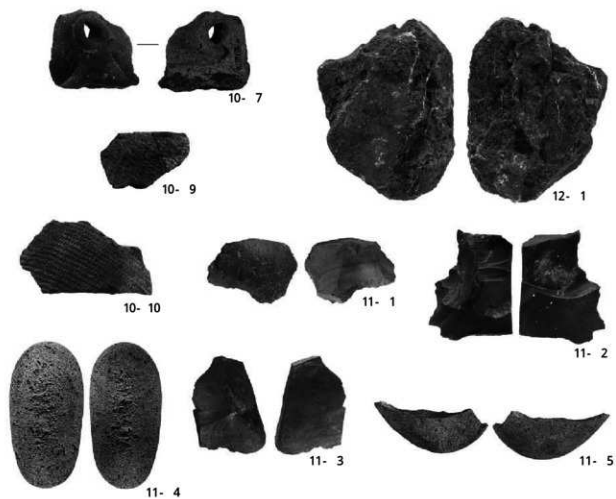
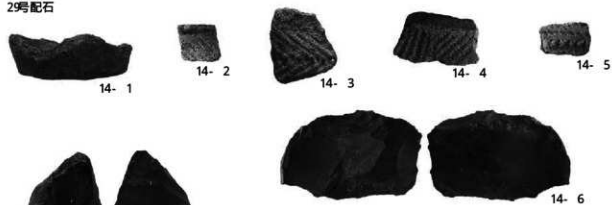


写真 29 第 26・27号配石遺構出土遺物



29号配石



30号配石

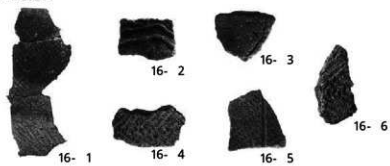


写真30 第27・29・30号配石遺構出土遺物

3号配石



17- 1

3号配石



19- 1



19- 2



19- 3



19- 4



19- 6



19- 5



21- 1



20- 7

3号配石



23- 1



23- 2



23- 3



20- 8

3号配石



24- 1



24- 2

3号配石



26- 1



26- 2



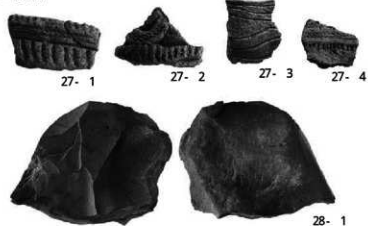
26- 3



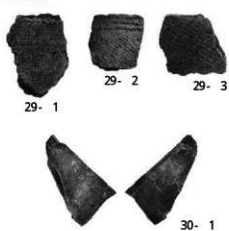
26- 4

写真 31 第 31・33～36号配石遺構出土遺物

37号配石



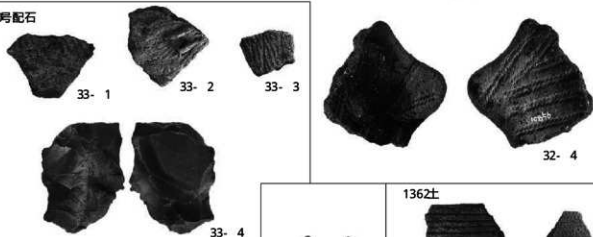
38号配石



39号配石



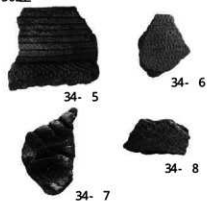
40号配石



119土



136土



道路跡

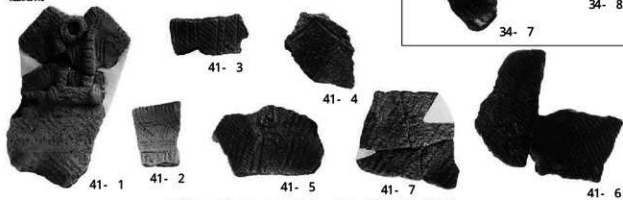


写真 32 第 37~40号配石・土坑・道路跡出土遺物

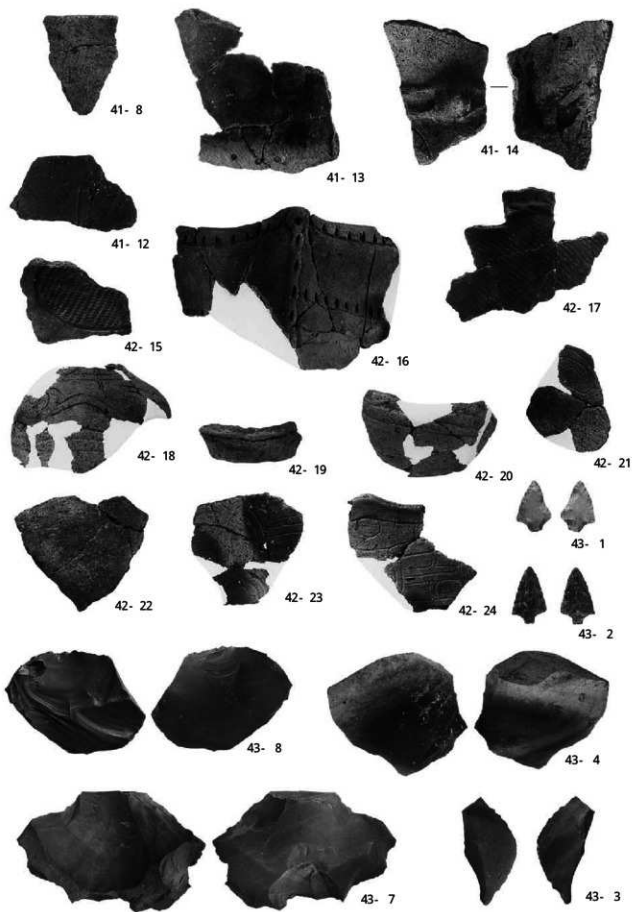


写真33 道路跡出土遺物(1)

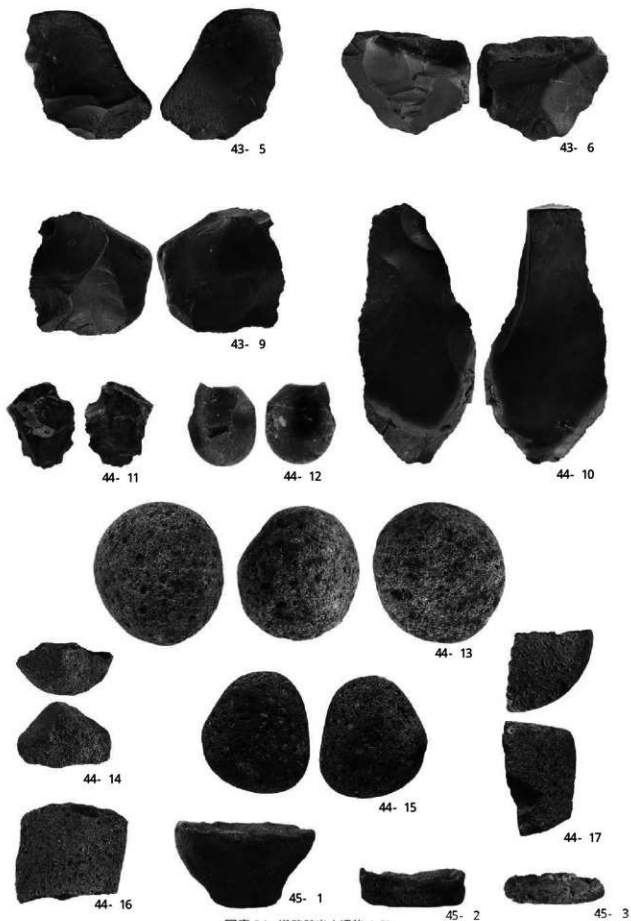


写真 34 道路跡出土遺物 (2)

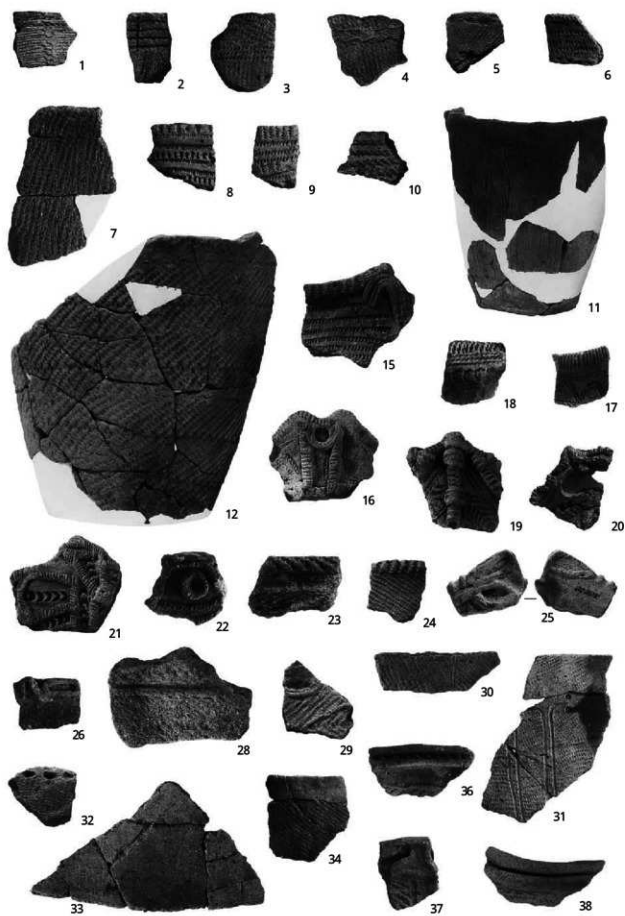


写真35 第層出土土器

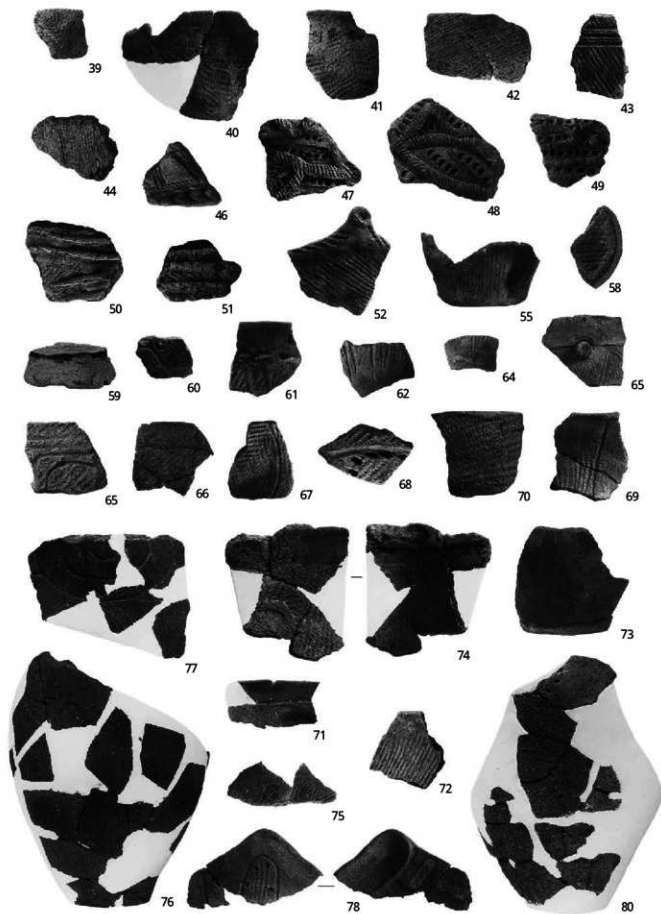


写真 36 第 · 層出土土器

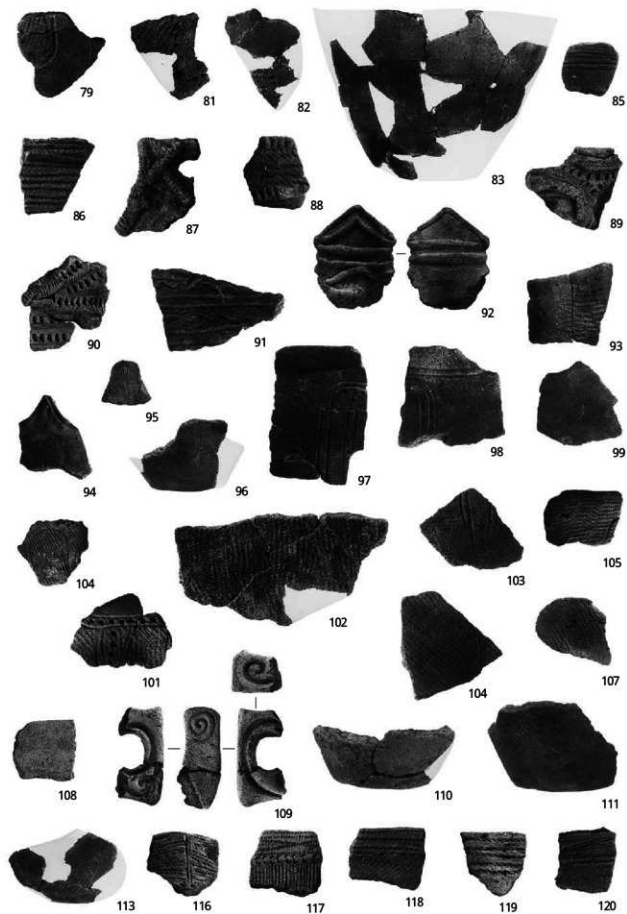


写真 37 第 層出土土器

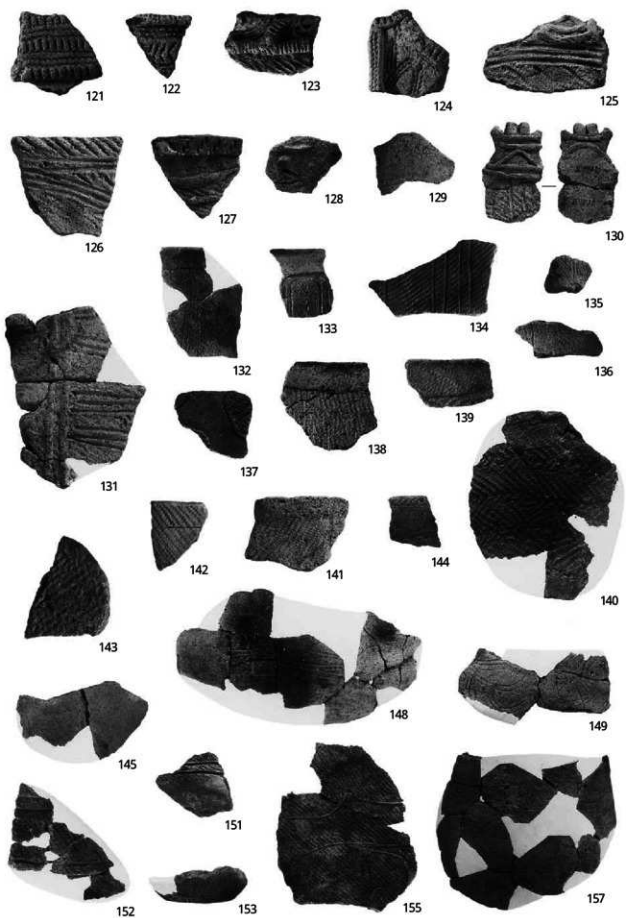


写真 38 第・層出土土器



写真 39 第 層出土石器 (1)

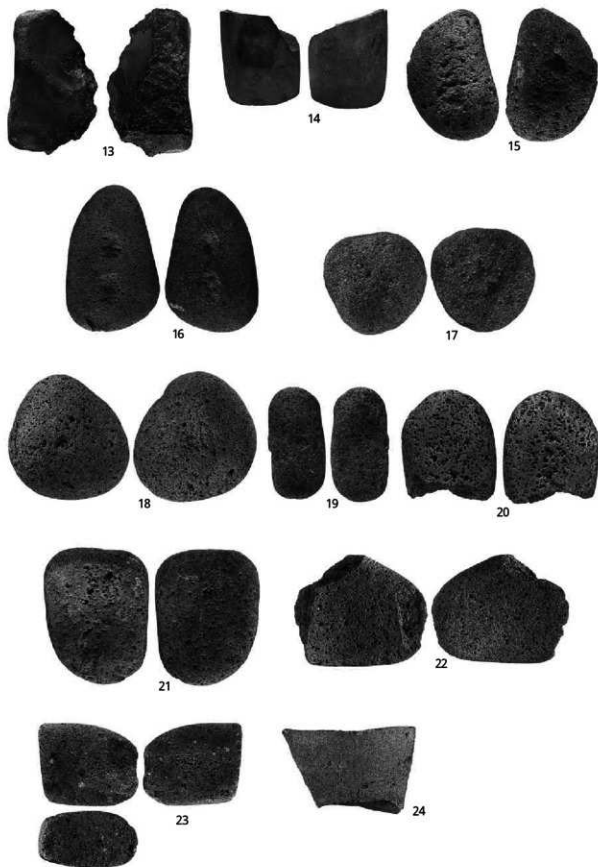


写真 40 第 層出土石器 (2)

第 c 層

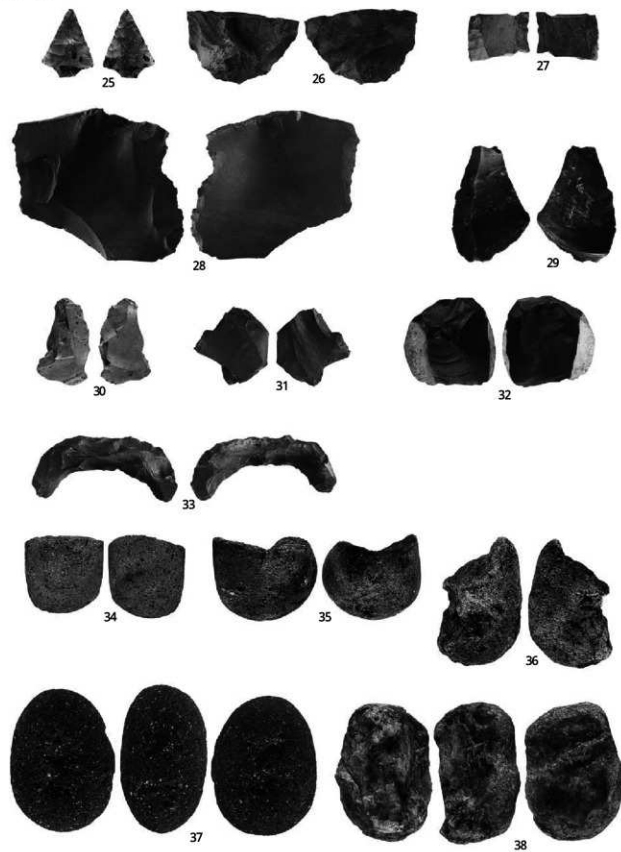


写真 41 第 c 層出土石器 (1)

第 c 層



39



40



41



42



43



44

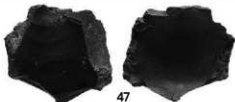
第 b 層



45



46



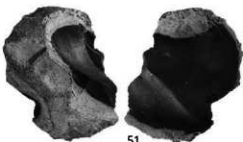
47



48



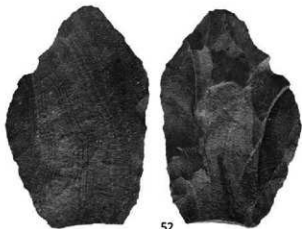
49



51



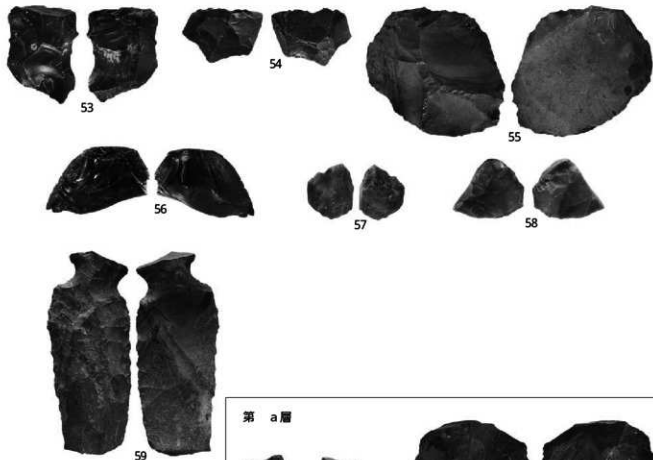
50



52

写真 42 第 層出土石器 (2)

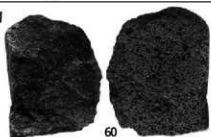
第 b 層



第 a 層



第 b 層



第 a 層

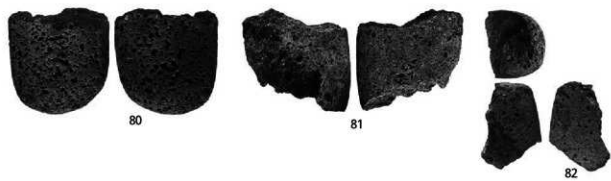


写真 43 第 層出土石器 (3)

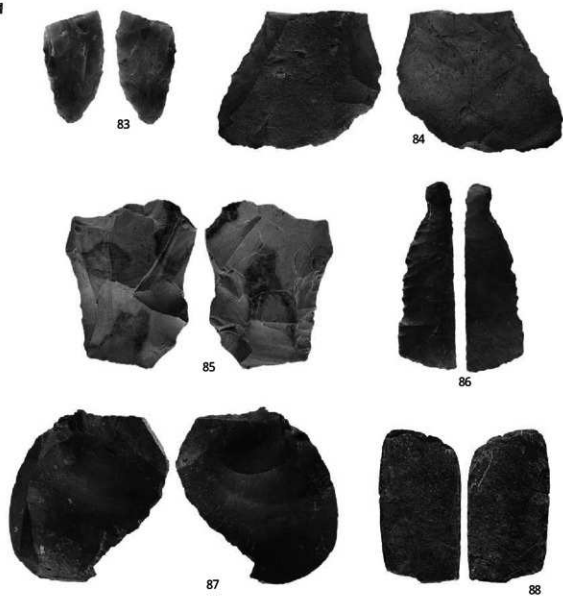


写真 44 第 層出土石器 (4)

第 層



第 層



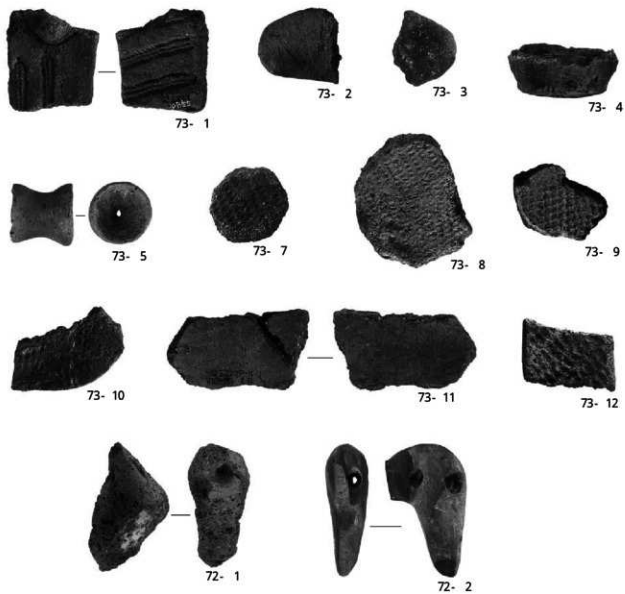


写真 46 遺構外出土土製品・石製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	さんないまるやまいせき
書名	三内丸山遺跡 23
副書名	第23次・26次調査報告書
巻字	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第38集
編著者名	佐々木雅裕・田中珠美
編集機関	青森県教育庁文化財保護課
所在地	青森市新町二丁目3番1号 TEL 017 734 9924
発行年月日	西暦2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号	北緯	東経				
さんないまるやまいせき 三内丸山遺跡	あおもりけんあおもりし おおあざさんないあざまるやま 青森県青森市大字三内丸山	02201	01021	40	140	第23次調査	第23次調査	集落規模・ 変遷解明の ための学術 調査	
				48	42	2002 5 13	1 840㎡		
				40	20	—			
				世界測地系 2000 (G2000)		2002 10 31	第26次調査		
				40	140	2003 5 26			2 691㎡
				48	42	—			
50	07	2003 9 12							

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三内丸山遺跡	集落跡				縄文時代前・中期の地点的集落跡 2地点 (第23・26次踏査) にわたる調査
第23次調査		縄文時代 時期不明	環状配石墓 配石遺構 土坑 埋設土器遺構 道路跡 溝跡	6基 基 10基 壺 漆 漆	縄文時代中期の道路跡と墓域の広がりを確認
第26次調査		縄文時代 時期不明	環状配石墓 土坑 道路跡 溝跡	6基 壺 漆 漆 石器	縄文時代中期の道路跡と墓域の広がりを確認

青森県埋蔵文化財調査報告書第38巻

三内丸山遺跡23

第23次・26次調査報告書

発行日 平成16年 3月31日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県教育庁文化財保護課
〒030 0801 青森市新町 2丁目 3-1
電話 017-734-9924

印刷所 東北印刷工業株式会社
〒030 0902 青森市合浦 1丁目 2-12
